

信濃町の埋蔵文化財

上ノ原遺跡

(第1次・北部高校分校跡地地点)

発掘調査報告書

— 細石刃石器群・石囲い炉をもつ遺跡 —

2008

長野県信濃町教育委員会

上ノ原遺跡

(第1次・北部高校分校跡地地点)

発掘調査報告書

— 細石刃石器群・石囲い炉をもつ遺跡 —

2008

長野県信濃町教育委員会

例　　言

1. 本書は、信濃町柏原地区における畠地開墾事業に先立ち、上ノ原遺跡の記録保存を目的として実施した平成2年度埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、信濃町長の依頼を受けて、信濃町教育委員会が業務を実施した。
3. 発掘調査地籍は、長野県上水内郡信濃町柏原上ノ原183-3、岡実1166-1であり、上ノ原遺跡の範囲内に位置する。
4. 発掘調査期間は、平成2年5月1日に現場作業に着手し、平成2年7月31日に現場作業を終了した。整理および報告書作成のための作業は平成2年8月から平成20年3月にかけておこなった。
5. 発掘調査面積750m²の範囲内において、旧石器時代の遺物を多数確認した。
6. 本書に掲載した地図は、信濃町作成の都市計画図および国土地理院発行の地形図(1/25000)を使用した。
7. 本書で扱っている国家座標は、ことわりのない限り2002年以前の日本測地系(IH測地系)である。国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点(長野県第Ⅲ区、X=0.000、Y=0.000)を基準点としている。
8. 本書作成に至る分担は、下記のとおりである。
整理作業参加者…中村敦子、渡辺哲也、菅沼 真、土橋由理子、中村由克
執筆…菅沼 真(V1・2、VI1、石器図版)、土橋由理子(V3、VI2、石器図版)
上記以外の執筆および編集…中村由克
9. 調査によって得られた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。出土資料の注記番号は、次のとおりである。
上ノ原遺跡 90 UH

目　　次

I 調査の経過	1	1 ナイフ形石器群	16
1 調査に至る経過	1	2 細石刃石器群	16
2 調査体制 発掘調査 報告書作成	1	3 尖頭器石器群	22
3 調査経過	2	VI 成果と課題	28
4 調査方法	3	1 細石刃石器群の特徴	28
II 遺跡の環境	3	2 尖頭器石器群の特徴	30
1 地質・地理的環境	3	3 石囲い炉の存在	32
2 歴史的環境	3	VII 上ノ原遺跡(第1次・北部高校跡地地点)発掘調査のまとめ	33
III 発掘地の状況と調査の概要	5	引用・参考文献	34
1 発掘地の状況	5	資料	36
2 遺跡の地質層序	5	表5 上ノ原遺跡(第1次)出土の主要遺物一覧表	36
3 遺物の出土状況	6	図版	38
IV 旧石器時代の遺構	11	石器図版	38
1 石囲い炉	11	写真図版	65
2 石囲い炉の特徴	11	英文要旨	85
3 その他の遺構	16	報告書抄録	86
V 遺物	16		

I 調査の経過

1 調査に至る経過

野尻湖の位置する長野県上水内郡信濃町には、44ヶ所の旧石器時代・縄文時代草創期の遺跡が確認されており、中部地方でも有数の遺跡密集地として注目を集めていた。平成9年(1997)10月、この地域に上信越自動車道が開通することになり、平成2年(1990)以降、信濃町では緊急発掘が多くおこなわれるようにになった。

とりわけ、野尻地区と柏原地区的境界にあたる寅ノ木には、信濃町インター(IC)が設けられ、長野県埋蔵文化財センターにより大規模な発掘調査がおこなわれた。さらに、インターから長野側の出口にあたる上ノ原をはじめ町内各所で、取り付け道などの関連事業が実施され、主に信濃町教育委員会による発掘調査がおこなわれている。

平成2年(1990)、信濃町(土地開発公社)が土地取得のための代替地とするため、雑木林4,181m²を甘茶畑とする開墾が目的で、今回の調査地が開発されることになった(図1・図2)。信濃町教育委員会では、この場所が遺跡範囲外であったが、遺跡である可能性が予想されたので、同年5月1日に試掘調査をおこない、遺跡であることが判明した。

上ノ原地区的畠地開拓事業にかかわる埋蔵文化財保護に関しては、事業の主体者である信濃町と、文化財保護

について調整・指導する県教育委員会、およびその実務を担当する町教育委員会との間で、次のとおり協議等を実施し、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査の実施に至ったものである。

平成2年(1990)

5月1日 信濃町長より柏原地区の山林開発を行う旨の通知を受け、周知の遺跡の範囲外であったが、信濃町教育委員会が試掘調査をおこなったところ、旧石器時代の石器剥片が出土し、遺跡範囲に含まれることが確認された。

5月1日 信濃町教育委員会と信濃町総務課で遺跡保護協議をおこない、5月1日から発掘調査を行うことが協議された。

5月1日 信濃町長より埋蔵文化財発掘の通知(文化財保護法第57条ノ3第1項)

5月1日 町教委より埋蔵文化財発掘調査の通知(文化財保護法第98条ノ2第1項)

5月7日 上ノ原遺跡の発掘調査に着手

7月31日 発掘調査の現場作業を終了
以降、調査記録および出土遺物整理のため、室内作業を継続

2 調査体制

発掘調査(平成2年度)

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 片山 幹威

事務局 信濃町教育委員会

課長 山崎 功一

社会教育係 係長 原山製穀一

係 池田 昭博

調査担当者 中村 由克

担当職員 池田 昭博

調査参加者

池田せい子、池田祐子、五十嵐ハギノ、小日向キヨ子、片山トヨ、衣川洋、木村キミ子、小林とら、佐藤巴、須藤万治、諫防戸朝治、常田コスイ、常田八代恵、戸谷田哲子、永井早苗、水原シズエ、永原慎一郎、永原友江、永原フジ、永原松乃、中村久美子、中村啓子、中村けさ子、中村浪江、松木正彦、松沢友二、宮尾清子、村田盛信、山田好、酒井俊子

記録: 中村敦子、長谷川桂子、渡辺哲也、土橋由理子、西島彰

報告書作成（平成19年度）

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 小林 豊雄

事務局

教育委員会 次長 静谷 一男

係長 丸山 茂幸

文化財担当者 渡辺 哲也

調査担当者 中村 由克

発掘調査、整理、報告書作成では、次の方々より多くご指導、ご援助をいただいた。

赤羽貞幸、荒川隆史、池田昭博、石川智紀、石塚二侍

子、市川桂子、稻田孝司、上田典男、大竹幸恵、大竹憲昭、小笠原永隆、岡村道雄、小野昭、織笠昭、織笠明子、金山喜昭、熊井久雄、黒岩隆、児玉卓文、小柳義男、近藤洋一、篠原芳郎、酒井潤一、佐々木早苗、澤田敦、白石浩之、新堀友行、菅沼亘、鈴木次郎、鈴木忠司、須藤隆司、砂田佳弘、諭訪間順、瀬川裕市郎、関本真一、高橋哲、高尾好之、谷和隆、立木宏明、辻本崇男、堤隆、鶴田典昭、土橋由理子、中村敦子、新谷俊典、野村哲、花岡邦明、保坂康夫、三上徹也、宮坂清、宮下健司、宮脇正炎、望月明彦、百瀬長秀、森嶋稔、森山公一、渡辺哲也

3 調査経過

平成2年（1990）

5月1日～2日 上ノ原遺跡の試掘調査。

5月7日 上ノ原遺跡の発掘調査に着手。トレンチ掘削、発掘作業。

5月9日 尖頭器、細石刃石器群を確認。グリッド設定。

5月15日 発掘調査でナイフ形石器、縄石刃、細石刃石核、尖頭器など多数の遺物が出土したため、発掘期間を延長することを決定。
遺物の記載取り上げ開始。

5月17日 石器集中区については、発掘区を周辺に拡張する。

5月27日 遺跡現地説明会を開催、45名参加。

5月28日 新潟大学小野昭氏の現地指導。

6月7日 尖頭器ブロックの写真撮影。実測。

6月12日 石圓い炉を確認。

6月13日 石圓い炉を発表。

6月15日 パリノサーベイ辻本崇男氏が見学。

6月16日 長野県考古学会長森嶋稔氏、東海大学織笠昭氏が見学。

6月17日 山梨県保坂康夫氏、静岡県瀬川裕市郎氏、長野県宮下健司氏、大竹憲昭氏、須藤隆司氏、堤隆氏をはじめ考古学研究者19名が見学。

6月19日 遺跡での作業員による掘削を伴う発掘作業はほぼ終了。以降は、記録作成作業。

神奈川県鈴木次郎氏、砂田佳弘氏が見学。

6月20日 遺構の上を農業用ビニールハウスで覆い、7月までかけて遺構の記録をとることを決定。
新潟大学小野昭氏が見学。

6月22日 京都府鈴木忠司氏が見学。

6月23日 岡山大学稻田孝司氏が見学。

6月24日 野尻湖発掘調査団新堀友行氏、野村哲氏、酒井潤一氏ほかが見学。

6月27日 千葉県金山喜昭氏が見学。

7月12日 文化庁岡村道雄文化財調査官が現地指導。

7月15日 石圓い炉の現地説明会。45名参加。

7月19日 遺構全体写真の撮影。

7月27日 石圓い炉の遺構上面を土蓋で覆い、保存する。発掘面の埋め戻し開始。

7月31日 発掘調査の現場作業を終了。

以降、調査記録および出土遺物整理のため、室内作業を継続。

平成7年（1995）

5月29日 上ノ原遺跡第3次調査の測量に並行して、第1次地点の石圓い炉の一部を国家庭園の測量をおこなう。

4 調査方法

1) 調査区の設定と発掘方法

用地内では抜根した木の根を埋めるために、L字形の用地のほぼ中央に溝を掘るという計画であった。そこで、溝の予定地を表土、柏原黒色火山灰層を重機で掘つてもいい、遺構・遺物の確認作業に入った。この結果、旧石器時代の遺物が出土することが確認されたので、溝予定地の全域を発掘対象とした。

発掘区画は、5m×5mのグリッドを基本として、国

道に平行したトレーニングの中央をB列とし、これに直交する旧北部高校校舎に沿ったトレーニングの中央を17列とした。この中で遺物集中区の3ヶ所については、周囲にグリッドを拡張した(図3)。このため、上ノ原遺跡第1次調査のグリッド系は真北から西へ $29^{\circ}16'38''$ 傾いている。

なお、1993年に設定した上ノ原遺跡の区画では、4区のうちFGHKL区に属している。

II 遺跡の環境

1 地質・地理的環境

信濃町は長野県北部にあり、新潟県境に接する。町域は東西に3つの地形に区分される。東部は、第三紀鮮新世～前期更新世の砂岩・泥岩などの堆積岩が分布するなどだらかな基盤山地である。これらの上位を斑尾山起源の安山岩類が被っている。野尻湖はこの基盤山地の中に位置している。

西部には、中・後期更新世の飯縄山・黒姫山の火山岩類がつくる火山地形が分布している。飯縄山の東麓から野尻湖の南方には、緩やかな地形の丘陵地がひろがる。これらの丘陵地は、上述の野尻湖のまわりの小起伏とあわせて、鼻見面(井上1962)ないし鼻見面群(豊野田研1969)とされたもので、中期更新世の飯縄山・黒姫山等の火山活動以前に形成されていた侵食平坦面であると思われる。

これら東西の山地に挟まれた中央部には、水田や集落が分布する低地帯がひろがっている。丘陵は後期更新世

の泥流堆積物などからなり、段丘は後期更新世の湖沼・河川堆積物からなり、低湿地は後期更新世末から完新世にかけての湖沼・河川堆積物からなっている。

黒姫山東麓と野尻湖を源とする信濃町北部の山桑川、赤汲川、池尻川は関川水系に属し、北方に流下して上越市で日本海に注ぐ。一方、長野市戸隠を源とする鳥居川は、黒姫山と飯縄山の間を東に流れ、信濃町古間で南東から南に方向を変えて、長野市豊野町で千曲川に合流する信濃川水系に属す。これら両水系の分水嶺は、信濃町柏原の低地ないし丘陵地の中に位置するため、信濃町の中央部にはだらかな高原地形がひろがっている。

上ノ原遺跡がある柏原地区の上ノ原付近は、後期更新世の黒姫山起源の火山流下物の上に、湖成層が分布し、それらを覆って野尻ローム層などの風化火山灰層が堆積している。

2 歴史的環境

信濃町は長野県から新潟県にむける交通路に位置し、近年では北国街道や信越本線、国道18号線、上信越自動車道といった内陸側と日本海側をむすぶ主要幹線路が通過している。このような交通の要所となった背景には、

黒姫山などの第四紀火山と野尻湖のまわりの基盤山地とのあいだに形成された、山間地では比較的珍しい平坦地が高原状に続く地形の特徴によるものである。このため、起伏の少ない越えの通路となっており、また、信

州の中心地である長野盆地や上田盆地から最短距離で日本海（上越市）に通じる路線として、古くから利用されてきた。

信濃町には現在、173ヶ所の遺跡が知られている。この大半が、信濃町中央部の低地帯と東部の基盤山地の中の丘陵上や谷沿いに分布する。これらの遺跡は、旧石器時代中期から中世・近世に至るものであるが、その時代には大きな特徴がある。

第1は、旧石器時代の遺跡が野尻湖の西部から南方の丘陵地を中心に数多く分布することである。野尻湖西岸を中心とする旧石器時代の遺跡群は、野尻湖遺跡群と呼称されている。現在までに、信濃町では約44ヶ所の遺跡が知られている。

野尻湖立が鼻遺跡は、中期旧石器時代末の約48～33万年前の遺跡で、大量のナウマンゾウ、ヤベオツノジカなどの大型の哺乳動物化石とともに石器や骨器が出土することで有名である。一般的な住居地（集落）の要素がみられないことから、狩猟解体場遺跡（キル・ブチャリング・サイト）と考えられている。

仲町遺跡は、後期旧石器時代の全期間、さらに縄文時代以降へとつながる野尻湖遺跡群のなかでの中核的な遺跡である。

これに対して、上ノ原遺跡、貢ノ木遺跡、東裏遺跡、日向林B遺跡、黒馬台遺跡などの主要な後期旧石器時代の遺跡は、ほとんどが丘陵地に分布し、約3万年前のナイフ形石器文化のはじめごろの段階以降に遺跡が形成されたものである。

第2は、信濃町域では、旧石器時代から引き続いて縄文時代前期までは、遺跡の分布が多くみられるが、縄文前期後半の諸礎式期より後、中期になると遺跡数は急激に減少する。この傾向は、弥生時代・古墳時代・奈良時代とつづく。

第3は、ふたたび信濃町域に遺跡が増えるのは、平安時代以降である。現在、信濃町の集落のある場所の多くは、平安時代の遺跡と重なっている場所があり、平安時代以降、町内の各地に集落が形成されてきたことが推察される。

以上のような遺跡分布の特徴がみられるが、近隣の市町村と比較すると、旧石器時代の遺跡が多いこと、縄文時代中期以降の遺跡が少ないと、そして遺跡数とその密度は近隣地区にくらべてかなり高いことが特徴される。

最初に記した信濃町の交通路の要所としての特徴は、平安時代以降、顕著になったものと思われる。延喜式に記録されている東山道の支路は、信濃町をとおり、沼辺駅（ぬへのうまや）は、仲町遺跡が有力と考えている。町内の主要部（野尻新町、柏原、古間、穂波の間）は、現在の国道18号線におおむね沿って江戸時代の北国街道が通じているが、東山道も北国街道に近い場所を通っていたと推定される。

信濃町中央部の柏原地区には、旧石器時代以降の遺跡が分布する。旧石器時代の遺跡としては、東裏、裏ノ山、伊勢見山、小丸山公園、上ノ原、緑ヶ丘、大久保南、西岡A、西岡B、貢ノ木などの遺跡がある。この地区内で最初に旧石器時代遺物が採集されたのは緑ヶ丘遺跡で、1942～43年ごろ大平在住の小林彦氏が彫器を発見し、1960年代になって森鶴穂氏、小松慶氏らに鑑定されている。

1958年には黒姫山麓の仁之倉遺跡で、町内最初の考古学的発掘調査がおこなわれた（中村1988）。前年の開墾により繩文土器などが大量に出土したことがきっかけで、縄文時代早期条痕土器、前期諸礎式土器、中期堀ノ内I式土器、晚期佐野II式土器などがえられている。

伊勢見山遺跡は上水内北部高校教員の小林学氏が山頂近くの畠地から旧石器時代の遺物が出土することを確認し、1963年11月に國學院大學樋口清之氏、小林達雄氏らによって発掘調査がおこなわれ、ローム層中に上下2層の石器群が出土した。

1988年には柏原町区誌が刊行され、その一環として柏原地区の遺跡分布調査を実施した（中村1988）。この結果、上ノ原遺跡と小丸山公園遺跡が新しく発見され、また遺跡範囲が明らかとなり、野尻地区と並んで柏原地区も旧石器時代の遺跡密集地であることが判明した。

1990年からは、町事業や民間店舗建設で上ノ原遺跡、東裏遺跡、役屋敷遺跡が、1993年からは高速道建設とアクセス道路関連で東裏、裏ノ山、大久保南、上ノ原、西岡A、西岡B、貢ノ木などの遺跡が相次いで発掘調査され、後期旧石器時代初頭の石斧・台形石器の石器文化から縄文時代早・前期および平安時代以降の遺構・遺物が多数、発掘された。

なお、信濃町域における遺跡分布図、遺跡一覧表及び発掘調査年表については、「上ノ原遺跡（第5次・県道地点）」（2008）P. 9～12を参照されたい。

III 発掘地の状況と調査の概要

1 発掘地の状況

上ノ原遺跡は信濃町柏原地区の字上ノ原を中心として、一部、岡実、西岡、毛無などの地籍に所在する。上ノ原遺跡は野尻湖南南西方の信濃町柏原の北部に位置し、国道18号線にそったなだらかな丘陵の頂部にひろがる遺跡である。北西—南東の長軸方向の長さが約900m、幅250～500mで、面積約330,000m²におよぶ信濃町でも有数の面積の遺跡である。

この付近では国道18号線が標高698～708m前後のほぼ等高線沿いに走っていて、浅間山麓の小諸市以西から日本海の上越市までの間では、最高地点となっている。地形は高原状の平坦地であるが、西向きの緩斜面となっている。遺跡北端の旧北部高校分校跡地より南側では上越市に流れる関川—赤水川系に属し、高校跡地より北東側と遺跡南部では、新潟市および守泊町に流れる信濃川—千曲川—鳥居川水系に属し、この遺跡付近がこれらの分水嶺となっている。

国道沿いには住宅や店舗が建てられているが、それより奥は主に畠地と一部は山林となっている。今回の第1次調査は、信濃町（土地開発公社）が土地取得のための代替地とするため、雜木林4,181m²を甘茶畑とする開墾が目的でおこなわれたものである。調査面積は約750m²であった。

上ノ原遺跡では、これまで7次にわたる発掘調査と個人住宅の調査および高速道関連の調査等が実施されている。主な調査の位置と概要是次のとおりである（図1）。

なお、第1次調査については中村（1992・1993）で一部紹介したが、調査成果については本報告書の内容が優

先する。

- 第1次調査（1990） 4区FGHKL 農地造成（町開発公社） 細石刃石器群・尖頭器石器群 本報告書
第2次調査（1993） 6区C～E, G～I 町道柏原幹線
1号線（現在・県道杉野沢—黒姫停車場線） ナイフ形石器群（杉久保石器群） 尖頭器石器群
中村・岩瀬（2008）
第3次調査（1995） 4区UV 信濃町消防分署出土品少ない（旧石器時代洞片・縄文時代集石出土）
第4次調査（1995） 7区QRV 信濃自動車（スタンド） 縄文時代草創期、旧石器時代の尖頭器石器群
中村・渡辺（1996）
須藤氏住宅地点（1995） 8区B 個人住宅 ナイフ形石器文化（黒色帶文化層） 中村・渡辺（1996）
高速道地点（1994・1995） 黒色帶文化層、尖頭器石器群 土屋・谷編（2000）、土屋・中島編（2000）
第5次調査（1995～1997） 12区QRUVW・14区AB
主要地方道信濃佐州新線 ナイフ形石器群（杉久保石器群・瀬戸内系石器群、上II最下部文化層）、尖頭器石器群 中村・森先編（2008）
第6次調査（1997） 1区・2区・4区 帝国石油ガスパイプライン ナイフ形石器群（上II最下部・上II上部）、細石刃石器群 渡辺（2007）
第7次調査（1997） 2区 町道大平大久保線 ナイフ形石器群（上II最下部・上II上部）
中村・渡辺（1998）

2 遺跡の地質層序

発掘地は、国道18号線に沿った丘陵地にある。調査地は国道東側の畠地に隣接する林だった場所で、南東側が最も高く標高710mで、北に向かって標高が低くなり、北西端で標高705mとなる。さらに北側は、大久保池周辺の低湿地から賀ノ木に東西方向にひろがる低地に続

く（図2）。

発掘地が立地する丘陵には、池尻川岩屑なだれ堆積物が地下にあり、その上を水成の賀ノ木層、風成の神山ローム層、野尻ローム層などの後期更新世の地層が被い、さらに地表付近には真っ黒な色が特徴の柏原黒色火山灰

層が接着している。

発掘地では、上部野尻ローム層Ⅰから上の地層を確認し、上部野尻ローム層Ⅰ最上部の黒色帯より上位の地層を発掘対象とした。(図6)。

発掘地の標準的な層序は、以下のとおりである(図6)。
下位より20cm±の上部野尻ローム層Ⅰ、42cm±の暗茶褐色風化火山灰で中央に4cmのやや明るい茶褐色風化火山灰をはさむ黒色帯、10cmの軟質で暗黄褐色風化火山灰層・上Ⅱ最下部、30cmの黄褐色風化火山灰層・上Ⅱ上部・下部、10cmの暗黄褐色風化火山灰層・モヤ下部、20~25cmの黒褐色風化火山灰層・モヤ上部、黒味の強い柏原黒色火山灰層約30cm+で、すべて風成相で欠如なく

堆積している。

遺物包含層となっていたのは、主にモヤ下部である。柏原黒色火山灰層の約2/3と表土は重機で取り去っている。いずれも礫などを一切含まない安定した風成堆積物の層相を示している。

上Ⅱ最下部に挟まれるヌカは、鹿児島県姶良カルデラ起源の姶良一丹沢火山灰(AT)に対比され、およそ25,000年前(未較正)とされている。

上ノ原遺跡のこのような層相からみて、この付近は後期更新世から完新世にかけて比較的安定した丘陵の環境にあったことがわかる。

3 遺物の出土状況

上ノ原遺跡第1次調査では、旧石器時代の細石刃石器群、尖頭器石器群を中心に2,932点の遺物が出土した(表1)。ほとんどはモヤ下部文化層に属するものであり、上下方向への遺物の拡散は野尻湖遺跡群の中ではあまり大きくなく、レベル的には比較的安定した傾向がみられる。

今回調査の出土遺物の大部分は旧石器時代のものである。旧石器時代では細石刃石器群と尖頭器石器群が確認されたほか、わずかにナイフ形石器群が出土している。

B6グリッド周辺： 上Ⅱ上部文化層、ナイフ形石器文化。径2mの範囲内に黒曜石製の剥片、碎片約20点が出土した。ナイフ形石器1点を含む。

C13グリッド周辺： モヤ下部文化層、尖頭器石器群。12×9m以上の範囲内に、1,735点の遺物が集中していた(図5)。槍先形尖頭器58点、スクレイパー15点のほか、若干の剥片を含むものの、大半は尖頭器製作に伴う1~2cm程度の碎片であった。石材は無斑晶質安山岩が中心で、これ以外に黒曜石、珪質凝灰質頁岩、チャートなどがわずかに用いられている。

礫群が3基検出されている。

G17グリッド周辺： モヤ下部文化層、細石刃石器群。15×15mの範囲内に830点の遺物が出土した(図

4)。主な遺物としては、細石刃石核24点、細石刃7点、局部磨製石斧1点、彫器6点、搔器・削器21点、敲石6点、磨石1点などが得られている。このブロックの北側には、配石1基が検出された。南部には、5基の石囲い炉が直線状にならんで検出された。遺物は石囲い炉のまわりを中心に集中しており、北側には少なかった。石囲い炉、配石造構とともに、仮面はモヤと上Ⅱ上部の黄褐色ローム層の境界付近に位置しており、また、遺物も上下方向への拡散は他の場所と比べると少なかった。このブロックは、さらに南側にひろがると予測される。

L16グリッド周辺： モヤ下部文化層、細石刃石器群。13×10mの範囲内に367点の遺物が出土した(図4)。主な遺物としては、細石刃石核15点、細石刃33点、搔器・削器8点などがある。このブロックの北側より完形の槍先形尖頭器1点(228)が黄褐色ローム層上~中部に斜めに立った状態で発見された。また、黒曜石製の杉久保型のナイフ形石器1点がモヤ上面付近から出土したが、関連遺物は伴わなかった。

このブロックは、遺物の上下方向の搅乱が多くみられ、黒色帯直上まで遺物が出土した。遺物分布からは、さらに北西方向にブロックがひろがるものと推測される。



図1 上ノ原道路（第1次・北部高校分校跡地地点）の位置

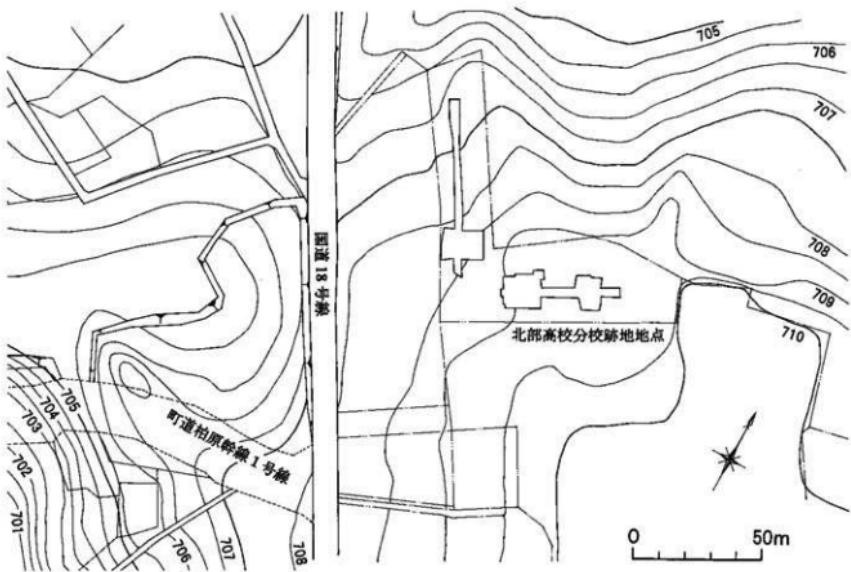


図2 上ノ原道路 第1次・第2次調査地点付近の地形（単位：m）

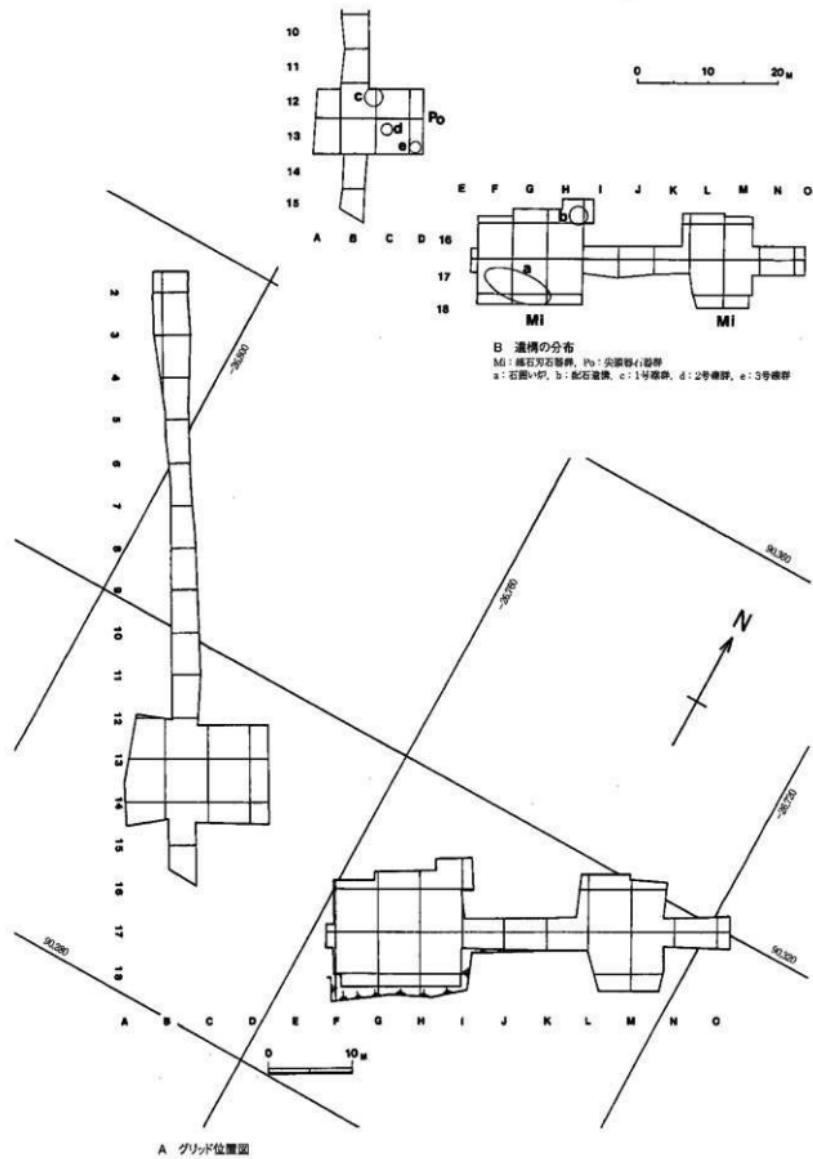


図3 上ノ原遺跡（第1次）のグリッド位置図と遺構の分布

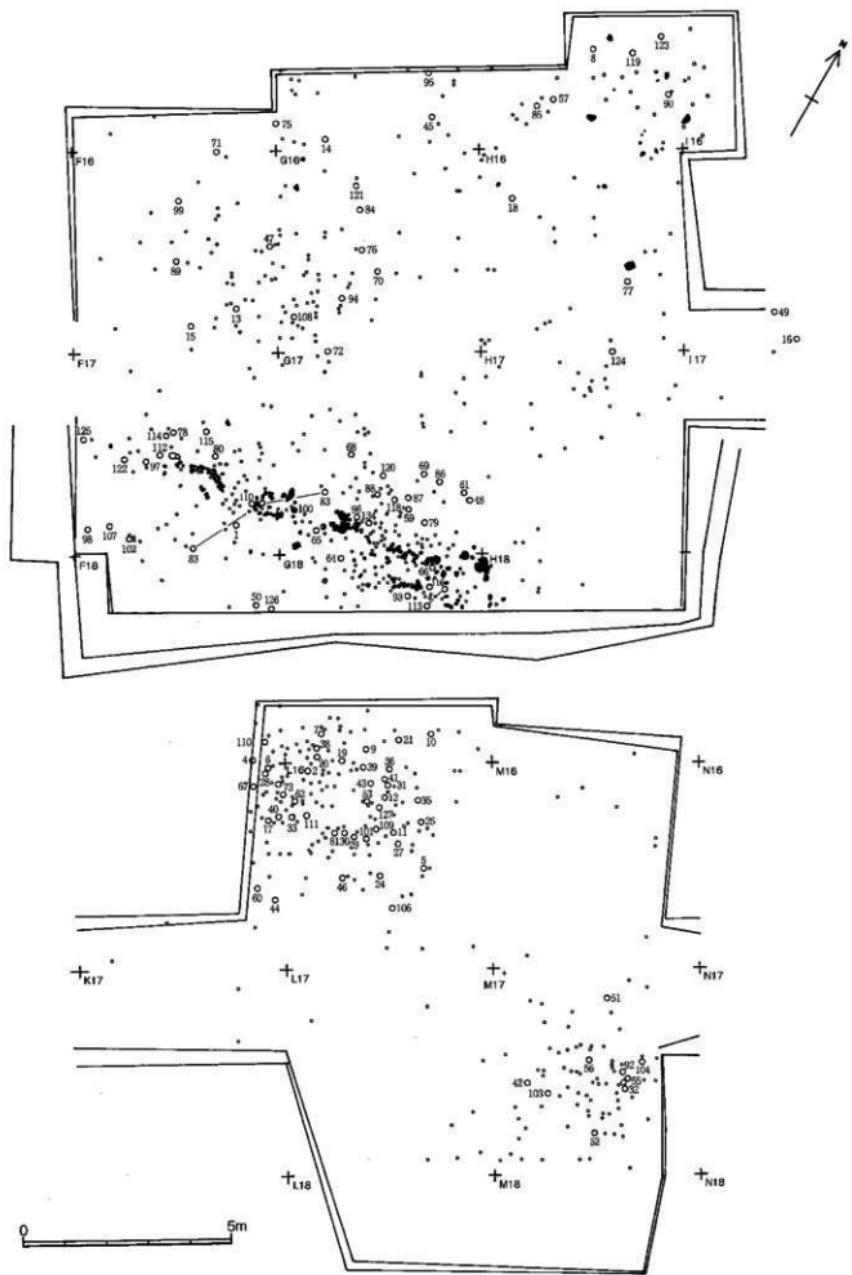


図4 細石刃石器群の遺物分布図

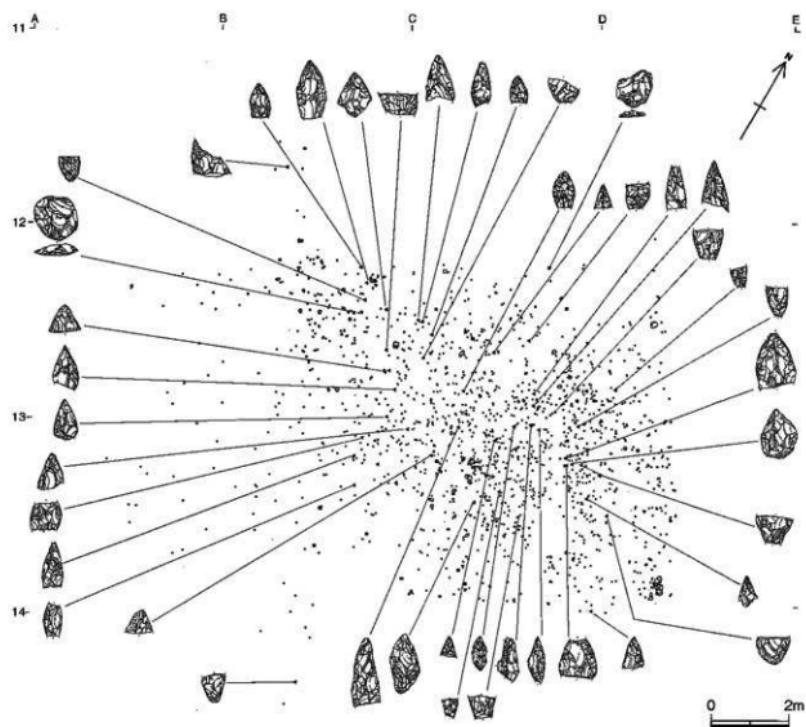


図5 尖頭器石器群の遺物分布図

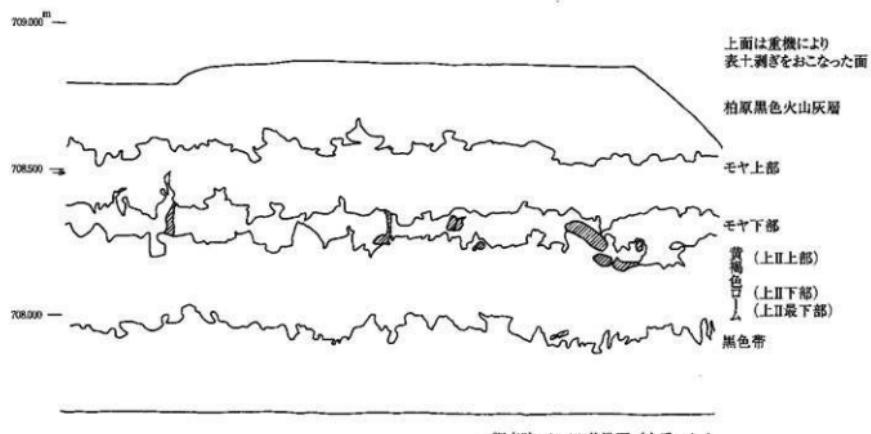


図6 上ノ原遺跡（第1次）の地質層序（斜線部は擾乱）

IV 旧石器時代の遺構

1 石圓い炉

石圓い炉はF17、G17、G18、H18グリッドにかけて、長さ9m、幅1.6mの範囲内に、ほぼ東西方向に一列にならんで5基が検出された（図7—図9）。西側の1号より順に記載をおこなう（表2）。

1号炉址： 165×75cmの不整縁円形で、34個の礫から構成される。このうち、長さ105cmと長さ40cmの部分が一列にならび、「こ」の字状に配列している。両者の間は30cmあいている。礫は8～13cmの円～亜円レキを主体とし、西端に19×16cmの巨礫1点が位置する。

2号炉址： 80×70cmのほぼ円形の部分が主体となっており、34個の礫からなる。礫は7～14cmの円～亜円レキを主体とし、北端に33×12cmの巨礫が立って置かれている。立った状態の礫が26%を占めている。この炉址の西部部分の構成礫に隣接して、炉址の内部に局部磨製石斧の刃部破片が出土した。

3号炉址： 140×60cmの半縁円形の部分を主体とし、30個の礫で構成される。礫は6～13cmの円～角レキか

らなり、西端には長径27cmと32cmの巨礫が配置されている。1号炉址と似た形態であるが、礫の配列は1列のみである。巨礫の内側（炉内部）側面は焼けて著しく赤化している。黒色付着物のついた礫が47%あり、高い比率を占める。

4号炉址： 140×100cmの不整縁円形で、53個の礫から構成される。長さ130cmと90cmの2列の部分からなる。礫は7～14cmの円～亜円レキからなり、東西の端に16cmと20cmの巨礫が置かれている。2列の間は約50cmあっている。この炉址は、焼礫83%、立った礫36%と高い比率を占めている。

5号炉址： 160×160cmの範囲内に、24個の礫が散在する。8～28cmの亜円レキ～亜角レキを主体とする。とくに、北側に15～28cmの巨礫が5個接している。5基の中では最も保存状態が悪いものであり、当初の形状は不明である。

2 石圓い炉の特徴

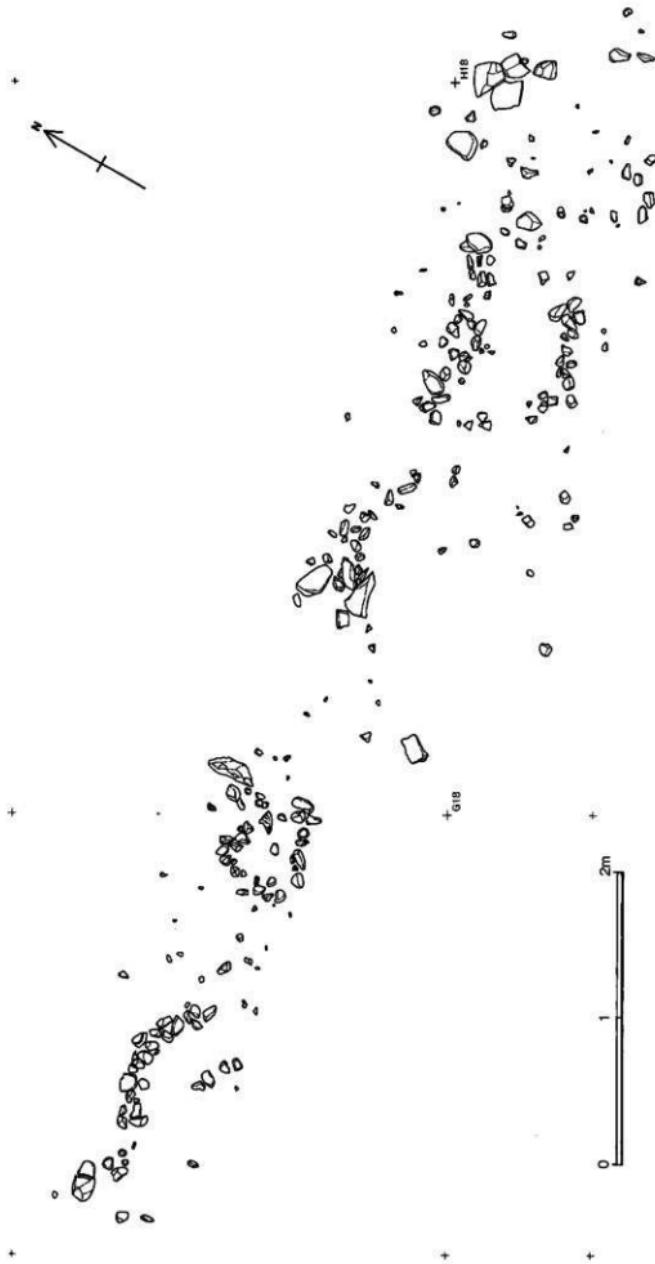
上ノ原遺跡第1次調査で出土した石圓い炉5基は、G17グリッド周辺のブロックに東西の方向性をもって配列している。また、各炉址の中でも、礫の配置は東西方向が中心であることから、これら5基は別々のものではなく、関連をもって構築されたものと考えられる。

炉址の中では、1号のやや大形で不整縁円形「こ」の字状を呈するものと、2号の小形で円形に近いものの2タイプが認められる。5基全体で175個の礫が用いられているが、そのうち焼礫は118個、67%、黒色付着物の付いた礫66個、38%、そして立った状態の礫45個、26%といずれもかなり高率を占めている。

石器類は石圓い炉を中心とする幅3mほどの帯状の部分に集中する傾向が認められる。炉址内に焼土や大きな炭化物は認められなかったが、小粒（1～3mm）の炭化物は炉址を中心とする帯状分布の傾向があり、また大粒（5～10mm）の炭化物は炉址の直近くにみられた。

炉址を中心とする集中部分の遺物は、スクレイパーがめだって多くあり、また、細石刃石核を含む石核や敲石が多く集まっていた。これに対して、細石刃は少なく、石器組成に顯著な特徴がみられた。遺物はゆるい傾斜地にあるので、焼土、炭化物や小さい遺物は流されてしまった可能性も検討する必要がある。

図7 石塙いが 周辺図



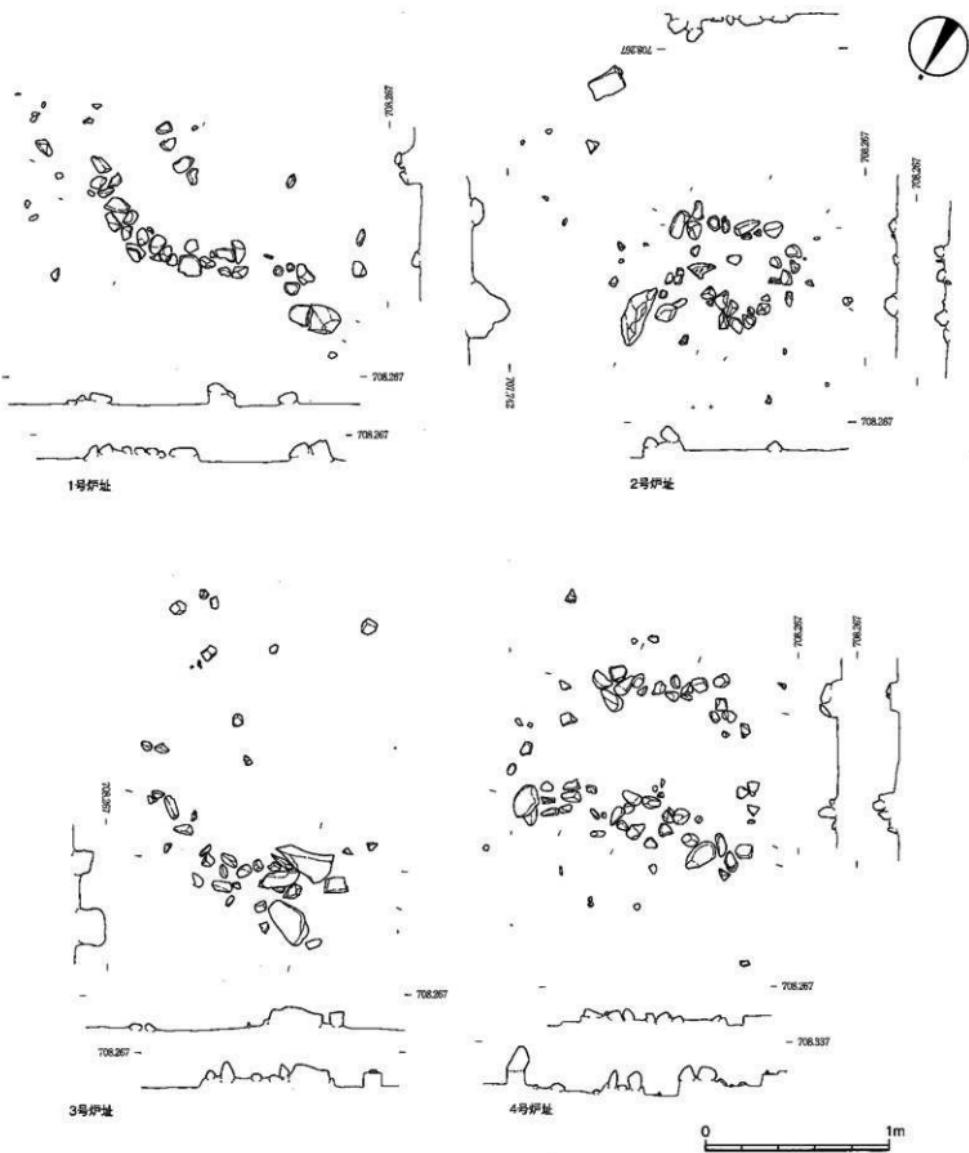


図8 炉址の実測図 (1)

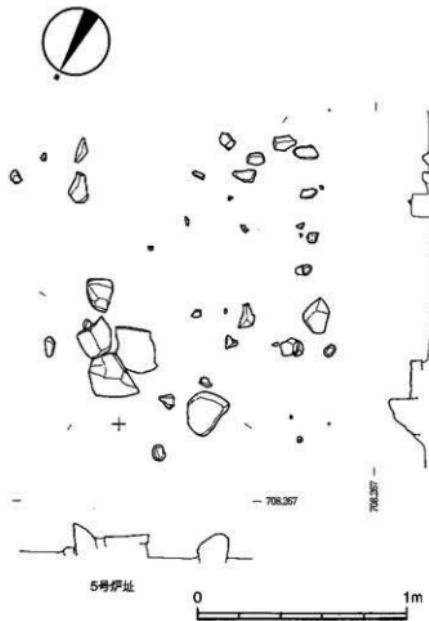


図9 炉址の実測図(2)



図10 配石遺構

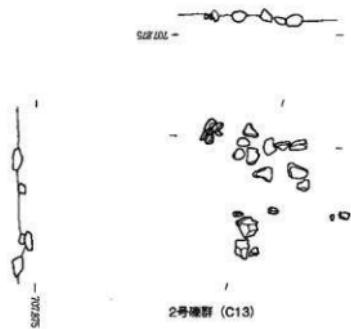


図11 墓群の実測図

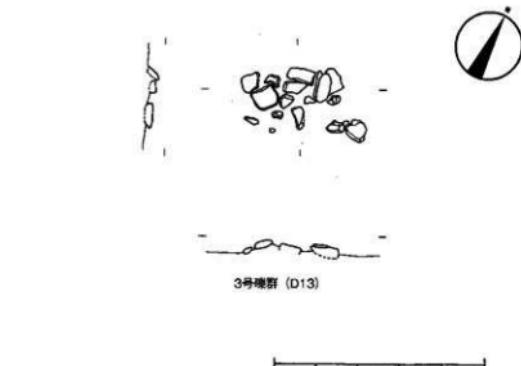


図12 墓群の実測図

表1 上ノ原遺跡(第1次・北部高校分校跡地地点)の出土遺物点数(単位:点)

区画	グリッド	点数	区画	グリッド	点数	区画	グリッド	点数	区画	名稱	点数
B列	B 4	1		F15	5		J 16	2		1号炉址	34
	B 5	4		F16	48		J 17	1		2号炉址	34
	B 6	20		F17	113		K 15	14		3号炉址	30
	B 7	2		F18	9		K 16	38	石圓い炉	4号炉址	53
	B 8	1		G15	27		K 17	2		5号炉址	24
	B 9	0		G16	71		L 15	46			
	B10	1		G17	143		L 16	140			
	B11	8		G18	87		L 17	17			
	B12	211		H15	44		L 18	0			
	B13	166	17列西	H16	40	17列東	M15	1			
	B14	5		H17	32		M16	11			
	B15	0		H18	11		M17	89			
	A12	14		I15	4		M18	0			
	A13	15		I16	1		N16	1			
	C12	372		I17	3		N17	4			
	C13	653		E16	3		O16	1			
	D12	62		E17	14		O17	0			
	D13	200									
	合計	1,735			655		合計	367	総合計		2,932

表2 上ノ原遺跡石圓い炉の礫の特徴

	種類	礫の円周度	焼焦数	黒色付着物 率	立った礫数	割れ率
1号炉址	34	円～亜円レキ 4	20 59%	12 35%	7 21%	14 41%
2号炉址	34	円～亜円レキ 4	22 65%	13 38%	9 26%	12 35%
3号炉址	30	亜円レキ 3.6	17 57%	14 47%	7 23%	17 57%
4号炉址	53	亜円レキ 3.8	44 83%	23 43%	19 36%	14 26%
5号炉址	24	亜円レキ 3.4	15 63%	4 17%	3 13%	13 54%
合計	175	亜円レキ 3.8	118 67%	66 38%	45 26%	70 40%

表3 旧石器時代における石圓い炉の属性一覧表(中村1993)

No.	遺跡名	形状	大きさ (a)	種類	個数	焼土	炭化物	炉心剥離化	備考
(縄石刃文化)									
1	休場1号	この字状	180X100	20~40	14	+	+	内面炭化物	
2	休場2号	半円形	50	15~30	7	-	-	内面炭化物	
3	上ノ原1号	この字状	165X75	8~13	34	-	+	+	
4	上ノ原2号	円形	80X70	7~14	34	-	+	+	
5	上ノ原3号	この字状?	140X60	6~13	30	-	+	+	
6	上ノ原4号	この字状	140X100	7~14	53	-	+	+	
7	上ノ原5号	?	160X160	8~28	24	-	+	+	
(尖頭器文化)									
8	竹ヶ1号	U字状	90X70	10~20	20+	+	+	+	
(ナイフ形石器文化)									
9	野台1号	円形	60	幼児の頃大	15	-	-	+	
10	野台2号	この字状	60X40	幼児の頃大	9	-	-	+	
11	清水綱北	ほぼ円形	150	10~20	10	+	+	+	
12	柳沢C	この字状?	90X85	30~12	7	-	-	-	熱残留化+
13	下長瀬上野	U字状	70X60	10~30	12	+	-	+	
14	鹿原	半円形	40X35	10	10	++	+		
15	日ノ岳I1号	この字状	70X50	こぶし大	12±	-	-	+	
16	日ノ岳I2号	?	60~70	-	-	+	+	+	
17	日ノ岳II3号	?	60~70	-	-	+	+	+	
18	日ノ岳III層	この字状?	50	こぶし大	8±	-	-	+	
19	鶴音洞B1	土壙炉	50+	30	5	-	-	+	土壤
20	鶴音洞B2	土壙炉	50+	30	3	-	-	+	土壤

3 その他の遺構

配石遺構

H15グリッドではI15グリッドにかかる、径2.5mの範囲に5~23cmほどの礫16点が散在する配石遺構1基がある(図3・図10)。周辺には細石刃石器群がみられるので、細石刃期のものと推定される。

礫群

C13グリッド周辺ブロックに礫群3基が検出されている。西側より1号～3号とする(図3・図11)。

1号礫群： B・C12グリッド、径3mの範囲内に、5~10cmの礫約40点が散在する。

2号礫群： C13グリッド、径80cmで、5~10cmの礫

約24点が集中する。

3号礫群： D13グリッド、径70cmで、5~10cmの礫約19点が集中する。

構成礫はいずれも安山岩の角～亜円レキを中心で、大きさや形はそろっていない。焼かれて赤化した礫が多く含まれることが特徴である。

このブロックは3基の礫群を中心にした尖頭器製作に伴うものである。遺物は柏原黒色火山灰層の下部から黒色帯直上まで出土するが、礫群の礫の下面はすべてモヤ下部下面付近であることから、この層準が本米の生活面と判断した。

V 遺 物

1 ナイフ形石器群 (石器図版15)

127は杉久保Ⅲナイフ形石器の基部で、L16グリッドより出土している。黒曜石製の細身の石刃を素材とし、平面形は柳葉形を呈するものと推定される。背面の基部

両側縁に調整が行われ、基部は鋭く尖る。また、腹面の基部端には、わずかであるが裏面基部加工が観察される。なお、これに関連する資料は他に出土していない。

2 細石刃石器群 (石器図版1-15)

細石刃石器群の石器は、主にG17グリッド周辺とL16グリッド周辺より出土している。その内訳は、細石刃41点、細石刃石核41点、局部磨製石斧1点、彫器6点、搔器・削器30点、敲石6点、石核1点などである。なお、F17・G17グリッドより出土している局部磨製石斧について以下に記載しているが、細石刃石器群とは分離して考える。詳細については後述する。また、各石器の計測値については、観察表(表5)を参照願いたい。

a) 細石刃 (1~41)

41点確認されている。残存部位別の内訳は、完形6点(1~6)、頭部(末端部欠損含む)15点(7~21)、中間部17点(22~38)、末端部(頭部欠損含む)3点(39~41)である。各部位の割合は完形14.6%、頭部36.6%、中間部41.5%、末端部7.3%で、頭部と中間部で約8

割を占める。石材は13の珪質凝灰質頁岩を除いて、その他はすべて黒曜石である。

5・6・17~20・33~35・38・41の側縁には、細かな二次加工が観察される。二次加工のあり方には、背面に施されるもの(5・17~19・33・34・38)、腹面に施されるもの(20・41)、両面に施されるもの(6・35)がある。特に、6は腹面に面的な加工が施されている。また、21・28・36・38の背面左側縁には、いわゆる稜上調整痕が確認できる。

頭部が残る1~21の打面を観察すると、4・3・17は平坦打面、1・2・9は調整打面である。その他は打面が点もしくは線状で小さく、どちらであるか不明である。

なお、1~4・6は細石刃剥離の初期段階のものと推

定される。

b) 細石刃石核 (42 ~ 82)

欠損品などを含め41点確認されている。これらはいわゆる野岳・休場型細石刃石核の範疇に入るもので、素材および石核調整の有無などから、以下のA~D類に分類した。

A類：剥片もしくは分割礫を素材とする。石核調整は観察されない。打面調整が施されるものと、施されないものがある。

B類：小形礫もしくは分割礫を素材とする。石核調整が観察される。打面調整が施されるものと施されないものがある。

C類：剥片もしくは分割礫を素材とする。その分割面を打面として石核調整が施され、器体が舟底形を呈する。

打面調整は見られない。細石刃の剥離が進むと、器体が円錐形に近づく。

D類：上記以外のもので、細石刃の剥離が全周におよび、器体が真正な円錐形を呈する。

なお、上記の分類はあくまでも残核の観察に基づくものであるため、それぞれが細石刃製作段階の差を示している可能性が高い。石材は47・48が珪質凝灰質頁岩、74が珪質凝灰岩、その他は黒曜石である。

42~48はA類である。42は分割礫素材と思われる。右側面に素材の風化面、背面には分割面が残る。打面は細石刃剥離面方向からの單一剥離面で、調整は見られない。細石刃の剥離は両側面の一部まで進む。

43は剥片素材で、左側面に素材の腹面を残す。打面は緩やかに内済し、右側面方向からの分割によって形成されている。打面調整が観察される。細石刃の剥離は側面にもおよぶが、右側面の剥離はヒンジフラクチャーを起こしている。

44は小形の礫素材で、両側面に素材の風化面を残す。打面調整が入念に行われている。また、右側面を打面として、背面でも細石刃が剥離される。右側面に見られる調整痕は、これに伴う打面調整である。

45は分割礫素材で、左側面と背面に分割面、右側縁に自然面を残す。細石刃剥離面と両側面方向から打面調整が行われるが、末端がヒンジフラクチャーとなっている。また、打面上の背面に接する部分に見られる細石刃剥離面方向からの剥離痕は、打面調整が行われる以前の打面である。

46は剥片を素材とし、左側面にその腹面、右側面に背面を残す。正面と背面で細石刃の剥離が行われている。打面は背面に向かって傾斜し、背面の細石刃剥離面のバルブが切られていることから、この打面は再生打面である。打面再生後に正面方向から調整が行われる。また、正面の細石刃剥離面に見られる両側面方向からの剥離は、そこに生じたヒンジフラクチャーを除去するためのものと思われる。

47は剥片素材で、左側面にその背面、右側面に腹面を残す。側面方向からの分割により打面が形成され、小口にあたる部分から細石刃が剥離されている。上下に打面をもち、どちらも打面調整が行われる。また、上下いずれの方向からの細石刃剥離もヒンジフラクチャーを起こしている。

48は剥片を素材とし、左側面にその腹面、右側面に背面、背面には分割面が残る。打面は右側面方向からの分割によって形成され、調整が行われている。細石刃剥離痕は1条のみである。

49~57はB類である。49は小形の礫素材と思われる、背面に自然面を残す。打面には細石刃剥離面方向からの調整が頻繁に行われる。また、背面には石核調整が観察される。

50は右側面と背面に大きく自然面を残すことから、小形の角礫素材と思われる。打面は細石刃剥離面方向からの單一の剥離面で、右側面から左側面に向かって傾く。これを補正するために、右側面方向から打面調整が行われているが、末端がヒンジフラクチャーとなっている。また、左側面には細石刃剥離面方向から石核調整が行われている。

51は小形の礫素材と推定され、右側面にその風化面を残す。打面は平坦で、多方向から調整が行われている。打面上の右側面に接する部分に見られる1枚の剥離痕は、調整が行われる以前の打面である。また、左側面と背面には、打面上から石核調整が行われている。

52は細石刃の剥離が進行し器体が小さくなっているため、素材形態は不明である。打面は右側面から左側面に向かって傾き、高い方の右側面に接する部分を中心に打面調整が施されている。細石刃の剥離は、正面から右側面にかけて行われる。また、背面には左側面方向からの石核調整痕が見られる。

53は左側面と背面に自然面を残し、小形の礫を素材と

する。打面は平坦で、細石刃剥離面方向から打面調整が行われている。右側面と背面には、打面方向からの石核調整が施される。

54は背面に自然面を残し、小形の礫素材と思われる。打面には調整が行われているが、背面に接する部分に高まりが残る。正面と底面に細石刃剥離痕が観察されるが、前後関係は前者が後である。この細石刃剥離面から幅広の細石刃が剥離されている。また、右側面と左側面には打面上から石核調整が行われる。

55は分厚い剥片素材で、右側面にはその背面（自然面）、右側面には腹面を残す。打面は右側面方向からの分割によって形成され、左側面・細石刃剥離面方向から右側面・背面方向に向かって大きく傾斜している。打面調整は左側面・細石刃剥離面に接する部分に行われる。

また、背面には右側面を打面とした石核調整が行われている。

56・57はランクである。56は右側面と底面に自然面を大きく残し、小形の礫素材と思われる。細かな石核調整が行われ、サイコロ形の器体に成形されている。

57は剥片素材で、左側面にその背面（自然面）、右側面の端に腹面を残す。正面に見られる右側面方向からの剥離は、素材の分割面と思われる。正面方向からの剥離によって打面が形成され、そこから右側面には石核調整が行われている。

58～72はC類である。58は分割礫素材と思われ、その分割面が打面とされる。打面上から両側縁に細かな石核調整が行われ、舟底形の器体に成形されている。また、左側面の調整はヒンジフラクチャーとなる。打面は平坦で、調整は行われていない。小形で細身の細石刃が剥離されている。

59は分割礫素材で、底面・背面に自然面を残す。その分割面が打面に設定され、そこから両側面に石核調整が行われている。打面は平坦で、調整は見られない。寸詰まりで幅広の細石刃が剥離されている。

60は剥片素材で、左側面にその背面（自然面）、右側面に腹面が残る。その分割面を打面とし、そこから左側面に石核調整が行われる。器体は舟底形を呈する。また、背面には右側面からの石核調整が行われているが、右側面はない。小形の細石刃が剥離されているが、ヒンジフラクチャーを起こしている。

61は小形の礫素材で、背面に自然面を残す。そのボジ

ティブな分割面が打面に設定され、そこから両側面に石核調整が行われるが、左側面の調整はヒンジフラクチャーとなっている。

62は剥片を素材とする。左側面には素材剥片の腹面、右側面には背面の自然面が残り、その分割面が打面に設定されている。右側面のみに打面上より石核調整が行われ、また、細石刃剥離面方向からの調整も観察される。打面は若干内済するが平坦で、調整は行われていない。

63は背面に自然面を残す剥片素材である。その腹面が打面に設定され、そこから両側面に細かな石核調整が行われる。打面の細石刃剥離面に接する部分に1枚の剥離痕が見られるが、打面調整かどうか不明である。細石刃が剥離されているが非常に小形で、石核調整の可能性もある。

64は小形の礫素材で、右側面下端に自然面を残す。その分割面が打面に設定され、そこから両側面に石核調整が行われているが、左側面にはそれ以前に行われた下縁方向からの調整も観察される。打面は平坦で、調整は行われていない。

65も小形の礫素材で、左側面と右側面の全部に自然面を残す。その分割面が打面に設定されている。左側面には、打面上と下縁から石核調整が行われる。細石刃剥離面に見られる打面方向からの大きな一枚の剥離は、左側面の石核調整痕を切っていることから、細石刃剥離面再生によるものと推定される。

66は礫素材である。右側面と細石刃剥離面に自然面を残し、そのネガティブな分割面が打面に設定されている。この面から両側面に石核調整が行われるが、左側面の調整はヒンジフラクチャーを起こしている。打面に調整は見られない。また、細石刃の剥離は初期段階と思われる。

67は比較的大形の礫素材である。そのポジティブな分割面が打面に設定され、そこから両側面に丁寧な石核調整が行われる。細石刃剥離面は正面のみで、細身の細石刃が剥離されている。打面調整はない。

68～72はランクである。68は礫素材で、背面に自然面を残す。ネガティブな分割面が打面に設定され、そこから両側面と背面に石核調整が行われている。

69は剥片素材と思われ、左側面には素材剥片の背面が残る。その分割面が打面に設定され、そこから右側面には石核調整が行われる。正面で細石刃様の剥片が剥離さ

れているが、これは打面の先端に残る発達したバルブを除去するためのものと思われる。

70は大形の礫素材である。右側面の下縁にわずかであるが自然面を残す。そのネガティブな分割面が打面に設定され、そこから両側縁に入念な石核調整が行われている。また、右側面には下縁方向からの調整も観察される。これらの調整により器体が角底形に成形されている。

71は礫素材で、背面と底面に自然面が大きく残る。その平坦な分割面が打面に設定され、そこから両側縁に石核調整が施される。

72は分厚い剥片を素材とする。右側面に素材剥片の腹面、背面には打面が残る。素材剥片の背面が打面に設定され、そこから正面、左側面、背面に石核調整が行われている。正面と背面の調整の一部はヒンジフラクチャーをおこす。

73～75はD類である。73は細石刃の剥離が全周における、器体が整った円錐形を呈する。打面には入念な調整が行われている。

74も細石刃の剥離が全周に渡り、器体は円筒形を呈する。打面は平坦で、調整は行われていない。背面の細石刃剥離はヒンジフラクチャーをおこす。

75は細石刃の剥離がかなり進行し、器体が板状を呈する。打面には細石刃剥離面方向から調整が行われる。背面に素材の自然面が大きく残る。

76～79は欠損品である。76は細石刃剥離の際に、打点の固定に失敗し、細石刃剥離面が大きく剥離されてしまったものと思われる。

77は打面調整に失敗し、打面と細石刃剥離面を含む器体の約半分が剥離されてしまったものである。打面調整が頻繁に行われている。

78・79は打面上からの側面調整に失敗し、細石刃剥離面と下縁の一部が剥離されてしまっている。また、79の右側面では、欠損面を打面として再調整が行われている。

80～82は打面再生剥片である。80は細石刃剥離面方向から再生が行われている。残された打面に調整は行われていない。81は細石刃剥離面、82は背面方向から再生が行われているが、再生された打面は大きく傾いてしまったものと思われる。

c) 局部磨製石斧 (83)

83は基部、胴部、刃部の3点が接合して完形となる。

細身の平面形で、両側縁は刃部から胴部まではほぼ平行するが、基部に向かって徐々にすばまり、基部端は緩やかに尖る。側面は胴部に比べ基部が極端に薄い。刃部の両面が研磨され、その形態は両刃・円刃である。また、E面から見た刃縁は円整状となる。

A・B両面とも入念な調整が施されている。左右の両側縁方向から面的な調整が行われた後に、縁辺部に細調整が施される。この細調整は末端が階段状になるものが多く、A面に比べB面の方が密である。また、A・B面の左側縁下半部の細調整は、研磨後に行われている。これらの細調整により、C・D面から見た側縁は繊かなジグザク状となる。

断面形は基部で山形、胴部上半では凸レンズ形、胴部下半では台形を呈する。素材は棒状の扁平礫と推定され、A面の胴部下半は中央にわずかであるが礫面が残る。石材は新鮮部が淡灰色、風化部は灰褐色の酸性凝灰岩である。

d) 彫器 (84～89)

6点出土している。石材は84が凝灰質頁岩、85～89が酸性凝灰岩である。

84は綾長剥片を素材とする。その末端を側縁方向から折断し、器軸に直行する彫刻刀打面が形成されている。背面の左側縁に2条、右側縁に1条の彫刻刀面が観察でき、前者の下部には細調整が行われる。刃角は左側縁が69～74度、右側縁が55～82度を測り、左側縁の彫刻刀面はねじれが見られないが、右側縁の彫刻刀面は末端に向かって背面側にねじれる。腹面左側縁の末端に調整が見られ、これは背面の彫刻刀面の形成後に行われている。

85も綾長剥片素材である。器軸に直行する側縁方向からの折断面が彫刻刀打面に設定され、背面の右側縁に短い彫刻刀面が形成されているが、その末端はヒンジフラクチャーとなる。刃角は88度を測る。

86は背面に自然面を残す幅広で分厚い剥片を素材とする。その側縁に残された素材面を彫刻刀打面として、背面に4条、腹面に1条の彫刻刀面が形成されている。背面右側縁と腹面右側縁の刃角は共に55度前後である。また、背面両側縁の下部に細調整が観察され、右側縁の調整は彫刻刀面の形成後に行われている。

87は側面に自然面を残す分厚い剥片が素材である。背面の右側縁と腹面の上端に直行して交差する2条の彫刻

刃面が形成され、後者は前者を打面とする。刃角は前者が48～60度、後者は54～60度である。いずれの彫刻刀面もねじれはない。

88は背面に自然面を残す分厚い剥片を素材とする。背面の両側縁に交差する2面の彫刻刀面が形成されている。左側縁の彫刻刀面は右側縁の彫刻刀面を打面とする。刃角は左側縁が75～77度、右側縁は78～89度を測る。右側縁の彫刻刀面は末端に向かって背面側に若干ねじれる。

89は彫搔器である。幅広の剥片を素材とし、その側縁方向からの折断によって彫刻刀打面が形成されている。背面の右側縁に3条の彫刻刀面が観察され、刃角は64～88度を測る。また、左側縁には調整が行われ、弧状の刃部が形成されている。調整角は75～80度である。

e) 搔器・削器 (90～119)

30点出土している。石材は90・91・94・96・97・106・108・113～119が無斑晶質安山岩、93・95・98・100・102・107・111が酸性凝灰岩、99・110が凝灰質頁岩、109・112が凝灰岩、92・101・103・104は黒曜石、105がチャートである。

90～100は搔器である。90は分厚い剥片を素材とし、その末端に急角度の調整が施され、弧状の刃部が形成されている。この調整は末端が階段状となるものが多く、調整角は75～90度を測る。

91～95は素材縁辺の全周に調整が行われている。91は幅広で分厚い剥片を素材としている。背面の全周に入念な調整が行われ、平面形が円形を呈する。調整は平坦剥離によるもので、調整角は60～80度を測る。腹面に調整は行われていない。

92は分厚い縦長剥片素材で、その打面部を除く背面の全周に調整が行われる。調整角は56～85度を測り、左側縁から下端が右側縁に比べて急角度になる。また、腹面の右側縁下半にも調整が見られる。この調整は背面の調整に先行する。

93は幅広の剥片を素材とする。背面のはば全周と腹面の右側縁に調整が行われ、背面の調整角は75～80度を測る。若干であるが、刃部縁辺が鋸歯縁状を呈する。

94は平面形がほぼ円形を呈する。背面の右側縁から下端にかけての調整は細かいが、左側縁は調整が大形となる。腹面には面的な調整が行われ、これらは背面の調整に先行する。背面の調整角は60～75度を測り、刃部縁

辺は鋸歯縁状を呈する。

95は表面を打面とする分厚い剥片素材である。背面左側縁の調整は密に行われるが、その他は粗い調整となる。左側縁の調整角は75度前後を測る。腹面には末端に調整が見られ、その一部は節理によって出来たわずかな平坦面を打面とするものである。

96～100は素材の片面もしくは両面に面的な調整が行われる。

96は分厚い剥片素材で、上端を欠損する。背面左側縁の調整は大形・急角度であるのに対し、右側縁は細かな調整が行われる。腹面は背面に比べて調整が粗である。

97は上端を欠損するが、平面形は梢円形、断面は山形を呈する。表裏両面とも平坦剥離による丁寧な調整の後、縁辺部には細調整が行われる。

98は分厚い剥片を素材とし、背面に面的な調整が行われている。また、背面の左側縁には末端が階段状となる細調整が見られる。

99は縦長剥片素材である。背面の全周に平坦で面的な調整が行われた後に、縁辺には細調整が行われる。右側縁上半の調整は85度前後と急角度である。腹面上端の欠損面を打面として背面に調整が行われており、リダクションと思われる。また、腹面両側縁の一部にも調整が觀察される。

100は欠損品である。背面は右側縁方向からの調整が行われる。両面とも上端の欠損面を打面として再調整が行われ、腹面のほうが著しい。腹面の下半中央に研磨面が観察され、局部磨製石斧の破片である可能性も指摘できる。また、83の局部磨製石斧と類似する石材である。

101～111は削器である。101は背面に自然面を大きく残す分厚い縦長剥片を素材とする。打面は平坦打面で、側面觀は「し」の字状を呈する。背面の左側縁上半と右側縁の一部に調整が行われる。前者の調整角は54～60度を測る。

102は大形の石刃を素材とし、その打面部を欠損する。背面の左側縁のはば全部と、右側縁の上部に調整が行われる。前者の調整角は48～78度を測り、下半部にゆくほど急角度となる。破片4点の接合資料である。

103は縦長剥片素材である。打面は平坦打面で、背面に自然面を残す。背面左側縁の全部に調整が行われ、弧状の刃部が形成されている。調整角は65～69度である。

104は自然面を打面とする剥片素材である。背面の右側縁に調整が行われ、ノッチ状の刃部が形成される。調整角は70～75度を測る。

105は自然面を打面とする幅広の剥片素材である。その腹面の末端に調整が行われ、弧状の刃部が形成されている。調整角は60～65度を測る。また、刃部縁辺が鋸歯状を呈する。

106は横長剥片素材である。背面の上端と右側縁に調整が行われる。右側縁の調整は上半部が小形であるのに対し、下半部はそれより大形で、末端が階段状となる。調整角は45～71度で、上半部は65度前後にまとまる。

107は大形の横長剥片である。背面の右側縁に大形の調整が行われている。調整角は48～72度を測り、下半部は70度前後と急角度である。

108は背面に自然面を残す分厚い剥片を素材とする。背面の右側縁に調整が行われ、凸状の刃部が形成されている。調整角は74～77度を測る。腹面の上端にも素材の打面を除去するように調整が行われる。

109は背面に自然面を残す大形の剥片が素材である。腹面の右側縁に調整が行われ、弧状の刃部が形成されている。調整角は70～76度である。

110は分厚い横長剥片素材である。背面の右側縁に調整が行われ、「く」の字状に屈曲する刃部が形成されている。これらの調整は末端が階段状となるものが目立つ。調整角は上半部が48～60度、下半部は96～103度と急角度である。腹面の右側縁にも素材の打面部を除去するかのように面的な調整が行われた後、小形の調整が行われている。

111は大形の横長剥片を素材とする。欠損品2点が接合している。背面の左側縁には連続した小形の調整が行われ直線状の刃部が、右側縁には中～大形の調整により弧状の刃部が形成されている。また、後者の刃部縁辺は鋸歯状を呈する。左側縁の調整角は60～75度、右側縁は72～92度を測る。腹面にも素材の打面部を除去するかのような面的な調整が行われる。なお、上部は欠損面を打面としてリダクションされている。

112～119は尖頭状搔器である。112は背面に裸面を残す大形で分厚い剥片を素材とする。背面先端の両側縁に調整が施され、尖頭状の刃部が形成されている。特に左側縁の調整は入念で、平坦剥離による調整の後、縁辺に細調整が施される。この調整は末端が階段状となる。調

整角は左側縁が68～80度、右側縁は52～56度を測る。腹面に調整は行われていない。

113は欠損品2点が接合している。大形の横長剥片を素材とし、背面の両側縁に大形での面的な調整が行われた後、中～小形の調整が行われる。後者は末端が階段状となるものが多い。また、下半部は欠損後にリダクションされており、器体の幅が小さくなっている。調整角は左側縁の上半部が47～70度、下半部が54～62度、右側縁の上半部が52～60度、下半部が60～66度である。腹面に明確な調整痕は観察されない。なお、さらに末端を欠損している。

114も大形の横長剥片を素材とする。背面は中央を残して面的な調整が行われた後、小～中形の調整によって全体形が水滴形に成形されている。調整角は左側縁が52～66度、右側縁は47～63度を測る。左側縁が緩やかに膨らむのに対し、右側縁は「く」の字状に屈曲し、左右非対称の平面形である。また、末端は断ち切られたように直線状となる。裏面は素材の打面部を中心に面的な調整が行われ、右側縁には素材の腹面が大きく残されている。

115は分厚い横長剥片素材である。背面のほぼ全面が調整痕に覆われ、縁辺部には末端が階段状となる細調整が行われている。右側縁は弧状、左側縁は直線状の刃部が形成され、全体形はD字状を呈する。調整角は左側縁が57～70度、右側縁は71～93度で、右側縁が急角度となる。裏面は114と同様に素材の打面部に面的な調整が行われ、左側縁には素材の腹面が残る。

116は下半部を欠損する。背面の両側縁に入念に面的な調整が行われるが、中央に自然面を残す。調整角は左側縁が60～78度、右側縁は65度前後にまとまる。裏面は素材の打面部に大形の面的な調整が行われている。

117も下半部を欠損する。背面の左側縁先端と右側縁に調整が行われ、右側縁は弧状の刃部が形成されている。その調整角は55～68度である。また、刃部縁辺が鋸歯状を呈する。裏面は欠損面を打面として調整が行われた後、右側縁下部に小形の調整が行われている。

118は上半部を欠損する。背面の両側縁に調整が行われ、調整角は左側縁が74～84度、右側縁は60～85度で、両側縁とも急角度である。裏面には明確な調整が行われていない。

119は両面に面的な調整が行われているが、表面の風

化が著しい。裏面の調整は表面に比べ末端が階段状となるものが多い。左右非対称で幅広の木葉形を呈する。

f) 敵石 (102 ~ 106)

6点出土しており、石材は121が凝灰岩、120・122~125が砂岩である。

120は三角形を呈する小形の扁平礫を素材とし、その長軸上の両端に敲打痕が観察される。121は小形で梢円形の扁平礫を素材とし、長軸上の両端に敲打痕をもつ。また、敲打に伴い片側の側縁を欠損する。122は卵形の円礫素材で、上端を欠損する。下端には多面体状の敲打痕が観察される。

123は小形の棒状礫素材で、上下両端と側面を欠損面

する。また、側面の下端に敲打痕が残る。124は棒状の扁平礫を素材とし、側面の上下両端を欠損する。また、長軸上の両端に敲打痕が観察される。

125は大形の棒状礫素材である。その長軸上の両端が使用されており、上端にはアバタ状の敲打痕が残る。下端はかなり使用されており、断ち切られたように平坦面が形成されている。この平坦面は緩やかに湾曲し、表裏両面に接する端部には剥離痕が残る。

g) 石核

126は円礫を素材とするサイコロ状の石核で、頻繁に打面を転位しながら、幅広の剥片が剥離されている。石材は酸性凝灰岩である。

3 尖頭器石器群 (石器図版 16-27)

1) 概 要

分布 尖頭器文化の遺物は、C13グリッドを中心とする東西約9m、南北約12mの範囲から1,735点の石器が集中して出土した。石器はモヤ上部から上Ⅱ上部にかけて、偏りなく出土したが、礫群の下面が全てモヤ下部下面付近であることから、この層準が本来の生活面であると判断される。

石器には尖頭器、搔器、削器、二次加工のある剥片、剥片がある。剥片石器の石材は、ほぼ9割を無斑晶質安山岩が占め、ほかに珪質凝灰質頁岩、酸性凝灰岩、凝灰岩、黒曜石、チャートが用いられている。無斑晶質安山岩製尖頭器を主体とする石器製作に関わる遺物である可能性が高い。

無斑晶質安山岩製の剥片は集中域全域に広がりをもつが、1号礫群の周辺で密度が高くなっている。酸性凝灰岩の剥片は1号礫群の北西約2mのところに分布の中心をもつ。尖頭器の分布を見ても、酸性凝灰岩の尖頭器は1号礫群から北西2mあまりのところに分布し、同石材の剥片の分布域と同様の傾向を示す。無斑晶質安山岩製・珪質凝灰質頁岩製の尖頭器は1号礫群の北側に多く分布し、2号礫群のほうへの集中は見られない。黒曜石製尖頭器も3点のうち、2点が1号礫群の周辺に分布している。チャート製は2号礫群の南西に分布する。搔器も1号礫群の北側に分布が偏る。

上記のような遺物分布のあり方から、この遺物集中域

の中心は、未発掘のC11グリッドのほうへ広がる可能性が高い。

石材

無斑晶質安山岩： よそ5大別される。①発泡孔が多いもの、②縞模様がよくわかるもの、③滑らかなもの、④緻密なもの、⑤発泡孔があるが①よりは緻密な感じを受けるもの。この中で色調などによりいくつにも細分され、単独資料も多い。

珪質凝灰質頁岩： 全て白色で、尖頭器・剥片各1点の同一母岩が認められた。

酸性凝灰岩・凝灰岩： 4母岩以上に分類される。

チャート： いずれも紺色に縞模様の入る石材だが、同一母岩ではない。

黒曜石： 透明なもの、白潤するもの、光沢のあるものがある。

2) 各 説

石器の個別記載は表4に記す。

a) 尖頭器

無斑晶質安山岩製 (128~132・134~162・164・228)

無斑晶質安山岩製の尖頭器の多くが欠損品であるが、幅により、次のように分類できる。

S1類：20mm未満 (128~132)、S2類：20~25mm未満 (134~138)、M1類：25~30mm未満 (140~147)、M2類：30~35mm未満 (148~153)、L類：35mm以上 (154

～162)。

大きさと石質の関係をみると、小形の尖頭器は石質が滑らかな③、大形の尖頭器は緻密な④が多く用いられている。

先端部の先端角は、約45度(128～130・143)、約60度(131・140～142)、約80度(144・148・150・156・158)のものがある。幅との関係をみると、45度のものにS1類、60度のものにM1類、80度のものにM2・L類が多いようである。石質による先端部の作り分けは見られない。

最終調整のあり方は次のように分類できる。

a類： 両側縁に残る最終的な剥離が表面へ行われているもの(130・131・138・145・150・153・155)。

b類： 両側縁の最終的な剥離が裏面へ行われているもの(141・147・151・156・158)。

c類： 最終的な剥離が右側縁は裏面へ、左側縁は表面へ行われているもの(128・132)。

d類： 最終的な剥離が右側縁は表面へ、左側縁は裏面へ行われているもの(136・140・144・146・152・160～162)。

e類： その他。

チャート製(166・167)

黒曜石製(168～170)

頁岩製(133)

珪質凝灰質頁岩製(171・172)

酸性凝灰岩製(173～176)

凝灰岩製(163)

b) 挿 器

無斑晶質安山岩製(177～187)

いずれも円形様式で、大きさはおおむね3～5cm程度である。素材の剥片の背面に多方向からの剥離が残ることから、尖頭器の調整剥片を利用していると考えられる。素材剥片を正面に用いることを基本とする。

石質は177が①であるほかは、③、④である。

黒曜石製(188・189)

無斑晶質安山岩製に比べると、かなり小形である。

チャート製(190)

c) 削 器

酸性凝灰岩製(191)

d) 石 核

凝灰質頁岩製(192)

e) 截 石

砂岩製(193)

f) 二次加工ある剥片

無斑晶質安山岩製(195～197)

ここで、二次加工ある剥片とするものは、尖頭器の未成品と考えられる。3点には、大形の剥片の打面・打痕を折断によって除去し、折断面が尖頭器の側面になるような素材の用い方をするという共通点が見出せる。

g) 剥 片

尖頭器集中地点の剥片のうち510点の石材組成をみると、無斑晶質安山岩が圧倒的に多く437点、次いで酸性凝灰岩55点、珪質凝灰質頁岩8点、黒曜石9点、チャート1点である。

無斑晶質安山岩製(200～227)

無斑晶質安山岩の石質についてみると、②縞模様がよくわかるもの、③滑らかなもの、④緻密なものがほとんどを占め、①や⑤などの発泡孔があるものは数点に過ぎない。そのため、①・⑤の石質の石器製作はあまり活発ではなかったと推定される。

石質①に属する尖頭器には144・149・150・151・153・158・161がある。これらに付随する剥片類が少ないことから、製作工程のうち、剥片類があまり生じない調整剥離段階の作業が行われていた可能性が考えられる。

石質②に属する尖頭器には131・134・148・159・160がある。この石質には母岩識別できた資料が何点がある。No.3とした母岩にはLサイズの大形の剥片(213・214・219)のほかにS1・S2サイズの小形の剥片も伴うことから、比較的初期の段階の剥離作業から行われたと推定できるが、接合はせず、尖頭器との直接的な関係を見出すことはできなかった。

石質③に属する尖頭器には128・129・132・135・136・138・141・157がある。剥片には210のように縦面をもつ大きめの剥片から224のような調整剥片までそろった母岩もあることから、剥片剥離の初期の作業から、最後の調整剥離段階まで行われた可能性がある。尖頭器未成品とした197もこの石質である。

石質④に属する尖頭器には130・140・142・143・145・146・147・152・154・155・156・162がある。このうち140・145・156は同一母岩である。尖頭器155は大形の剥片212と同一母岩であるが、この母岩には小形の剥

表4 尖頭器石器群の石器の記載

尖頭器 穂無晶安山岩群

- 128 大きさSI類、先端角約45度、最終調整d類の完形に近い尖頭器である。平面形は左右非対称で、左側縁が「く」の字状、右側縁が直線状をしている。先端部は綫型三角形である。横断面形は扁平な平行四辺形であるが、末端部付近では三角形である。裏側部は一定の厚さで、尖端部は平坦で、裏側の部分がくわづかに凹凸になっている。側縁接着部はともに直線的である。中輪縁を越える刃離は、裏面は不明だが、裏面は左半面が先行している。両面とも对抗側に届くか届かない大きな剝離をしている。先端部は裏面への細かい調整で整っている。側部への細かい剝離は所々留候段になっている。
- 129 大きさSI類、先端角約45度、最終調整a類の尖頭器である。先端部は画面からの細かい削離で鋭い三角形形状に仕上げられている。側面形は直線形をしていて、裏面形は一定の厚さで、裏面が平坦で、裏側の部分がくわづかに凹凸になっている。側縁接着部はともに直線的である。中輪縁を越える刃離は、裏面は不明だが、裏面は左半面が先行している。両面とも对抗側に届くか届かない大きな剝離をしている。先端部は裏面への細かい調整で整っている。側部への細かい剝離は所々留候段になっている。
- 130 大きさSI類、先端角約45度、最終調整c類の尖頭器である。下半分を欠損するので全体形体は不明であるが、先端部は三角形に至る。横断面形は中央から腰縫をもつ片面凸レンズ形であるが、左右非対称である。側縁接着部は裏面形が扁平で、裏面が凸状をしており、厚さは一定ではない。右側縁後縫は直線的である。このことから裏面が片側とされたいた可能性を指摘できる。中輪縁を越える刃離は裏面では左半面に、裏面では右半面が先行していることから、先端部を優先して完成させている様子が窺われる。最終的な刃離は先端部が裏面に、崩崩が裏面に行われている。下側の欠損面では裏面中央部より左側にリニアが施されている。リニアの結果は両側ともに不純物があり、裏面左下では裏面に沿って鋭い刃離が失われている。裏面末梢の小輪縁は折れに伴うものである。
- 131 大きさSI類、先端角約45度、最終調整a類の尖頭器である。先端部の平面形はアーチ状で穂やかに開閉へつながる。右側縁からの削離、あるいは加壓が裏面となって先端部は厚さを失っている。横断面形は両面凸レンズ形を呈する。側面形に反りはないが、裏縫縁は直線的ではない。右側縁後縫は直線的し、左側縁後縫は先端付近で直線形である。中輪縁を越える刃離は裏面では左半面に、裏面では右半面が先行していている。下側の欠損面では裏面左下から裏面へ接するに沿って鋭い刃離が施されている。
- 132 上下を欠くので全体形体は不明であるが、大きさSI類、最終調整a類に分類される。平面形は左右対称であるが、左輪縁が裏面に開くような形をしていて、裏面は直線形であった。横断面形は裏面に開く形である。裏面形は基部付近が若干へこむばかりで厚さは一定で、左右の後縫は直線的である。中輪縁を越える刃離は左半面と裏面が先行している。裏面が左半面に行われている。上側は裏面中央にリングが施集している。
- 133 大きさS2類、先端角約45度、最終調整a類の尖頭器である。平面形は先端から腰縫へかけて表面へ屈曲する。右側縁は右側に細いジグザク状、左側は腰縫中央付近から裏面へ屈曲している。横断面形は先端部と基部付近では片面凸レンズ形をしているが、中央部では五角形に近い形をしている。中央部腰縫はある高さで除去するための削離が腰縫と腰縫から裏面に沿って、その部分が複数段になっていて、上輪縁を越える刃離は両面とも右側面が先行している。細かい剝離はほとんど見られない。最終的な刃離は左半面で裏面へされている。上輪縁は裏面中央上から腰縫で剥離している。下側の欠損面では裏面中央右寄りにリングが施集している。
- 134 大きさS2類の尖頭器である。平面形は裏面形で左側縫が若干へこむばかりで厚さは一定で、左右の後縫は直線的である。横断面形は腰縫が左半面と裏面が先行している。裏面は基部付近が若干へこむばかりで厚さは一定で、左右の後縫は直線的である。中輪縁を越える刃離は腰縫と腰縫から裏面に沿って、その部分が複数段になっていて、上輪縁を越える刃離は両面とも右側面が先行している。細かい剝離はほとんど見られない。最終的な刃離は左半面で裏面へされている。上輪縁は裏面中央上から腰縫で剥離している。
- 135 大きさS2類の尖頭器である。平面形は裏面形だが、左側縫が若干へこむばかりで厚さは一定で、左右の後縫は直線的である。横断面形は裏面形が若干へこむばかりで厚さは一定で、左右の後縫は直線的である。中輪縁を越える刃離は腰縫と腰縫から裏面に沿って、その部分が複数段になっていて、上輪縁を越える刃離は両面とも右側面が先行している。裏面は左半面と裏面が先行している。細かい剝離は裏面で左半面に行われている。上輪縁は裏面中央上から腰縫で剥離している。
- 136 大きさS2類、最終調整d類の両面凸レンズ形の尖頭器である。平面形は腰縫と左半面に凸状をしている。横断面形は片面凸レンズ形を呈する。側面形は直線的であるが側縫後縫は左半面と右側にジグザク状をしている。裏面は左半面下に残る素面から、裏面の削離を裏面としていることなどがわかる。中輪縁を越える刃離は裏面で左半面が先行している。裏面右側縫は裏面で左半面と右側縫で交互に剥離を行われている。下側を欠損しており、上側では裏面右側縫に、下側は裏面の腰縫上にリングが施集している。裏面下方の中央にある小輪縁は欠損に伴うものである。
- 137 大きさS2類の、基部が円錐状を呈する尖頭器である。側面形は東面でやや薄くなる以外は厚さが一定である。側縫縁は右側が基部で裏面へ向曲する以外は左右とも直線的である。横断面形は基部付近で右半面が少し厚くなる。横断面形に見られるよう裏面では右側から中輪縫に沿って剥離している。中輪縫を越える刃離は裏面では直線的である。裏面は左半面で裏面が先行している。腰縫に両側から細かい剝離が施されている。上下を欠損しており、上側では裏面右側縫に、下側は裏面の腰縫上にリングが施集している。
- 138 大きさS2類、最終調整a類の尖頭器である。平面形は左右対称、横断面形は両面凸レンズ形を呈する。側面形は腰縫も含め直線的によく整えられており、裏面で相互補完的に調整されている。上輪縁の欠損面では裏面中央に、下輪縁は裏面右側縫上にリングが施集している。共に製作に伴うものとは考えられない。
- 139 先端角45度の大きな尖頭器未品である。左半分が剥離で折れたあるいは剝離により欠損している。裏面を整える治すの治す品の可能もある。
- 140 大きさM1類、先端角約60度、最終調整d類の両面溝溝溝の尖頭器である。平面形は左右対称の底済状をしており、先端部は両面からの細かい剝離で削り出されている。側面形は先端部付近では裏面へ凹状である。裏面は左側縫から腰縫に亘る刃離が裏面で裏面から中輪縫に沿って剥離している。中輪縫を越える刃離は裏面では直線的である。裏面は左半面で裏面が先行している。腰縫に両側から細かい剝離が施されている。上下を欠損しており、上側では裏面右側縫に、下側は裏面の腰縫上にリングが施集している。
- 141 大きさM1類、先端角約60度、最終調整b類の尖頭器である。平面形は左右対称の底済状をしている。先端部は細かい剝離で三角形形状に整えられている。横断面形は扁平平行四辺形をしている。側面形は直線的で裏面も一定である。側縫縁は直線的であるが、右側縫は基部付近で裏面へ凹状である。裏面は左輪縫から腰縫に亘る刃離が裏面で裏面から中輪縫に沿って剥離している。左輪縫を越える刃離は裏面で左半面が先行している。左輪縫の腰縫は裏面で相互補完的に行われている。裏面は左半分が欠損後腰縫側から剝離されている。
- 142 大きさM1類、先端角約60度の尖頭器である。平面形は左右対称である。裏面形は先端がやや裏面へ凸状するほかは直線的である。厚さは一定でない。側縫縁は両側とも先端付近で裏面へ凸状する以外は直線的である。横断面形は先端部付近で裏面が厚くなる台形状、腰縫付近で両面凸レンズ形をしている。側縫縁は既に剥離されていて、裏面は左側縫で裏面が先行している。裏面は左側縫で裏面が先行している。左輪縫を越える刃離は裏面で左半面が先行している。左輪縫の腰縫は裏面で相互補完的に行われている。
- 143 大きさM1類、先端角約45度の尖頭器である。平面形は裏縫が裏縫から弧状を呈する左右対称である。側面形は、裏面に輪らむ形にわざかに凹状している。側縫縁は右側縫が剥離していない。左側縫が裏面で直線的である。裏面は左輪縫から腰縫に亘る刃離が裏面で裏面から中輪縫に沿って剥離している。側縫縁は右側縫が剥離している。右側縫は裏面付近で裏面へこむ直線形である。裏面は左半面で裏面が先行している。腰縫から右側縫は裏面で左半面がやや厚い平面凸レンズ形をしている。中輪縫を越える刃離は裏面で左半面が先行している。腰縫から右側縫は裏面では直線的で裏面が先行している。そのうち最終的な刃離は先端部から裏面にかけては裏面へ、腰縫以下は裏面で進行している。裏面下の輪縫をみじょうじょうに削離が施されている。
- 144 大きさM1類、先端角約60度、最終調整d類の尖頭器である。先端部は左側が「く」の字形をしており、先端から腰縫に亘る刃離が裏面へ向けて裏面に削離している。右側縫は右側付近で裏面へ凹状である。裏面は左側縫で裏面が先行している。左側縫の腰縫は裏面で相互補完的に行われている。裏面は左半分が欠損後腰縫側から剝離されている。
- 145 大きさM1類、先端角約45度の尖頭器である。平面形は左右対称で、右側縫が基部付近で若干凹状になっている。細かな剝離がその部分に行われている。横断面形は片面凸レンズ形の部分もあるが、裏面右側縫に寄り寄る部分もある。この部分はちょうど側縫が凹凸になっているところなので、この高さを取るために集中して削離をした結果である。裏面は裏縫が直線形で、裏縫は裏縫が直線形で、裏縫は裏縫が直線形である。右側縫後縫は裏縫で右側付近で裏面へこむ直線形である。左側縫は細かいジグザク状をしている。横断面形は両面凸レンズ形になる。左側縫後縫は直線的である。中輪縫を越える刃離は裏面で右半面が先行している。

る。細かい剥離は、左側縁は表面からだけ、右側縁は表面裏からされている。上下の欠損面とも裏面中央部にリングが結合している。

146 大きさM1類、最終調整d類の半円凹張型の尖頭器である。上半分を欠くが、残存する部分は凸円弧状を呈する。側面形は裏面側が肩平で、裏面側には弱い凹みがある。側縁剥離は、右側は直線的であるが、左側は表面側に向け若干凸状に凸曲している。横断面形は裏面半平四辺形をしているが裏面中央に横縫がある。中輪縫を越える剥離は表面右下に見られるのみで、周縁への繰かい剥離を表面裏にして、外形を見えている。裏面裏に残る素材面から剥離材であることがわかる。素材の剥片の打点などは残っていない。上側の欠損面には裏面に向かうリングが2つある。

147 大きさM1類、最終調整d類の尖頭器である。上下を欠くが、平面形は新郎がすばまる左右対称形を呈する。横断面形は裏面部中央付近では肩平な平行四辺形で、左半分がやや厚くなっている。側縁剥離は右側は継ぎやかに波打っている。中輪縫を越える剥離は、表面は左半球が先行し、裏面は右半球が先行する。細かい剥離は両側縁とも裏面からされているが、裏面右側の屈曲する部分特に継ぎかされている。左側縁剥離にはほぶれに近い状態が見られる。上側の欠損面は裏面右側に寄り、下側は裏面右よりにリングが集まっている。

148 大きさM2類、先端角約80度の尖頭器である。器頭に開孔が多く、風化も激しい。粗い打痕のせいか調整も難いようである。新郎は裏面左側にリングが始発している。平面形は裏面は直線的であるが、剥離が表面側に凸状に凸曲している。左側縁剥離は継ぎやかに波打っている。裏面側は裏表が先端で裏表に反する以外は平滑であるのにに対し、裏表は「X」の字状に凸曲している。左側縁中央部に打面かと思われる部分があるが、どういう性状の剥離などの原因でできなかつた。横断面形は先端部と基部付近では両面凸レンズ形だが、周縁では六角形をしている。調整は、周縁の剥離にもない複数段になっていくところが多い。周縁への細かい剥離は裏面に集中している。

149 大きさM2類、先端角約60度の尖頭器である。下側に表面左下からの加筆で欠損している。平面形は左右対称形で、弧状の側縁が三角形状の先端部を形成している。側面形は、裏面は裏表ではあるが裏面は凸曲している。側縁剥離は左の下側付近が裏面側に崩落する点を除けば両方とも裏面側に向いて凸状に凸曲している。横断面形は片面凸レンズ形で、裏面は整った張模をしていているが裏面中央に弱い筋縫が見れている。中輪縫を越える剥離は両面とも方が先行しているようである。細かい剥離はあまりされていないが先端には裏面から剥離をして整えている様子が窺われる。最終的な剥離は両側縁とも裏表を中心に行っている。

150 大きさM2類、先端角約80度、最終調整a類の尖頭器である。下側の欠損面では裏面右側にリングが結合している。先端は幅が広く、裏面に欠く。横断面形は扁平な両面凸レンズ形をしている。縫縫は斜めに取り去られていない。裏面側は裏表が直線的で、裏表が継ぎ波打っている。厚さにはほぼ一定で、先端部付近だけが若干薄くなっている。側縁剥離は両側縁とも継ぎやかに波打っている。中輪縫を越える剥離は裏表とともに左側が先行している。裏表は右半球が先行しているが、裏面にはまったくしていない。右側縁には表面の方が細かいもの、両面から細かい剥離がされている。

151 大きさM2類、最終調整b類の尖頭器である。下側の欠損面では裏面右側にリングが結合している。平面形は左右対称形で、弧状の側縁が三角形状の先端部を形成している。側面形は裏面に凸状に持ちながら、基部の方方が厚くなっている。側縁剥離は、右側は継ぎひじグザグサ状があるが、左側は波打いてない。中輪縫を越える剥離は裏表と両側縁から裏表が先端に行っている。裏面の剥離は対側縁間に届くほどの大きなものである。細かい剥離は両輪縫に限られている。

152 大きさM2類、最終調整a類の尖頭器である。上側の欠損面では裏面中央部に、下側では裏面中央部にリングが結合している。裏面上部中央と裏面下端左下の微弱な剥離材はこの欠損に伴うものである。裏面上下部に茶色斑点とみられる剥離面が残存している。平面形は左右対称で、基部から輪縫にかけて広がる形をしている。裏面側は輪縫から裏部にいくに従い縮縫している。側縁剥離は、右は裏面に凸状に凸曲している。中輪縫を越える剥離は裏表と両側縁から裏表から運び廻されたものである。両側縁とも両面から細かい剥離が整えられている。

153 大きさM2類、最終調整a類の尖頭器である。上側の欠損面では裏面中央部に、下側では裏面中央部にリングが結合している。上質は末端がヒンジフラクチャを起こしている。平面形は左右対称で、縫縫かかな曲线をもつ縫縫が基部を形成している。側面形は厚さが一定で、側縁剥離は裏表とも末端に近いところで裏面に届いている。裏面の剥離は裏表両面凸レンズ形をしているが、裏面中央部付近に裏縫から剥離がそれぞれ設けられている。中輪縫を越える剥離は裏表と両側縁とも裏面が先行している。

154 大きさS1類の尖頭器である。尖頭器未完成品と判断したが、削削の可能性もある。なおこの資料の出土位置点はM16グリットであるが、攝石器の遺物集中域で見られた無逆進品岩山若者、尖頭器の裏面は無逆進品岩山若者に類似しているため、尖頭器に伴うものと判断した。

上側の欠損面でも表面の幾段付近にリングが結合している。裏面に茶色の茶斑があるが、裏面から剥離材であることがわかる。平面形は左右対称で側縁が平行である。側面形は先端から裏部にいくに従い厚さを増す。側縁剥離は、右側は直線的であるが、左側は継ぎひじグザグサ状をしている。横断面形は片面凸レンズ形をしている。裏面左側から中輪縫に届くような剥離材がされている。右側縁には裏面側の剥離が裏表も左右から平均して剥離がされている。

155 大きさS1類、最終調整b類の尖頭器である。先端部は裏面後の剥離である。下側の欠損面では裏面右側にリングが結合している。裏面の最末端の側縁が風塵で破損した可能性がある。平面形は左右対称で、縫縫かかな曲線をもつ縫縫が基部を形成している。裏面側が肩平で、裏面右側が階段状になっている。側面形は裏端部左側で裏面へ厚みを増している。この部分の厚みを取るために剥離が原因となって欠損したのかもしれない。側縁剥離は右側が大きく風塵しているのが、左側は直線的である。中輪縫を越える剥離は裏表では右側が先行し、高臺では左側が先行している。裏面の剥離は裏表両面凸レンズ形をしている。左側縁には裏面側の剥離が裏表に張り付いている。

156 大きさS1類、先端角約80度、最終調整b類の尖頭器である。下のフレームは2号の加筆によって欠損している。いずれも裏面側にリングが始発する。左側の欠損面は継ぎタイプであるに対し、右側の欠損面はミネギタイプである。平面形は左右対称で、弧状の側縁が三角形状の先端部を形成している。横断面形は扁平な両面凸張形をしている。裏面裏からの剥離が裏表をぐるりと剥離するようにして厚みを減らしている。裏面形は裏端部左側で裏面半平行四辺形に近いが、裏表裏に厚くして厚い部分がある。そのほかの部分は扁平な板状に整えられている。中輪縫を越える剥離は裏表は裏表で左側が先行している。左側縁剥離は裏面裏に届いているが、左側縁の方は側縁を整えるがほどこつて剥離されていない。最終的な剥離は右側縁では裏表中心に左側縁では裏面裏に届いている。

157 大きさS1類の尖頭器である。上側欠損面では裏面中央に、下側では裏面左側にリングが結合している。裏面下端中央および上端、裏面裏下端などに見られる小輪縫は次後に伴うものである。平面形は裏面中央で最大幅をもつ左右対称形をしている。裏面側は裏表で裏表に厚さを増し、剥離の速度がよく焼けている。側縁剥離は裏表とも大きく波打っている。横断面形は裏面中央では扁平な平行四辺形に近いが、裏表裏に厚くして厚い部分がある。そのほかの部分は扁平な板状に整えられている。中輪縫を越える剥離は裏表は裏表で切り合いで開閉がわらないが、裏面裏は裏面裏に行われている。細かい剥離は裏面裏に行われているが、左側縁の方は側縁を整えるがほどこつて剥離されていない。最終的な剥離は右側縁では裏表中心に左側縁では裏面裏に届いている。

158 大きさS1類、先端角約80度、最終調整b類の尖頭器である。平面形は左右対称の裏面張形をしている。横断面形は先端部付近が扁平な三角形、基部付近が凸レンズ形をしているが、左側も右側も残っている。裏面の脇部中央に輪縫があり、裏面裏に厚みをもつ平坦な側縁が見ている。側縁剥離は裏表裏で裏面裏に削離するようにして厚みを減らしている。裏面形は裏端部左側で裏面半平行四辺形に近いが、裏表裏に厚くして厚い部分がある。そのほかの部分は扁平な板状に整えられている。中輪縫を越える剥離は裏表は裏表で左側が先行している。左側縁剥離は裏面裏に行われているが、左側縁の方は側縁を整えるがほどこつて剥離されていない。最終的な剥離は右側縁では裏表中心に左側縁では裏面裏に届いている。

159 大きさS1類の尖頭器である。裏面にもらがが多く、表面左上には側縁面と見られる面も残している。上は裏面左側縁方向からの加筆で欠損し、大きい側縫状の面を残している。下は裏面にリングが向かうようである。大部分欠損しているので全体の形状は不明だが、右側面を見ると厚さがほぼ一定なり反りの少ない尖頭部だったことがわかる。

160 大きさS1類、最終調整d類の尖頭器である。上側の欠損面では裏面中央から左寄りのところに、下側では裏面中央部付近にリングが結合している。裏面裏の裏面下端部附近の小輪縫裏、裏面裏の裏面裏に小輪縫裏は欠損に伴うものである。裏面裏には左側縫が基部で裏面裏に削離するが直線状である。左側縫は裏表から左側縫にかけて裏面裏に削離され裏表を素材としている可能性が考えられる。裏面形は左右対称で、左側縫が直線的であるのに対し、右側縫は基部に向かって広がっている。側面形は厚さは一定だが裏面側に向け裏面に弱く凸曲している。側縁剥離は裏表とも所々削離している。横断面形は片面凸レンズ形をしているが、裏面裏のネギテイブな部分が残っている。裏面裏が明確に残らずして整ってはない。脇部付近では平行四辺形をしている。中輪縫を越える剥離は裏表では右側面に行われている。裏面裏では左側面から対側縫に届くよう削離が行われている。同側縫とも裏面裏から

161 大きさS1類、最終調整d類の尖頭器である。上側欠損面では裏面中央部付近にリングが結合している。欠損面裏の段差部分に不純物が認められるので、欠損と何らかの関係があるのかかもしれない。裏面裏の脇部から左上にかけて裏面裏と見られる剥離面が認められる。脇部の裏面形は先がやや尖る半円形をしている。裏面裏は両面とも側縫を挟んで左右対称である。側縁剥離は裏表には前も削離する部分があるものの脇部付近では直線状である。横断面形は片面凸レンズ形であるが、裏面裏のネギテイブな部分が残っている。裏面裏が明確に残らずして整ってはない。脇部付近では平行四辺形をしている。中輪縫を越える剥離は裏表では右側縫から対側縫に届くよう削離がされており、残存部を広く覆っている。細かい剥離は裏面に規則的にされており、

基部の半円形を作り出している。
162 大きさし顎、最高調整d顎の尖頭器である。下側の欠損面では裏面中央部付近にリングが結集しているが、上側は複雑な折れの状態を示している。平面形は左右非対称で、右側には抉られたような部分が認められる。横断面形は、基部の相となる部分では裏面側で平坦な部分をもつ正面凸レンズ形をしているが、上側削除面では扁平な板状形をしている。側面形は直線的であるが、基部付近で側面が裏面側に向いて屈曲し、厚さを減じている。側面縁線は左側の系部付近がわずかに裏面側へ凹曲する以外は双方とも直線的である。中輪歯を超える剥離は表側は左右対称に、裏面では左平面で先行している。削離の様子は裏面以外の剥離の打点はいずれもかなり多いようである。また、表面右側の剥りのような部分は確かに剥離する剥離も、表面で相互補完的になされているようである。
163 尖頭器未成品である。裏面の下半分に平坦な洞窓が特に多く施されている。
164 全体に厚手で、平面形は淡黄状の右下が欠けたような形を呈する。右側面に裏面、裏面に素材剥片の主要剥離面が残る。尖頭器の未成品もしくは前頭器であると推定される。鏡石右石器群の尖頭状器にも類似する。
尖頭器 チャート製 (166 - 167)
165 先頭部の欠損面は裏面右上に、基部は裏面中央付近にリングが結集している。平面形は左右非対称で、右側縁が緩やかな弧状をしているのに対し、左側縁は「L」の字状をしている。側面形は直線的で、先端部がわずかに裏面側に反っている。横断面形は先端部付近で左側の厚い、さき形、基部付近で扁平な平行四辺形をしている。調整は両側面を剥離で覆われ、左側縁は両面に細かい剥離がされている。末端の細かい剥離は欠損に伴うものである。
167 下側を欠損しており、折れ面の様子は非常に複雑で凹凸があるが、裏面方向にリングは結合するようである。平面形はほぼ左右対称の三角形状をしている。側面形は裏面から頭部にかけて厚みを増す。横断面形は裏面凸レンズ形であるが後縫は取り除かれていな。裏面に細かい剥離がされている。
尖頭器 黒曜石製
168 白濁する黒曜石裏の裏面調整の尖頭器である。下側の欠損面は裏面左側にリングが結集している。平面形は左右非対称で、先端部付近を左側削離が張り出している。側面形は先端がわずかに縮くなるほか一定で、直線的である。右側後縫はジグザグ状であるのに対し、左側は直線状である。横断面形は裏面凸レンズ形だが、後縫が残っている。調整はほぼ全周に粗な剥離がされているが、左側縁の張り出す部分の裏面には剥離がされていない。
169 透明な黒曜石製の両面調整の尖頭器である。下側の欠損面は裏面右側にリングが結集している。折れ面は裏側にヒンジフラックチャーナーをおこしている。運営しているのは、先端部のみであるが、平面形は三角形状で、側面形は先端から頭部にかけて厚みを増す。裏面側は平坦であるが裏面側が頭部で飛んでいる。横断面形は裏面凸レンズ形である。裏面裏面に裏面を残している。調整は裏面頭に細かい剥離をしている。
170 光沢のある黒曜石製である。平面形は左右非対称で、縱長の六角形に近い形をしている。側面形は裏面角が扁平であるのに対し、裏側は大きく凸状に盛り上がる。横断面形は半円形である。裏側に素材の疊出を残している。裏側は全面を剥離で覆われている。右側縁の急斜度の剥離の様子から、前器あるいは強器の可能性もある。
尖頭器 装置
133 大きさS顎、先端角約45度の尖頭器である。下半分をなくが、先端部形状は131同様、アーチ状で緩やかに頭部へとつながる。周縁は細かな剥離で覆えられている。
尖頭器 硫酸銅質質寶物製
171 白色を呈し、同一母岩の剥片が1点ある。基部の欠損面では裏面中央付近にリングが結集している。平面形は上半部に最大幅をもつ。側面形は裏側が平面で、裏面側が中央付近で凹状になっている。先端部はほかと比べ薄い。横断面形は扁平な六角形をしている。調整は裏面側に入金にされている。
172 白色を呈するが、40と比べ光沢がある。下側は左側縁方向からの加齢で欠損している。側面形は頭部から基部にいくに従い細くなる。横断面形は裏面凸レンズ形である。調整は裏面とも細かい剥離で覆われ滑らかな器面を形成している。
尖頭器 鋼性鍍錫岩鉱
173 下半分を裏面からの加齢で欠損するが、平面形はほぼ左右対称の変形を呈すると見られる。欠損面への剥離は認められない。風化が激しく剥離が不明である。
174 下側の欠損面では裏面右側にリングが結集している。平面形は先端から頭部中央にかけて緩やかに湾曲し、その先頭部中央から基部方向にかけて若干幅広になるとともに直線的になる。側面形は、裏面側は扁平で、裏面側は緩やかに打っている。先端は裏面側に屈曲している。裏面先端角は45度である。剥離は裏面中央付近と先端部付近が細い。横断面形は裏面中央部に後のある裏面凸レンズ形である。調整は平面形があり張りっていないわりに裏面側に剥離がされている。裏面左下の剥離は剥落症になっている。
175 平面形は正面非対称で裏面縫線上と右側縫線上に張りをもつ變形をしている。側面形は先端部と基部のみが細く、それ以外は裏面側が平坦で裏面側が凸状をしている。調整は裏面の左下と右側縫は段階状になっている。裏面右上、左下とも同様である。横断面形は基部付近で左側角、基部付近で平行四辺形をしている。
176 平面形は変形を呈するが、裏面形は非常に厚く、裏面の中央部に大きな段差がある。裏面右側に素材の主要剥離面の打痕が厚く残る。これを除去するために左側縫に施された剥離が、剥離部を呈する。横断面形はかなり不均整であるが、先端部やドット部分に細かい調整が施されているので、完成品に近い状態なのかもしれない。
尖頭器 褐灰岩製
163 左側縫が大きく「く」の字に突出することや、先端部の調整が不十分であることから、未完成の可能性が高い。下半部に剥落状剥離が認められる。
種器 無斑品質寶山岩製
177 平面形は下端がやや尖る円形を呈する側面形は素材剥片の反りが残る。背面の左側縫から裏面にかけて刃部が作り出されている。刃部角は鋭角に近い。裏面は無加工である。
178 平面形は、上部右側にくほんだ部分があるが、ほぼ円形を呈する。側面形は勃起形である。横位の素材剥片の全面に刃部が作り出されている。裏面は無加工である。
179 平面形はほぼ円形を呈する。両面を覆うような裏面剥離がなされているが、刃部は裏面に作り出されている。下端刃部に微細剥離が残る。全体的に裏面が顯著であるため、剥離が不明瞭である。
180 素材の打面・打瘤は折断により、陥没されている。このため、平面形は上端が平らな「U」字状を呈する。側面形は表面中央で大きく膨らみ、裏面が平らである。下端に急傾度の刃部が作り出されている。
181 平面形はやや緩慢の構円形を呈する。上端に平坦な面が見られるが、これは素材剥片の打面ではない。側面形は裏面側がやや膨らむ。両面が剥離度で変われており、裏面の比較的広い剥離面は、剥離の深さが深い。刃部形成のための細かな剥離は裏面に對して施されているため、比較的鋭角的な刃部となっている。
182 上端左側は素材剥片の形状に起因して、抉れたようになっている。側面形はほかの器種に比べて薄い鋸縫形を呈する。刃部は右側縫から下端にかけて作出されている。裏面は無調整である。
183 平面形は横長の構円形を呈する。側面形は素材剥片の形状を残して反っている。左側縫に裏面が残る。裏面中央の広い剥離面は凸状を呈し、左側縫の裏面に接する一端の剥離を切っている。素材剥片の打面・打瘤は折断により除去されている。下端から右側縫にかけての剥離は刃部作出のための剥離である。
184 左側縫から裏面にかけての刃部が直線的なため、平面形は五角形に近い形を呈する。上端に素材剥片の打面が残存する。この打面には、打面調整が認められる。側面形裏面下部が厚みを増し、裏面は平らである。刃部は下端に作出されているが、左半分は不自然に直線的である。使用に伴う刃部剥離が行われた可能性がある。
185 平面形は縱長の構円形、側面形は勃起形を呈する。両面に剥離が施され、刃部はおもに左側縫に作出されている。上端の刃部角は比較的緩やかで、削離に近い。
186 平面形は裏面溝を呈する。側面形は上半部が下半部の2倍近く厚さをもつ不均衡な形をしている。裏面と、裏面下半部に剥離が施される。左側縫の裏面が一部磨滅している。

187	平面形は「U」字状を呈する。上端には素材剥片の打面が残存する。侧面形は直線的である。刃部はおもに左側縁から下端にかけて作出される。
種類	黒曜石製
188	微細剥離が全周する。両面に平坦剥離が施されていることから、尖頭器の被破品を転用した可能性が考えられる。
189	反りの大きい剝片を素材としている。上端への剥離で打面が除去されている。
種類	チャート製
190	先端部は欠損面あるいは折断面であるが、この剥離面への調整は行われていない。両面に平坦剥離が施されていることから、尖頭器の被破品もしくは未成品を鋸器に転用している可能性がある。
種類	酸性凝灰岩製
191	上端は左側縁直側への剥離が原因で破損している。被破面には剥離が施され、鋸器の刃部のように整えられている。
石種	鰐皮質安山岩製
192	筋理が発達した石材である。打面を固定し、求心的に剥離を進めている。
石種	砂岩製
193	下端に敲打痕が残る。はじめに横方向に削られた後、下端の敲打の影響で縱方向に削っている。
二次加工のある剥片	無斑晶質安山岩製
195	剥片の下部である。背面下端の剥離のように見える部分は、主要剥離前のものだが、中央付近のものは折れのあととの剥離である。腹面左側縁から末端にかけても剥離痕がみられる。平面形は尖頭器の先端と基部のように両端が狭くなっている。横断面形は分厚い平行四辺形状をしている。側面形は先端付近が薄く、中央で最も厚くなる傾向である。
196	剥片の下部である。背面左の鋸長剝片は、主要剥離前のものもあるが、そのほかは剥離後のものである。腹面も周縁を剥離されており、主要剥離面は右半分に縮幅する傾向である。平面形は右側縁が張り出す左右対称形である。横断面形は楔形をしている。側面形は中央部が肥厚する両面凸レンズ形をしている。
197	打面側を久沢しておらず、背面右側上半部と右側縁に剥離がされている。腹面左側にも剥離が認められる。横断面形は左側が厚い楔形をしている。側面形は背面側が凸状の両面凸レンズ形をしている。
無石刃ブロック出土の尖頭器	無斑晶質安山岩製
228	平面形は整った菱形を呈する。全面が平凸な剥離に覆われた、非常に薄手で精緻な作りの尖頭器である。全体的に丁寧な作りのため、先端部と基部の区別も困難である。C13グリッド周辺の尖頭器間隔の石器集団中最もから50mmほど離れた、L15グリッドに単独で出土した。出土状態は土上上部から中間にかけて斜めに立った状態であった。

片まで描っていることから、比較的初期の剥離工程から行われていた可能性がある。205は観察した中で唯一裏面を打面とする剥片であった。尖頭器未成品の可能性がある195・196も④の石質である。

石質③・④のどちらにも分類しがたい母岩にNo.1とした石材がある。この母岩には大形から小形まで各種大きさの剥片が揃っている(202・203・207・217・222・223・227)。この中には裏面のある剥片は無いため、202より大きい未成品から剥片剥離作業を開始し、222・223・227のような小形の剥片が剥離される段階まで作業が進んだものと推定される。

以上のことから、上ノ原遺跡の無斑晶質安山岩製尖頭器製作にかかわった石質は②~④が主体であることがわかる。遺跡での製作の開始は、60mmを越える剥片が9点ある以外は、石核や裏面の残る大形の剥片が少ないので、素材か未成品の段階で撤入され、調整が加えられたと考えられる。

なお、194は一見細石刃に見えたが、縦長剥片という認識で問題なさそうである。

酸性凝灰岩製

酸性凝灰岩の剥片55点は母岩別に4つ以上に分けられる。本遺跡で出土している尖頭器が3点で、そのうち同一母岩とみられるのは1点あるが、風化が激しく断定は

できない。このことから、製作された尖頭器は搬出されたと考えられる。また、遺跡の尖頭器は完成品に近い状態で搬入されたと推定される。剥片の大きさは大きいもので80mmを越える。S1の大きさの剥片がそろっており、この遺跡内で剥片剥離が行われたと推定できる。裏面をもつものは見られないことから遺跡には粗削された状態で搬入されたのであろう。

珪質凝灰岩質

8点のうち2点は裏面を残している。剥片というより、裏面というべきものである。内1点は長さ6cmほどの細長い剥片である。もう1点は4cmほどの大きさである。いずれも尖頭器の素材にはなりそうもない。長さ20mm、幅16mm、厚さ2.5mmの白色の剥片が尖頭器171と同一母岩であるが、接合はしなかった。そのほかの7点はすべて単独資料である。

黒曜石製

透明のもの、光沢のあるものがあるが、同一母岩かどうかは不明である。3cm程度の大きさのものがある以外は2cmに満たない小形・薄手のものである。

チャート製

1点のみだが、長さ、幅とも2cm程度の裏打面をもつ剥片である。

h) 細石刃ブロック出土の尖頭器 (228)

VI 成果と課題

1 細石刃石器群の特徴

はじめに、議論の分かれるところである細石刃石器群と局部磨製石斧の共伴関係について述べる。両者は共にモヤ下部文化層より出土しているが、本遺跡の第5次調査において上Ⅱ上部文化層より杉久保系石器群と瀬戸内系石器群、尖頭器石器群の3者が検出されている状況を見る限り、同一層準からの出土をもって両者の共伴を積極的に支持することは難しい。類例の増加を待つて慎重な検討が必要であり、現時点では両者を分離して考える。

1) 細石刃石核の系統

本遺跡の細石刃石核はA～D類に分類された。A・B類は剥片、分割縫、小形縫を素材とし、形態は角錐状、角柱状、板状と様々である。打面には素材の剥離面もしくは分割面があたられ、A類は石核調整が観察されないのに対し、B類は石核調整が行われる。いずれも打面調整が施されるものと施されないものがある。両者は製作工程の差と考えられ、共に「野岳・休場型細石核」（鈴木1971）もしくは矢出川技法（安藤1979）による細石刃石核の範疇に入る。

C類は、剥片もしくは分割縫を素材とする。その腹面もしくは分割面を打面として石核調整が行われ、意識的の容器体が船底形に整形される。打面調整は施されない。本類は、神奈川県藤沢市代官山遺跡第Ⅲ文化層より出土した接合資料に基づいて復元された「代官山技法」（砂田1986・1988）による細石刃石核に類似する。これは小形の角縫、分割縫、剥片を素材とし、その平坦な自然面もしくは単剥離面が打面に設定される。細石刃の剥離に伴い、この打面から石核の側面に調整を施し、底面が船底形に保持されるという。打面調整が行われている例も存在するが、継続性は乏しいということである（砂田1994a）。なお、本技法の特徴は側面調整と細石刃剥離が交互に行われる点であるが（砂田1986）、本遺跡においては接合資料が確認されていないため、あくまでも残核形態から見た類似である。

神奈川県綾瀬市吉岡遺跡B区L1H層においても同様な

細石刃石核が出土しているが（砂田ほか1998）、両遺跡において自然面を打面とするものが一定量存在するのに対して、本遺跡ではそれが見られない。

また、長野県南佐久郡南牧村中ヶ原第5遺跡B地点出土の細石刃石核の類型2（吉井1991）、同木曾郡開田村柳又遺跡A地点の細石刃石核のⅢ類（谷口1991）にも類似する。これは分厚い剥片を素材とし、その平坦な剥離面を打面として側面が調整され、断面形が楔形を呈する。打面調整は行われない。なお、このⅢ類については、削片系細石刃石核の受容を契機として素材に応じて作り分けられた応用型とされ、中ヶ原第5遺跡B地点の類型2も同様に考えられている（谷口1991・吉井1991）。

代官山技法については船野技法との関連が示唆されているが（砂田1986）、堤隆氏が指摘するように本技法による細石刃石核は野岳・休場型のバラエティーとして捉えられる（堤1987）。従って、本遺跡のC類もA・B類と同様に野岳・休場型の範疇に入るものであろう。

2) 石器組成について

上記の細石刃石核41点に伴う石器は、細石刃41点、彫器6点、搔器・削器30点、敲石6点で、その割合を見ると、細石刃33.1%、細石刃石核33.1%、彫器48%、搔器・削器24.2%、敲石4.8%となる。細石刃と細石刃石核を除いて、ほとんどを占めているのが搔器・削器である。これらは大形の剥片を素材とするものが多く、形態もバラエティーに富んでいる。なお、中部地方の細石刃石器群において、搔器・削器の形態が多彩であることが指摘されている（織笠1984）。これらの中でも特徴的なものは、尖頭状搔器（112～119）としたものである。

この尖頭状搔器については、南関東および中部地方、相模野台地の野岳・休場型細石刃石核をもつ石器群や西南日本の船野型細石刃石核をもつ石器群に特徴的に伴うと言われている（織笠1984・堤1991・松浦1993）。しかし、尖端部から判断する限り、これらに比べ本遺跡のものは刃部の調整が面的、入念であり、より後出的な特徴

をもっている。

関東以西の野岳・休場型細石刃石核をもつ細石刃石器群は石器組成において彫器の占める割合が低く、組成しても形態が不確定なものが多い傾向であるが（織笠1984）、本遺跡では数は6点と少ないものの、折断面を彫刻刀打面としたもの、交差する彫刻刀面をもつものなどいずれも定型的である。彫搔器1点（89）が含まれている点も注目される。

本遺跡の石器組成と類似する細石刃石器群に、北約2kmに位置する向新田遺跡（高山グリッド）がある（野尻湖人類考古グループ1987・菅沼・野尻湖人類考古グループ1994）。この遺跡の細石刃石核にはC類があり、また、搔器・削器の形態バラエティーおよび調整のあり方が類似するだけでなく、ブロックを越えて尖頭器石器群（五輪グリッド）が分布する点も本遺跡と共通する。

3) 石器群の編年的位置付け

中部地方における細石刃石器群の編年については、これまでいくつかの案が示されているが（源訪問1991・谷口1991・吉井2003・立木2003ほか）、ここでは源訪問順氏の編年案に従う。同氏は相模野台地における段階変遷と対比して、第1段階：野岳・休場型細石刃石核のみ、第2段階：野岳・休場型+船野型細石刃石核、第3段階：削片系細石刃石核のみ、第4段階：神子柴系尖頭器+削片系細石刃石核という段階区分を示している。本遺跡の細石刃石核は野岳・休場型細石刃石核で構成されていることから、本石器群は第1段階に位置付けられる。また、これは同氏が示した相模野台地における段階変遷の段階IVに相当する（源訪問1988・2001）。

しかし、前述したように本遺跡の搔器の中には91・96・97、112～119など後出的な形態のものがみられる。特に112～115の尖頭状搔器は、削片系細石刃石核と神子柴系尖頭器が共伴する神奈川県大和市上野遺跡第1地点第II文化層出土の搔器（相田ほか1986の第100図48）および同級瀬山寺尾遺跡第I文化層出土の石斧もしくは削器（鈴木・白石1980の第21図68）に類似することから、堤氏も指摘しているように野岳・休場型細石刃石核をもつ石器群が第4段階まで残存した可能性も指摘できる（堤2008）。

なお、本遺跡では分布を越えて尖頭器石器群が出土している。細石刃石器群と形態の類似する搔器を組成して

おり（177～186および165）、細石刃石器群と同時期もしくは尖頭器石器群が後出であろう。現時点では後者と考える。

4) 局部磨製石斧について

本遺跡の局部磨製石斧について、稻田孝司氏は細石刃石器群との共伴を積極的に認め、神奈川県寺尾遺跡（第1文化層）、月見野上野遺跡第1地点（第2文化層）、長堀北遺跡（第2文化層）、勝坂遺跡、大分県市ノ久保遺跡を例に挙げ、細石刃文化と神子柴文化が単一の時系列の中で順次交代していただけなく、一定の時期と地域において共存したとした（稻田1993）。さらに同氏は論を進め、草創期を柔軟にとらえている（稻田2000）。

なお、稻田氏より先に大分県市ノ久保遺跡での船野型細石刃石核と神子柴型石斧の共伴事例から、九州における船野型細石刃石核をもつ石器群と神子柴文化の併行が指摘された（栗島1991・締貴1992）。しかし、上記のような神子柴文化を縄文時代草創期に組み入れる編年観について、岡本東三氏は石刃技法の消長をメルクマールとして神子柴文化を定義し批判している（岡本1999）。

最近では、谷口康浩氏が草創期を旧石器・縄文時代とも異なる移行期として暫定的に捉え、複雑な様相を呈する移行期の石器群を整理するためには段階変遷論からの転換が必要だとしている（谷口2003）。そして、構造的・特殊化した削片系細石刃石器群と開放的・脱構造的な長者久保・神子柴石器群がモザイク状に並存していたとし、前者が終息し後者が主流になった要因に石器（製品）が広い範囲を転移する「石器のトランスポーティ」の概念を導入した。筆者も草創期を移行期として捉えなすことには賛成であるが、本遺跡における細石刃石器群と局部磨製石斧の共伴については慎重に考えたい。

本遺跡の局部磨製石斧の特徴は、狭長な平面形と緩やかに尖る基部である。旧石器時代終末から縄文時代初期の石斧をまとめた白石浩之氏の分類に従えば、本遺跡例は1b類（宮ノ内タイプ）の範疇に入る。その特徴は、身が細く、両側縁が並行し、基部が尖り気味で、曲刃であり、その出現は旧石器時代終末から縄文時代草創期中葉まで続くとされている（白石1992）。また、森鷗外氏は神子柴型石斧の変遷を述べる中で、後出のものはほど狭長化するとしており（森鷗外1970）、本遺跡の石斧は土器の共伴する時期まで下る可能性もある。

2 尖頭器石器群の特徴

1) 石器群の概要

- ① 3基の櫻群を伴い、東西約9m、南北約12mの範囲から1,735点の石器が集中して出土した。石器はモヤ上部から上Ⅱ上部にかけて偏りなく出土したが、櫻群の下面が全てモヤ下部下面付近であることから、この層準が本来の生活面であると判断される。
長野県埋蔵文化財センターの層位（谷・大竹2003）に対応させると、包含層がⅢ～Ⅳ層、生活面がⅢ層下部となる。
- ② 石器には尖頭器、円形搔器、削器、二次加工のある剥片、剥片、敲石がある。剥片石器の石材は、ほぼ9割を無斑晶質安山岩が占め、ほかに凝灰岩、珪質凝灰質頁岩、頁岩、黒曜石、チャートが用いられている。円形搔器や削器は尖頭器の調整剥片を素材としている。無斑晶質安山岩製尖頭器を主とする石器製作に関わる遺物である可能性が高い。
- ③ 尖頭器の形態は中央からやや下半にかけて最大幅をもつ、両面調整を基本とする。平面形は細身のものと幅広のものがある。大きさは5～7cm程度である。大部分が完成品の破損品であり、未完成品はない。
- ④ 尖頭器の製作は素材剥片あるいは未完成品の嵌入段階から開始されていたようである。この場で石器製作を行っていた可能性もあるが、尖頭器完成品の破損品が多いこと、同一母岩に属する尖頭器・剥片が少ないこと、接合資料が無いことから、別の製作の場から破損品等が廃棄された可能性もある。もしくは製作場と廃棄の場が時間差をもって複合している可能性がある。
- ⑤ 出土状況からみて、石器集中域は調査範囲外の北側へ広がると推定される。

2) 尖頭器石器群の編年的位置付け

今回報告する尖頭器石器群（以下、1次調査資料）は、尖頭器を主に、円形搔器・削器・敲石という単純な組成を示す。尖頭器の形態は中央から下半にかけて最大幅をもつ木葉形を呈する。調整は全て両面調整である。

尖頭器の変遷については藤野次史氏や白石浩之氏の論文にまとめられている（藤野2004、白石2001）。両氏の

見解は、槌状剥離を有する尖頭器→両面・両面・片面・周縁加工の小形尖頭器→両面加工の中・大型尖頭器→有舌尖頭器という大まかな流れでは一致している。また、谷・大竹両氏によって、近年の野尻湖遺跡群の発掘成果をもとに遺跡群の編年が整理されている（谷・大竹2003）。これらを参考に1次調査資料を検討する。

まず、尖頭器の形態から考えると、両面調整のほか片面調整や周縁調整による小形の尖頭器を組成する新潟県真人原遺跡（小野編1992・1997・2002・2006）よりは新しい様相を呈する。野尻湖遺跡群では、黒曜石製の片面・両面調整の小形尖頭器に掃指状搔器・抉入削器・角錐状石器が伴う西岡Ⅲa文化より新しい。おそらく無斑晶質安山岩製の尖頭器を主体とする西岡Ⅲc石器文化（谷・大竹2003）に対比されるが、尖頭器の形態が1次調査資料のほうが下に最大幅を持つ点で若干新しい可能性がある。そして、有舌尖頭器を組成しないので、それよりは古相を呈する。

ここで、近年の上ノ原遺跡の別地点の調査事例を見る。信濃町教育委員会による第4次調査ではモヤ下部を中心に、縄文時代草創期の尖頭器石器群がまとまって出土した（中村・渡辺1996）（以下、4次地点とする）。この石器群の石器組成は通常の尖頭器、草創期特有の細身の尖頭器、有茎尖頭器、スクレイバーであり、石材には無斑晶質安山岩が多用される。

長野県埋蔵文化財センターが上信越自動車道建設に伴い調査した地点は、1次調査地点の北東約150mにある（以下、高速道地点とする）。柳葉形の尖頭器を特徴とする石器群（上ノ原Ⅱ石器文化）が検出された。石器組成は尖頭器、削器、角錐状石器を主体とし、石材には無斑晶質安山岩が多用されるが、製品には頁岩系の石材が目立つ。ナイフ形石器を組成せず、尖頭器の形状も整っていることから、尖頭器文化の後半から終末に位置づけられ、野尻湖人類考古グルーピングの上Ⅱ上部からモヤ下部文化層に対比されている（土屋・谷2000）。

上ノ原遺跡第5次調査（県道地点）でも上Ⅱ上部文化層において尖頭器石器群が出土した（中村ほか2008）（以下、5次地点とする）。長野県埋蔵文化財センターの基本層序（谷・大竹2003）に対比させれば、Ⅲ層にピークをも

ながら大部分はII～IV上層に相当する。尖頭器石器群は、出土層位・尖頭器の形態・調整方法・石器組成・石材組成などから4群に細分されている。IVA石器群は黒曜石を主要石材とする小形尖頭器・搔器が組成する。IVB石器群は頁岩を主要石材としてやや幅広の木葉形尖頭器・細身で小形の尖頭器を組成する。IVC石器群は頁岩を主要石材としてIVB群より細身の尖頭器が多く、周縁調整の尖頭器・石刃を組成する。加えて、彫器の製作が行われていることを特徴とする。IVD石器群は、尖頭器そのものは出土していないが、下茂内遺跡などにみるような大形両面体から剥離されたと見られる調整剝片を主体とする。以上4つの石器群については、層位的な面も加味して、A→C→B・Dの時間的推移が指摘されている。

これらと、1次調査資料を比較すると、いずれの石器群もモヤ下部（長野県埋蔵文化財センターのⅢ層下部相当）をおもな出土層位としており、層位から明確な時間差に言及するのは難しい。

石器組成の点では、細身や有茎の尖頭器を組成しない点で、4次地点の草創期石器群とは異なる。5次地点と比較すると、1次調査資料は石刃や彫器を伴わず、尖頭器も両面調整を基本とすることから、IVA～C群よりも後出的な様相を示す。高速道地点とは角錐状石器は別として、石器組成や尖頭器の形態において類似を認めることができそうである。

石材は無灰晶質安山岩を多用する点で、4次地点の草創期石器群に近いといえる。

野尻湖周辺で類似の石器群をさがすと、向新田遺跡出土石器（野尻湖人類考古グループ1987・菅沼・野尻湖人類考古グループ1994）が挙げられる。野尻湖周辺の遺跡では尖頭器が出土する遺跡は少なくないが、ほかに1次調査出土資料のような石器群は見当たらない。

地理的にやや離れるが、類似の尖頭器石器群に八千穂村池の平遺跡群がある。この石器群は黒曜石製の両面調整尖頭器を主体としており、相模野台地のL1Hに対比される可能性が指摘されている（織笠1986）。

ほかに類似する石器群として飯山地方の千苅遺跡（中島1990）がある。飯山地方の編年試案では、飯山Ⅲ期に開沢遺跡、飯山Ⅲ期～IV期に千苅遺跡、飯山IV期～繩文時代に横倉遺跡が位置付けられている。飯山Ⅲ期は尖頭器が主体となる時期で、この時期に細石刃が登場する。IV期は大形の尖頭器石器群である（豊月・高橋1989）。

また、群馬県石山遺跡の石器群は1次資料と同様に尖頭器・搔器・剥片類という単純な組成をもつ。尖頭器の形態も幅広・幅狭のものがあり、通じるものがある。石山遺跡の石器群の出土層位は板鼻黄色輕石層より上位のローム層中であることから、旧石器から繩文時代移行期の文化と位置づけられている（相沢・関矢1988）。

以上のことからも、1次調査資料は細石刃登場後の、旧石器から繩文時代の移行期に位置づけておくのが妥当であると考える。

最後に、1次調査で検出されたほかの石器群との関係について考える。1次調査区ではナイフ形石器群、尖頭器石器群、2ヶ所の細石刃石器群（G17グリッド周辺、L16グリッド周辺）が検出された。尖頭器石器群とナイフ形石器群は出土層位・平面分布とともに異なるため共伴関係を否定できる。しかし、尖頭器石器群と細石刃石器群は出土層位が地質学的に区別されるものではないため、これを分離するべきか、共伴と捉えるべきかという問題がある。

平面分布を見ると、両石器群は20mほど離れているが、両者の間に約10mの未調査部分があるため、平面や上下関係を直接検証することはできない。

石器組成を見ると、尖頭器石器群とG17グリッド周辺の細石刃石器群では尖頭器・細石刃・細石刃核以外の石器では石材、器種・形態がよく類似する。L16グリッド周辺の細石刃石器群では、尖頭器（L15-31）も出土している。なお、細石刃石器群の分布域では局部磨製石斧も出土している。

このような状況を踏まえると、1次調査資料については以下の可能性が考えられる。

- ① 尖頭器石器群と細石刃石器群は共伴しない。この場合、他地点の成果をふまえ、尖頭器石器群の方がより後出的であると考える。
- ② 尖頭器石器群と細石刃石器群は同時期の所産とする（局部磨製石斧除く）。この場合の発年の位置付けは、野岳・休場型石核の段階から繩文時代移行期の幅の中のどこか、となるが詳細は不明である。仮に移行期の石器群となれば、野岳・休場型細石刃核のこれまでの評価を再考する必要がある。

上ノ原遺跡第1次調査と同様の事例に、岡山県東遺跡がある。東遺跡では細石刃石器群と尖頭器石器群が隣り合わせに出土しており、細石刃石器群では局部磨製石斧

も出土している。両石器群は後期旧石器時代末～縄文時代草創期に位置づけられている（新谷2004）。ただし、東遺跡の細石刃石核では野岳・休場型と船底形の存在が確認されており、尖頭器石器群については周辺・部分調整が主体となることから、東日本における細石刃石器群

の出現以前にその時期が想定されている（三好2007）。従って、上ノ原遺跡第1次調査とは若干状況が異なる。

上ノ原遺跡第1次調査の細石刃・尖頭器・局部磨製石斧の相互関係については、今後の事例増加を待って検討を要することとし、現段階では結論を保留する。

3 石囲い炉の存在

1) 石囲い炉の判断と意義

今回の遺構を石囲い炉と判断した理由は次のとおりである。上ノ原遺跡の遺構は、石囲い炉とされている沼津市休場遺跡、野台遺跡などの出土例と比較すると（表3）、礫がやや小さく、礫と礫の間隔が少しあっていることが相違している。また、明確な焼土や大きな炭化物が認められないことからも、石囲い炉とするには証拠が弱いかもしれない。しかし、平面形状が国内特に沼津市周辺の出土例によく似ていること、さらに野尻湖遺跡群における礫群には、上ノ原遺跡第1次のC-13グリッド周辺のものも含めて、角、亜角、亜円レキを主体とし、礫が精選されてなく、炉址のようにならんだ状態のものがみられないことなどから本遺跡のものは石囲い炉と判断した。

石囲い炉の平面形状は、休場遺跡例の2形態が多くみられる。休場1号、野台2号を典型とする「こ」の字状を呈するものと、休場2号、野台1号、下長瀬上野遺跡を典型とする円形ないしは半円形、U字状を呈するものである。大きさは、一般的には「こ」の字状のものの方が大きく、円形、半円形のものは小さい傾向がある。

構成する礫の大きさと個数は、20～30cmの大きな礫を10点前後使用する例が典型的である。中には、上ノ原遺跡のように、やや小さな礫を多く用いているものもみられる。この点について、小さな礫を主体とするものは、石囲い炉ではなく礫群とするべきだとする意見がある（笠原・瀬川1992）。しかし、石囲い炉が製作された遺跡の立地条件がすべて同じではなく、大きな礫が入手しやすい環境では、素材礫の選択も多様であったことが予想される。

上ノ原遺跡町道地点の近くで円～亜円レキが採集できるのは、約2km南方の鳥居川の川原が最も近い。遺跡付近のローム層中に礫がほとんど含まれないことから、

2kmの距離を6～33cmの礫、175点を運搬するのは、かなりの労働だったと推定される。

火が多くたかれた結果として、焼土や灰層が残されていれば、炉址の条件を満たすことになるが、現状で見る限り、開地遺跡ではこれらのものが検出される遺跡は稀である。この場合、炭化物の有無、構成礫の被熱の状況（著しい赤化を受けていることなど）が決め手になると思われる。

日本列島では、旧石器時代遺跡で有機物の遺物が残されにくく、また、遺構があまりみられない現状なので、当時の人類の生活と社会の復元をするためには、残されたわずかな遺物を頼りに研究を進めていくことが不可欠である。そのための1つの方法として、炉址の存在、可能性を追求することは、重要な課題だと思われる。

2) 石囲い炉の時期と石器群との関係

石囲い炉と平面的に重なって出土しているのは、局部磨製石斧の刃部破片F17-96である。刃部破片は2号炉址の内側に構成礫には接する位置関係で出土している。2号炉址は、焼礫数65%、黒色付着物礫数38%、立った礫数26%、割れた礫数35%と、本遺跡の石囲い炉でも平均的な礫の属性がみられるものであることから、炉内部では相当の熱が蓄積されていたものと推測される。

ところが、局部磨製石斧の3点の破片はほぼ同程度の風化具合、色調であり、刃部破片だけ他と違った印象は受けない。色調等からは、全体的にごく弱く被熱を受けた特徴がわずかに認められるが、刃部破片のみが特に強く被熱したと思われる表面の特徴は認められない（発掘写真7・8、顕微鏡写真1）。発掘直後の見解（中村1992）では、「石囲い炉と細石核、石斧が共存することを否定できる資料は今のところみられない」としていたのが、この点については修正しなければならない。局部磨

製石斧に明確な強い被熱痕跡が認められない以上、局部磨製石斧の刃部破片は2号炉址の廃棄後にここに入り込んだ、と結論される。ただし、刃部破片の混入時期は石圓い炉廃棄の直後なのか、長い考古学的時間を経たあとかは不明である。

一方、本発掘の出土遺物のうち、被熱痕跡が確認される石器は、表5とのおりである。黒曜石製のものは、石器表面に被熱を受けると、色調が渋り、顕微鏡観察すると網目状の構造ができるなどから、被熱石器を識別できる。黒曜石製の石器3点、剥片9点の計12点が確認された（顕微鏡写真2、石器写真3）。グリッド別では、B13グリッドとG17グリッドがともに3点で、礫群や石圓い炉のある近くに被熱石器が多い傾向は指摘される。

黒曜石以外の石材については、頁岩類などでは被熱を被ると、火はねした結果石器表面に凹形のへこみ（破碎痕）ができるが、本遺跡の出土品にはこの特徴は未確認である。酸性凝灰岩や無斑晶質安山岩製などの石器の一部には、表面がやや褐色がかっており、風化が進んで見えるものがあり、これらは被熱石器である可能性を検討すべき資料だと思われる（顕微鏡写真2）。F17、G17、G18、H17の各グリッドの出土品が計11点あり、石圓い炉をとりまく遺物集中部の石器である点は、被熱の可能性が関係あるかもしれない。

以上見たように、被熱石器はC13グリッド周辺の尖頭

器石器群やさらにはかのグリッドにも少し見られるが、石圓い炉のあるG17グリッド周辺に被熱石器と可能性のあるものが多いことは重要である。これらの石器は、細石刃石核1点と可能性があるものではスクレイパー、彫器など細石刃石器群に属すと考えたものである。

石器表面の被熱痕跡をたよりに考えると、石圓い炉は黒曜石製の細石刃石核とほぼ関連し、酸性凝灰岩、凝灰岩、無斑晶質安山岩製などの石圓い炉周辺のやや大振りな搔器、削器などの石器群と共に伴する可能性が考えられる。一方で、局部磨製石斧は、細石刃石核、搔器類などとは区別されるべき出土状況とみられる。

野尻湖遺跡群では、薄い地層中に多くの異なる石器群が近接して、あるいは重なって出土する例が多いが、上ノ原遺跡町道地点（第2次）や上ノ原遺跡県道地点（第5次）でも、上Ⅱ上部文化層にナイフ形石器群、尖頭器石器群が重なって検出されていて、層位的には区分できなかった。のことからも、野尻湖遺跡群においては、平面的な重複分布に関しては慎重に検討しなければならないことを示している。また、野尻湖遺跡群では神子柴石器群の石斧や尖頭器が多くの遺跡で出土しているが、星光山荘B遺跡を除いて、ほとんどが単独的な出土であることは注意しなければならない。このことも、本遺跡の局部磨製石斧の取り扱いについては、まだ、解決できない点が多いことを示唆していると思われる。

VII 上ノ原遺跡(第1次・北部高校分校跡地地点)発掘調査のまとめ

遺跡・調査

上ノ原遺跡（第1次・北部高校分校跡地地点）は、長野県上水内郡信濃町大字柏原字上ノ原、岡美に位置し、関川水系と鳥居川（信濃川）水系の分水嶺付近に属す。発掘場所は国道18号線と上信越自動車道の間に挟まれた丘陵部に立地し、北緯36度48分48.52秒、東経138度12分02.02秒（日本測地系）にある。

上ノ原遺跡は1988年の柏原町区誌遺跡分布調査で発見され、北西—南東方向の長軸900m、幅250～500mで、面積約330,000m²におよぶ大面積の遺跡で、1990年以降、7次にわたる発掘調査が行われており、第1次調査はこの遺跡の中では北部の地点にあたる。第2次調査地（町道地点）の北東約100mにあたる。

地層・年代

発掘地の遺物包含層は、黒土（柏原黒色火山灰層）直下の最上位のローム層である上部野尻ローム層Ⅱであり、モヤ下部（Ⅲ層）に文化層がみられる。下位にある上Ⅱ最下部はAT降灰層準であり、暦年未校正で約2.5万年前の前後、モヤ下部は約1.4万年前と推定される。

旧石器時代の石器群

発掘で確認された石器群は、細石刃石器群と尖頭器石器群の2石器群と認識した。本遺跡では細石刃石器群が2ブロック、尖頭器石器群が1ブロック検出された。

細石刃石器群が分布するG17グリッド周辺とL16グリッド周辺からは、総数1,197点の遺物が出土し、細石刃

石器群を中心とする。細石刃41点、細石刃石核41点、彫器6点、搔器・削器30点、敲石6点、石核1点および局部磨製石斧1点、という組成である。5基の石圓い炉と1基の配石遺構が伴う。

石材は記載遺物の内訳でみると、黒曜石82点(65.1%)、凝灰岩類17点(13.5%)、無斑晶質安山岩14点(11.1%)、頁岩類7点(5.6%)、チャート1点(0.8%)、および砂岩5点(4.0%)という構成で、細石刃関係は黒曜石が圧倒的に多く、その他の石器では凝灰岩類と無斑晶質安山岩が多くを占めている。

黒曜石は望月明彦氏によって産地推定が実施されている(鶴田ほか編2004)。その結果、細石刃石器群の黒曜石(82点)のうち、諏訪星ヶ台群が68点で82.9%を占めている、その他も蓼科冷山1点をのぞき、和田周辺のものであった。

細石刃石器群は野尻湖遺跡群では、仲町遺跡、向新田遺跡などに類例がみられる。

尖頭器石器群が分布するC13グリッド周辺からは、総数1,735点の遺物が出土し、尖頭器石器群を中心とする。報告したものだけで尖頭器48点、尖頭器未成品または削器1点、搔器14点、削器1点、敲石1点、石核1点という組成である。石材は記載遺物の内訳でみると、無斑晶質安山岩80点(79.2%)で大半を占め、ほかに凝灰岩類8点(7.9%)、黒曜石5点(5.0%)、頁岩類4点(4.0%)、チャート3点(3.0%)、砂岩1点(1.0%)である。無斑晶質安山岩製尖頭器を主体とする石器製作にかかわる遺物である可能性が高い。3基の礫群が伴う。

旧石器時代の石圓い炉

G17グリッド周辺には、長さ9m、幅1.6mの範囲内に、ほぼ東西方向に一列にならんで、5基の石圓い炉が検出された。「こ」の字状と思われる1号、3号、4号、円形の2号、破損しており原形不明の5号から構成される。これらの炉址は175点の礫からなり、焼藻67%、黒色付着物38%、立った礫数26%という構成で、人為的な造構で長く火を受けていた痕跡が認められる。

細石刃石器群に伴うものと思われる。旧石器時代の石圓い炉は類例があり多くなく、きわめて重要な出土例である。

縄文時代以降

近現代の炭窯1基がL16・M16グリッドに出土した。

編年・位置づけ

上ノ原遺跡(第1次・北部高校分校跡地地点)の石器群は、(谷2007)による編年に比較すると、細石刃石器群、尖頭器石器群とともに第V期に相当するものと考えられる。細石刃石器群は野尻湖遺跡群では、仲町遺跡、向新田遺跡などに類例が報告されているが、本報告の細石刃石器群は長野県北部の細石刃石器群の様相を知る上で重要な存在である。同時期と推定した石圓い炉の存在は、明確な造構があまり多くない日本列島の旧石器時代遺跡の研究の中では、貴重な出土例となったものである。

引用・参考文献

- 相田 薫ほか 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会
相沢忠洋・岡矢 晃 1988 『石山遺跡』『赤城山麓の旧石器』講談社
安藤正人 2006 『「神子柴文化」の新解釈—学史的再検討—』『考古学』IV
安藤敬雄 1979 『日本の細石核』『腰台史學』第47号
稻田孝司 1993 『細石刃文化と神子柴文化の接点—縄文時代初期の集団と分離・予察一』『考古学研究』第40巻・第2号
稻田孝司 2000 『神子柴石器群と縄文時代のはじまり』『九州の細石器文化』九州旧石器文化研究会
岡本東三 1999 『神子柴文化をめぐる40年の軌跡—移行期をめぐるカオス—』『先史考古学研究』第7号
小野昭編 1992 『新潟県小千谷市真人原遺跡Ⅰ』真人原遺跡発掘調査団

- 小野昭編 1997 『新潟県小千谷市真人原遺跡Ⅱ』真人原遺跡発掘調査団
小野昭編 2006 『信濃川中流域における旧石器時代の居住型と石材環境』課題番号:16520464平成16・17年度科学研究費補助金 基盤研究C研究成果報告書』首都大学東京都市教養学部考古学研究室
小野昭編 2002 『新潟県小千谷市真人原遺跡Ⅲ』真人原遺跡発掘調査団
織笠 昭 1984 『細石器文化構成論』『腰台史學』第60号
織笠 昭 1986 『7 池の平尖頭器文化の縄年の位置』『池の平遺跡群—八千代大反遺跡・塩ヶ瀬遺跡の尖頭器文化—』八千代池の平遺跡発掘調査団
栗島義明 1991 『日本ノ木論争—その学史的背景と今日的意義—』

- 『日本考古学協会第57回総会 発表要旨』日本考古学協会
- 佐原芳郎・鶴川裕一郎 1992 「旧石器時代後期の伊那、美火路、とくに愛農南竜・箱根西面を中心として」『考古学ジャーナル』351
- 白石浩之 1992 「旧石器時代終末から縄文時代初期の石斧の研究」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生追贈記念会
- 白石浩之 2001 「石槍の研究—旧石器時代から縄文時代初期にかけて—」『小林道雄監修 未完成考古学叢書④』
- 菅沼 豆・野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖周辺の細石刃石群」『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 鈴木次郎・白石浩之 1988 「寺尾遺跡」神奈川県立埋蔵文化財委員会
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻・第8号
- 鈴木忠司 1983 「旧石器人のイエムタ、住居とビット」『季刊考古学』4・37-42
- 杉原伸介・小野真一 1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学雑誌』3-2
- 砂田佳弘 1986 「代官山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター
- 砂田佳弘 1988 「相模野の細石器—その発生と展開に向けてー」『神奈川考古』第24号
- 砂田佳弘 1994a 「相模野細石器の出現—器種変遷と石材流通—」『國學院大學 考古学資料紀録』第10號
- 砂田佳弘 1994b 「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』第30号
- 砂田佳弘ほか 1998 「吉岡遺跡群V」財団法人 かながわ考古学財團
- 調訪尚順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層別の出土例の検討による石器群の段階的把握ー」『神奈川考古』第24号
- 調訪尚順 1991 「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する考察—相模野台地の層位の出土例と中部高地との対比からー」『中ノ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 調訪尚順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 谷 和彦 2007 「野尻湖遺跡群における先史器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要』第13号
- 谷 和彦・大竹憲明 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『第15回 長野県旧石器文化研究交流会 シンポジウム』『野尻湖遺跡群の旧石器時代編年』—発表資料集—
- 谷口康浩 1991 「木曾開田高原構成と遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻・2号
- 谷口康浩 2003 「長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係—一段階編年論を脱却した移行期研究の現在ー」『日本の細石刃文化II』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 立木宏明 2003 「中部地方北部地域の細石刃文化」「日本の細石刃文化I」八ヶ岳旧石器研究グループ
- 土屋 積・谷 和彦 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、信濃町内その1・裏山遺跡、東裏遺跡、太久保南遺跡、上ノ原遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 土屋 積・中島英子編 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、信濃町内その2・星光山莊A・星光山莊B・西阿木A・貫木ノ木・上ノ原・太久保南・東裏・裏山・針木ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七つ栗・普光田」長野県埋蔵文化財センター
- 辻本崇次 1984 「縄石器文化の遺構」『歴史学』60
- 堤 隆 1987 「相模野台地の縄石刃石核」『大和市史研究』第13号
- 堤 隆 1991 「相模野縄石文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第17号
- 堤 隆 2008 「神子柴石器群の時間的位置と出自問題」「神子柴」林茂樹・上伊那考古学会編
- 鷺田典昭・谷 和彦・山崎まゆみ・中島英子編 2004 「仲町遺跡」一般国道18号線(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書3、信濃町内その3」長野県埋蔵文化財センター
- 中島庄一 1990 「飯山市埋蔵文化財調査報告第22集「千卉遺跡の研究」飯山市教育委員会
- 中村由克 1988 「柏原の原始をさぐる」『長野県信濃町「柏原町区誌」』
- 中村由克 1992 「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構」『考古学ジャーナル』342、343
- 中村由克 1993 「縄石刃文化の石西いし」『縄石刃文化研究の新たな展開』II
- 中村由克・岩瀬 彰 2008 「上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査報告書」信濃町教育委員会
- 中村由克・森先一貴・小田誠好・岩瀬 彰・柴科哲男・川端結花 2008 「上ノ原遺跡(第5次・県道地点)発掘調査報告書」信濃町教育委員会
- 中村由克・渡辺哲也 1996 「上ノ原遺跡(4次)」ほか発掘調査報告書」信濃町教育委員会
- 中村由克・渡辺哲也 1998 「上ノ原遺跡(7次)」ほか発掘調査報告書」信濃町教育委員会
- 新谷俊典 2003 「蒜山文化財調査報告書 I 東遺跡I」蒜山教育事務組合教育委員会
- 新谷俊典 2004 「東遺跡」『発掘された日本列島 2004新見考古述観』文化庁
- 野尻湖人類考古グループ 1987 「野尻湖遺跡群の旧石器文化」平川昭夫ほか 1986 「中尾、イラウネ、野台遺跡」長野県教育委員会
- 藤野次史 2004 「日本列島の槍先形尖頭器」同社
- 松浦五輪美 1993 「西南日本の細石刃文化について—特に「野岳、休場型」、「船野型」細石核を中心にー」『考古論集』潮元・清先生追念記論文集
- 三好元樹 2007 「何がわかったかー中・四国地方の旧石器時代末から縄文時代初頭ー」『第24回中・四国旧石器文化論話会発表要旨』岡山県内旧石器時代遺跡調査資料集
- 望月静夫・高橋 桂 1980 「4 C 板山地方の先土器時代編年予察」『飯山市埋蔵文化財調査報告書』第19集 小沼湯浴ハイバス関連遺跡発掘調査報告書 I 日焼遺跡・南原遺跡・森崎遺跡・大倉崎館跡遺跡」飯山市教育委員会
- 森崎 稔 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』第22巻・第10号
- 吉井雅勇 1991 「中ノ原第5遺跡B地点における細石刃剥離技術について」『中ノ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 吉井雅勇 2003 「中部地方南部地域の細石刃文化」「日本の細石刃文化I」八ヶ岳旧石器研究グループ
- 渡辺哲也 2007 「上ノ原遺跡、東裏遺跡、裏山遺跡」信濃町教育委員会
- 綿貫俊一 1992 「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談義』第28集

表5 上ノ原遺跡(第1次)出土の主要遺物一覧表

* 1 黒曜石産定結果については、下記報告書に掲載された望月明彦氏の分析によるものである。

2004 「仲町遺跡」
「新野黒曜石文化財センター」
「上ノ原遺跡出土黒曜石地盤定結果」CD-ROM【仲町遺跡 Disk 2】、

3. 地図名の略称は、長野県文センター番号に一致する。

4. 上新野尻ローム層 II (上 II 上部・上 II 下部)

5. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

6. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

7. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

8. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

9. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

10. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

11. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

12. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

13. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

14. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

15. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

16. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

17. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

18. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

19. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

20. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

21. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

22. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

23. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

24. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

25. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

26. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

27. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

28. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

29. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

30. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

31. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

32. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

33. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

34. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

35. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

36. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

37. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

38. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

39. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

40. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

41. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

42. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

43. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

44. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

45. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

46. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

47. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

48. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

49. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

50. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

51. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

52. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

53. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

54. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

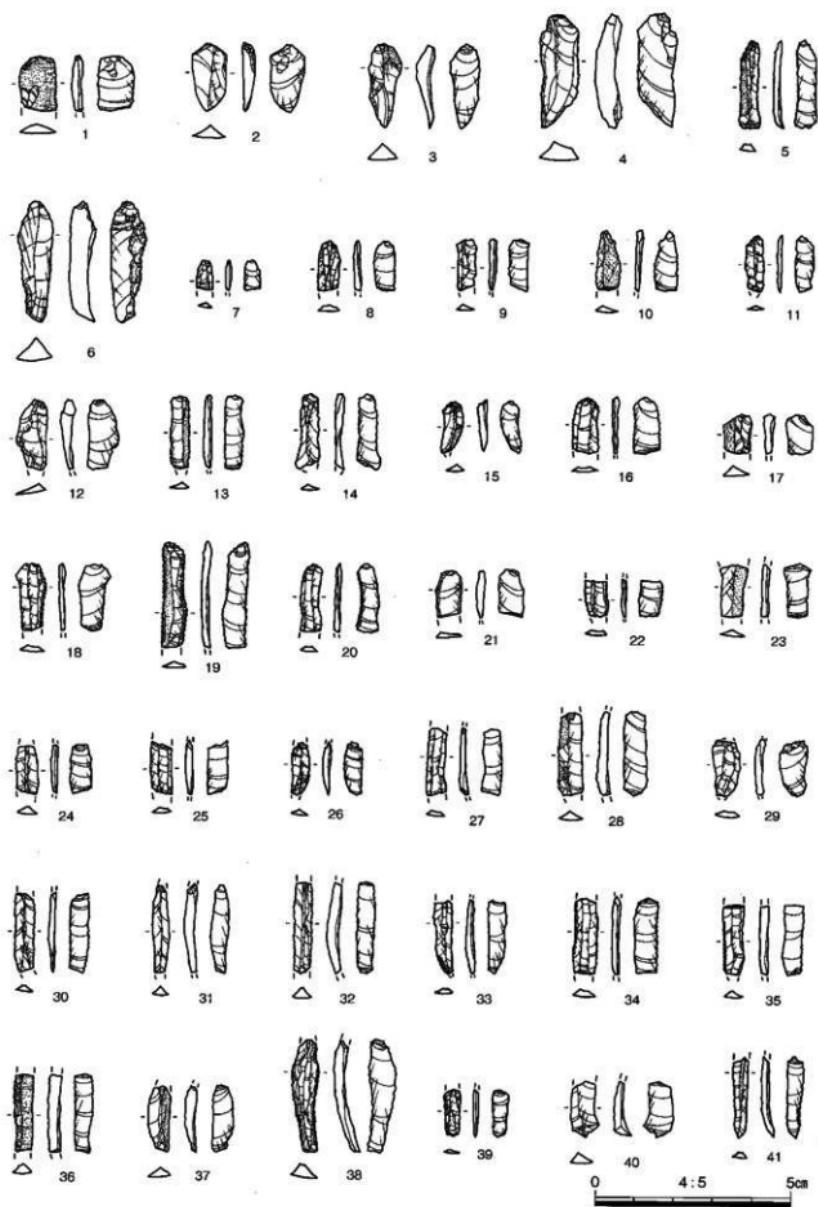
55. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

56. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

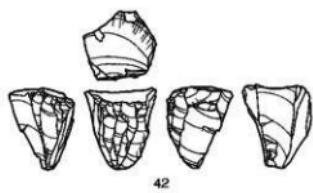
57. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

58. 上新野尻ローム層 I (モヤ)

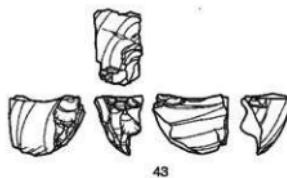
59. 上新野尻ローム層 I (モヤ)



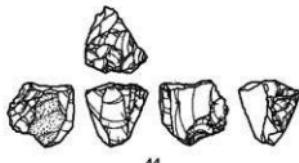
石器图版1 镶石刀石器群(1)



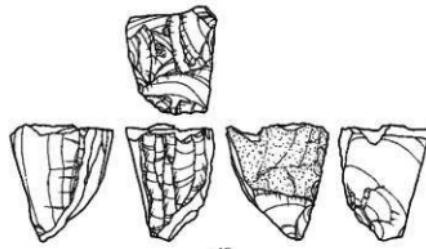
42



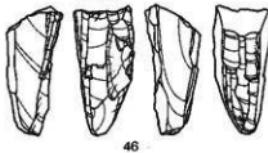
43



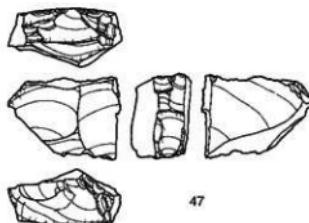
44



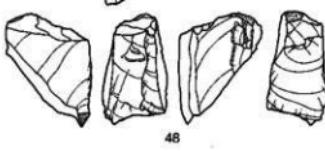
45



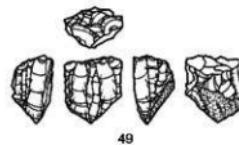
46



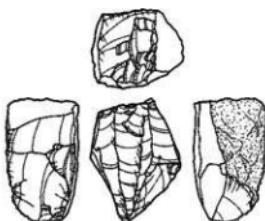
47



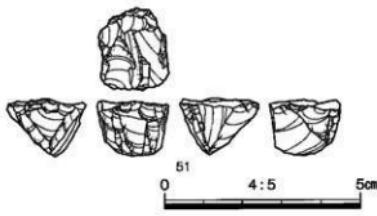
48



49



50



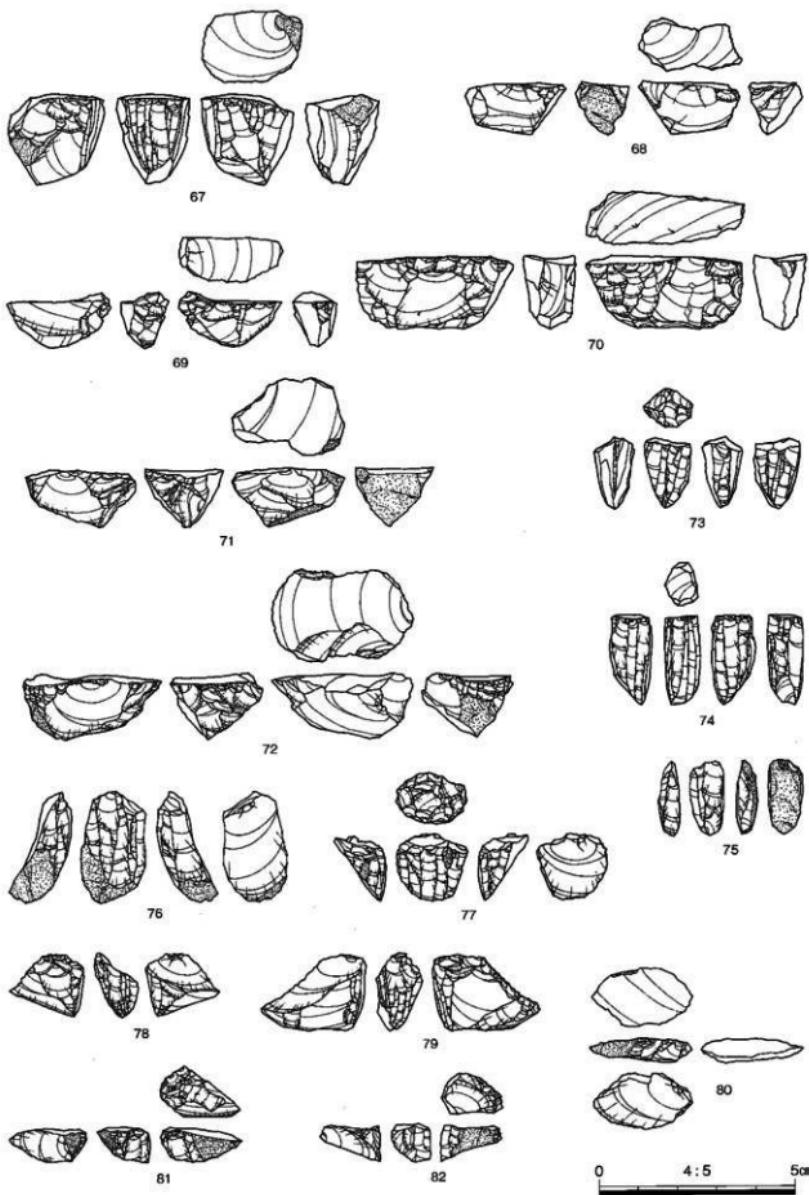
0

4:5

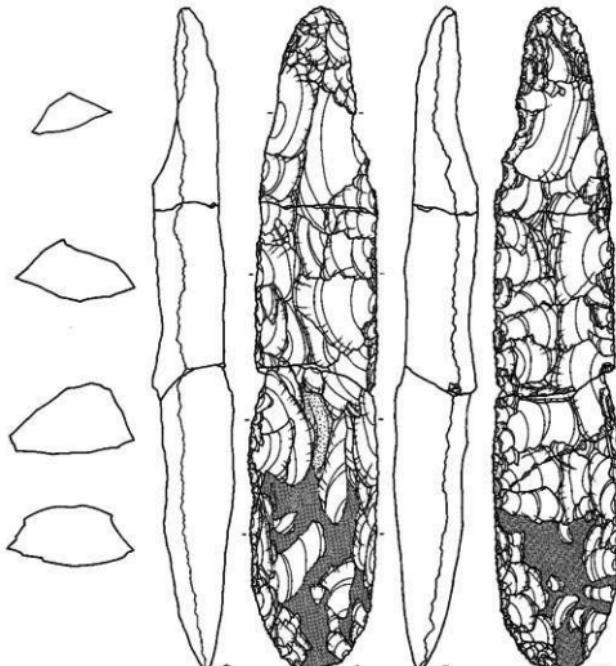
5cm

石器图版2 破石刃石器群(2)

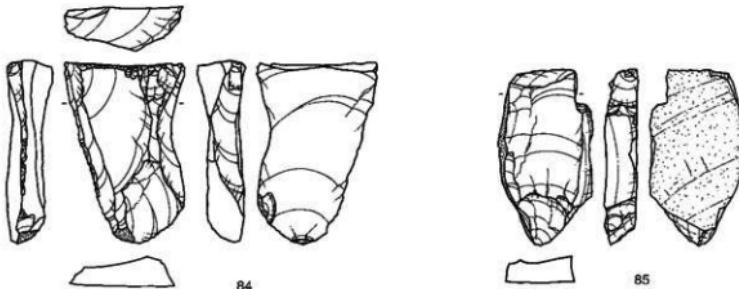




石器图版4 纤石刃石器群 (4)



83

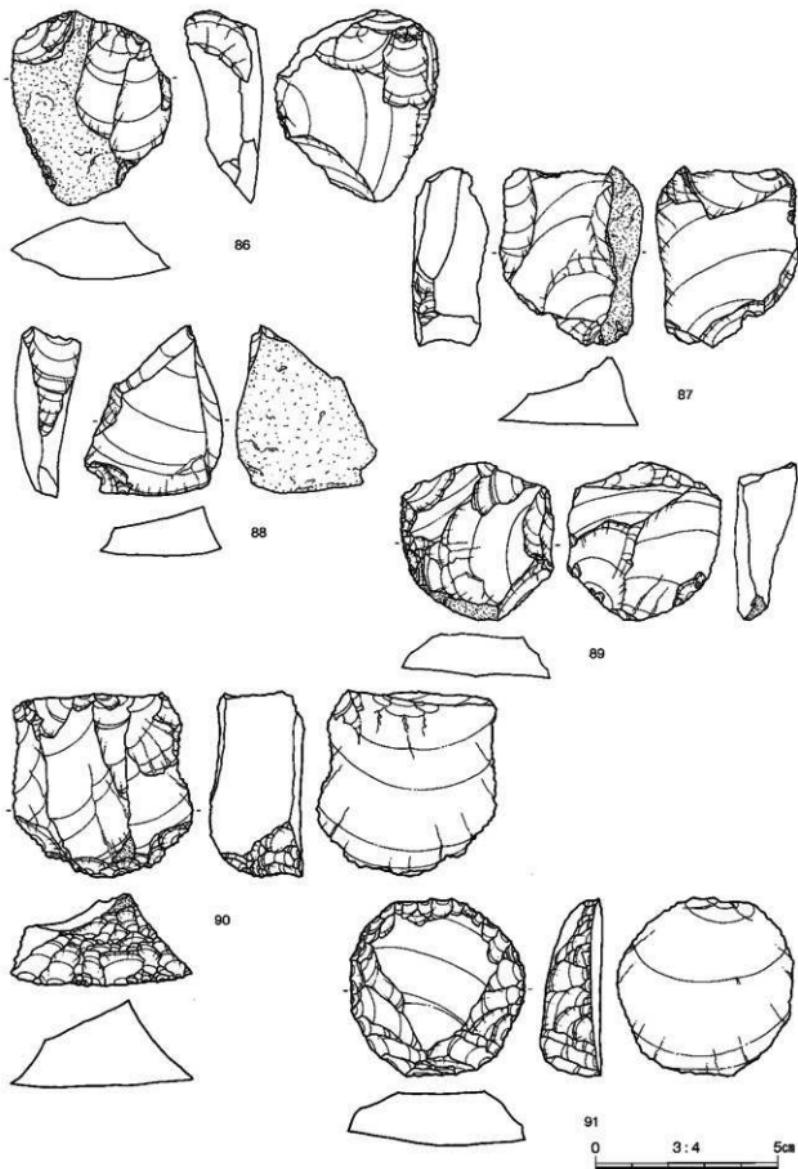


84

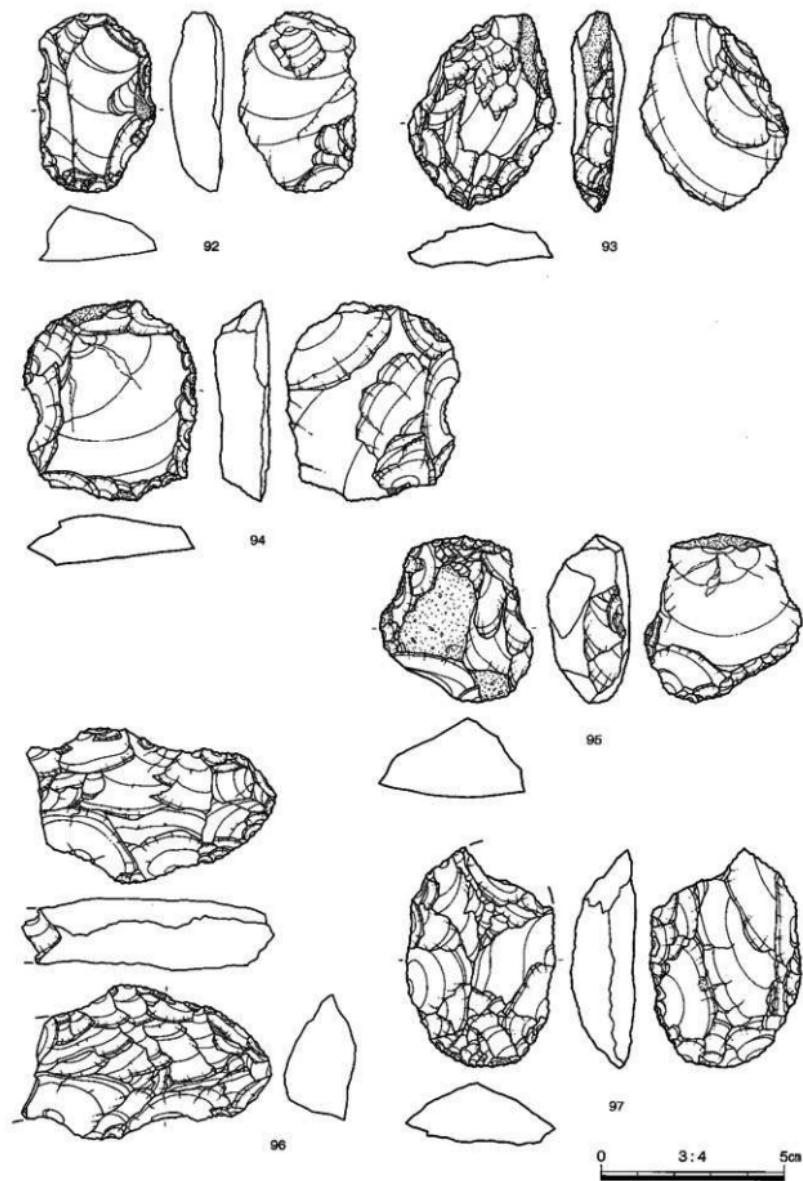
85



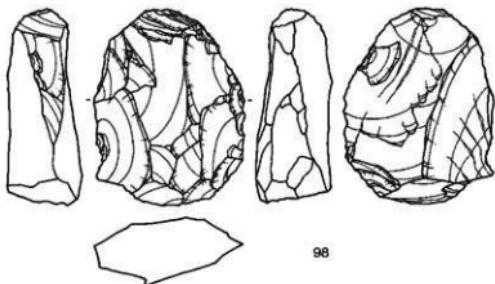
石器图版5 紫石刃石器群(5)



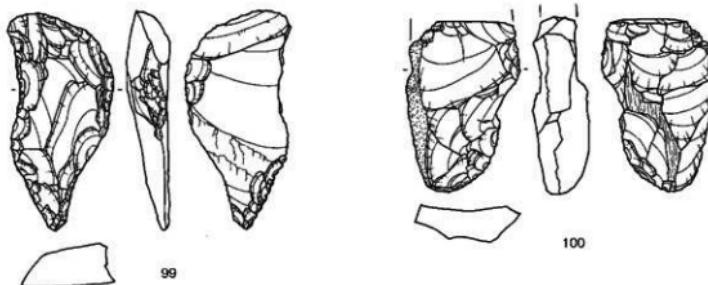
石器图版6 红石刃石器群 (6)



石器图版7 细石刃石器群 (7)

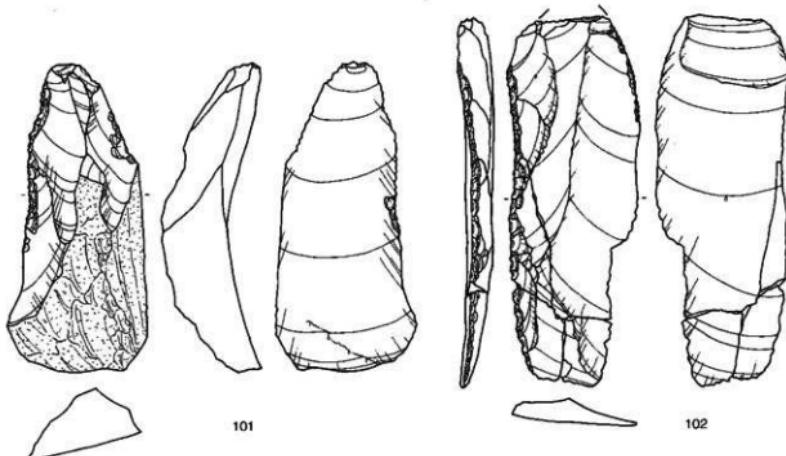


98



99

100

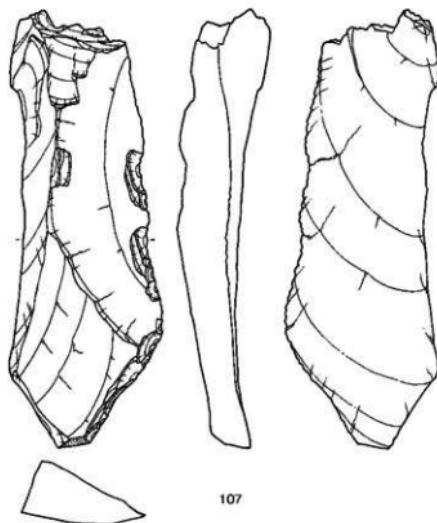
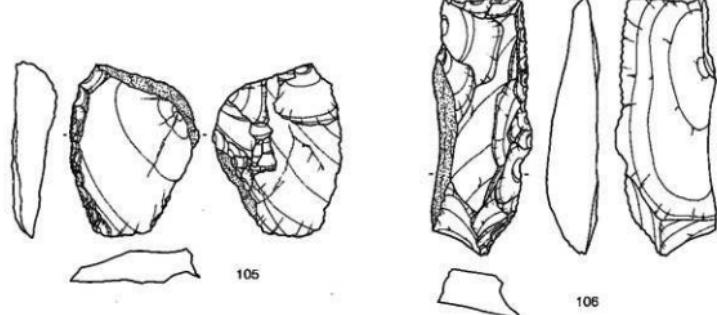
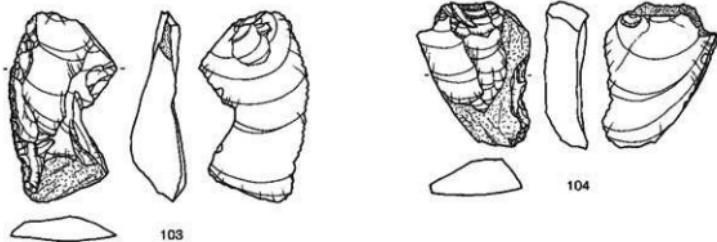


101

102

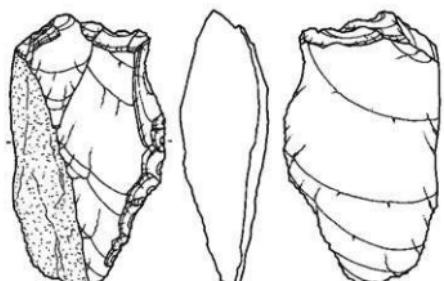
0 3:4 5cm

石器图版 8 翻石刃石器群 (8)

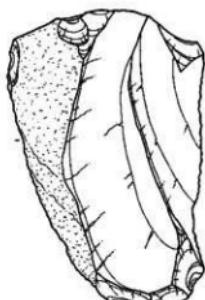
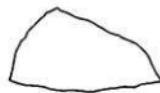


0 3:4 5cm

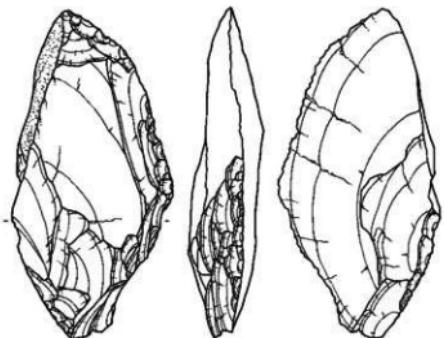
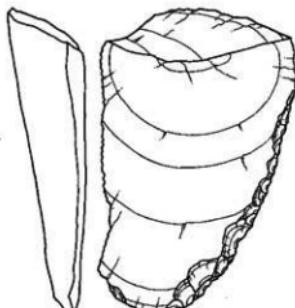
石器圖版9 細石刃石器群 (9)



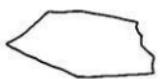
108



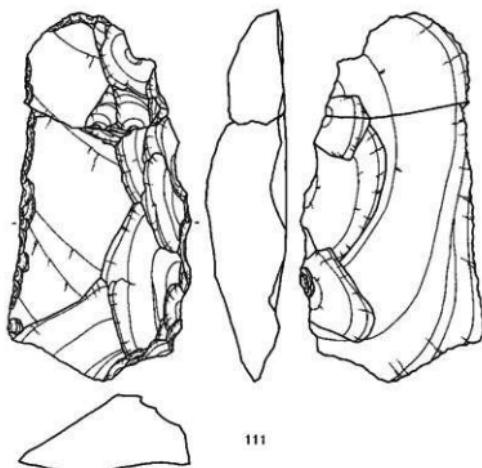
109



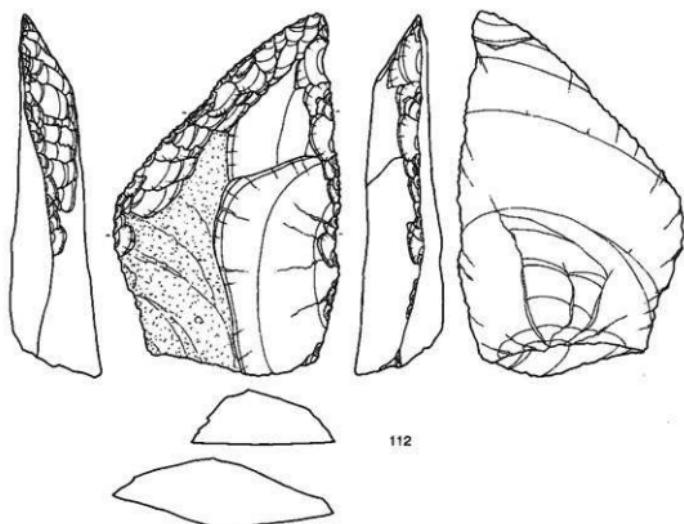
110



石器圖版10 雜石刃石器群 (10)



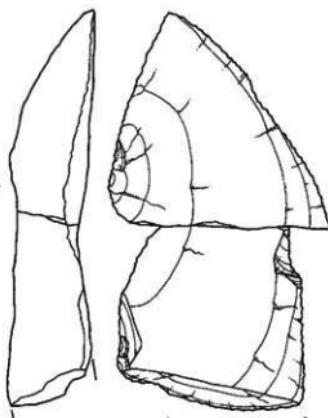
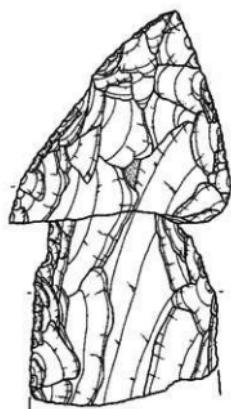
111



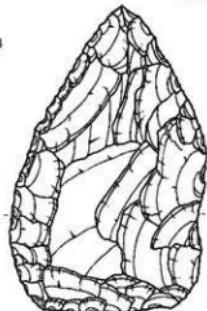
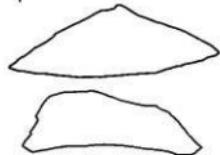
112

0 3:4 5cm

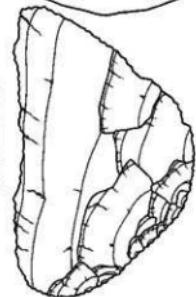
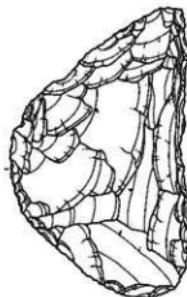
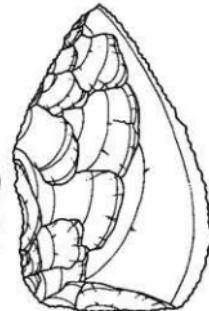
石器图版11 细石刃石核群 (11)



113



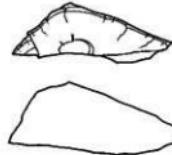
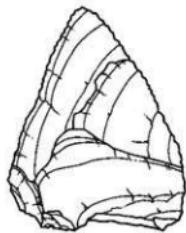
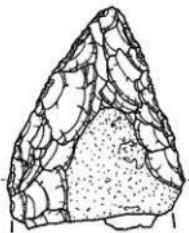
114



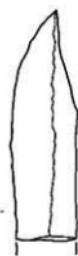
115



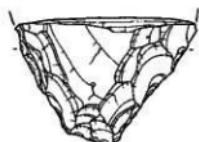
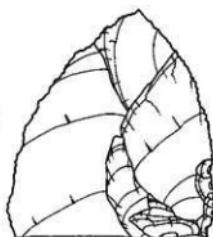
石器圆版12 磨石刃石器群 (12)



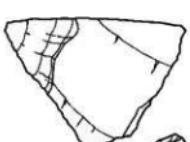
116



117



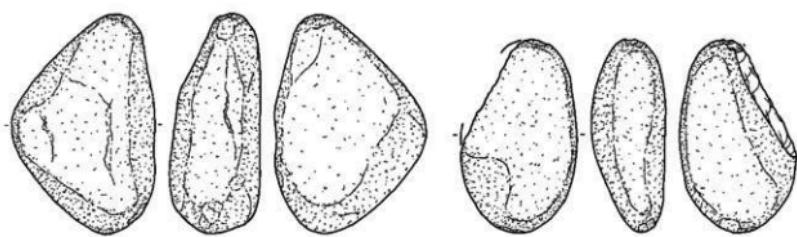
118



119



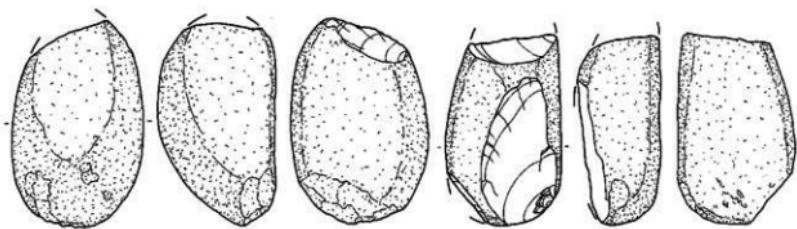
石器图版13 猛犸象牙石器群 (13)



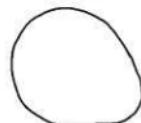
120



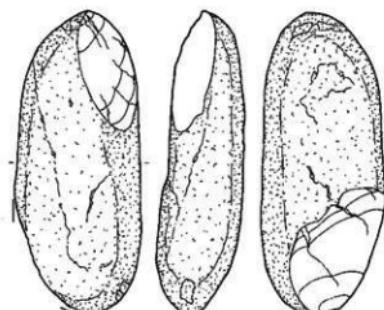
121



122



123

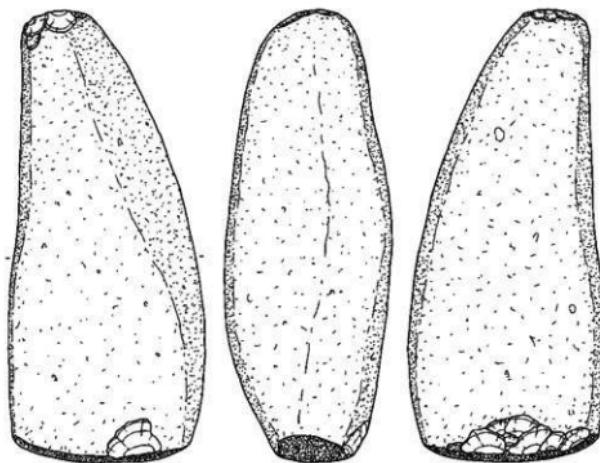


124



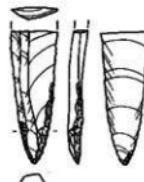
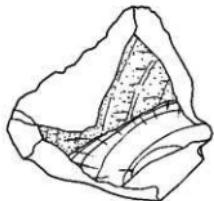
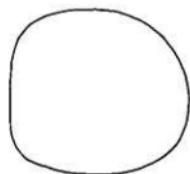
A scale bar at the bottom right of the page, marked with 0, 3:4, and 5cm.

石器图版14 细石刃石器群 (14)

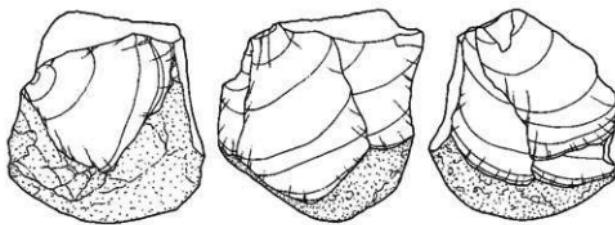


125

Scale bar markings for figure 125, showing 0, 1:2, and 10cm.



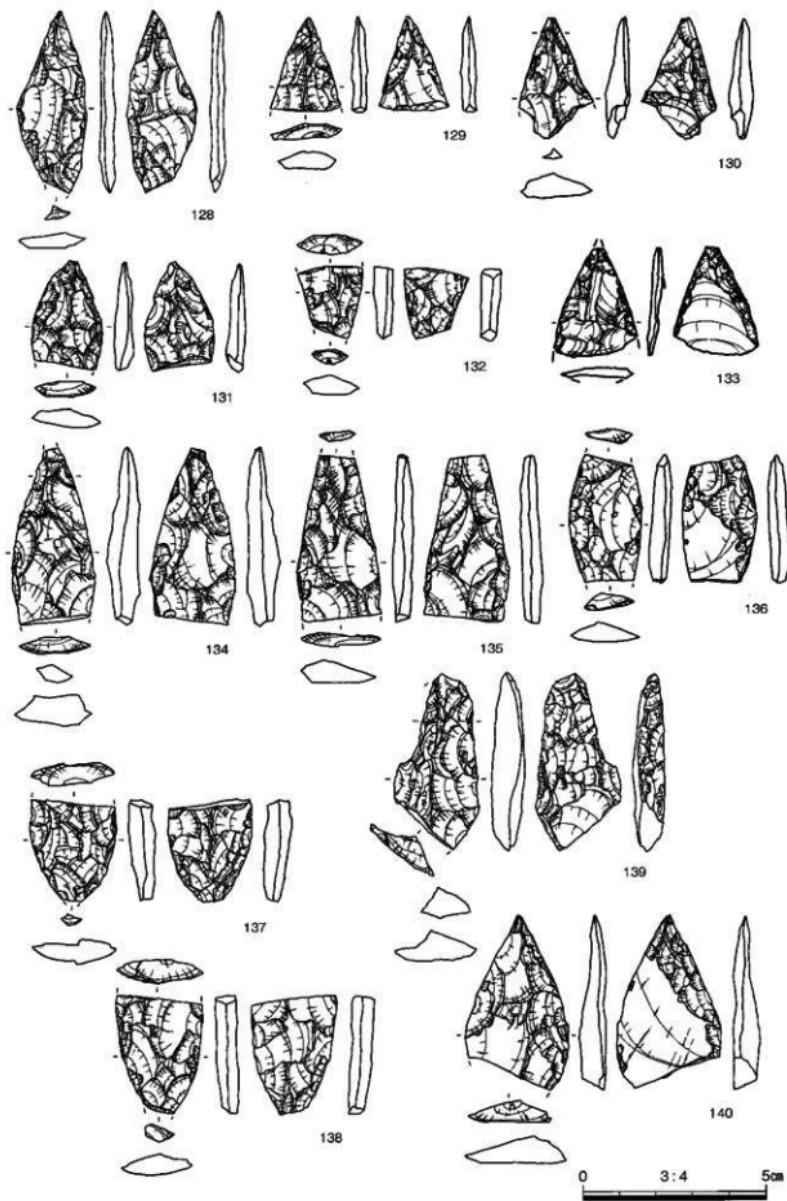
127



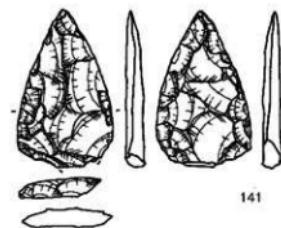
126

Scale bar markings for figure 126, showing 0, 3:4, and 5cm.

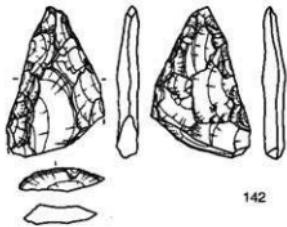
石器図版15 細石刃石器群 (15)・ナイフ形石器群



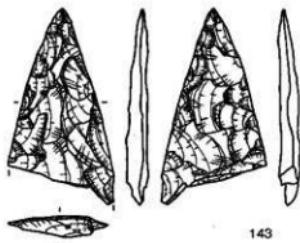
石器圖版16 尖頭器石器群（1）



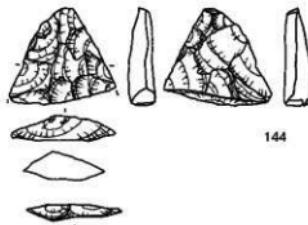
141



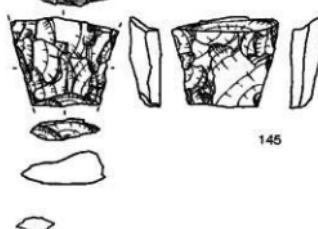
142



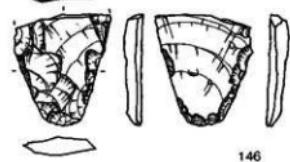
143



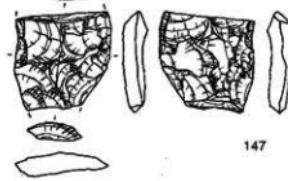
144



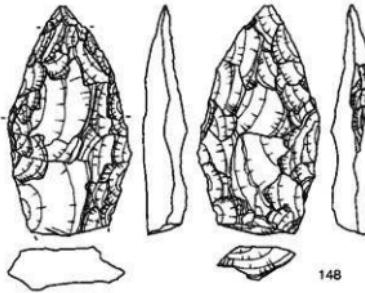
145



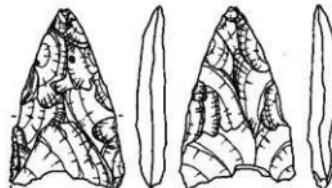
146



147



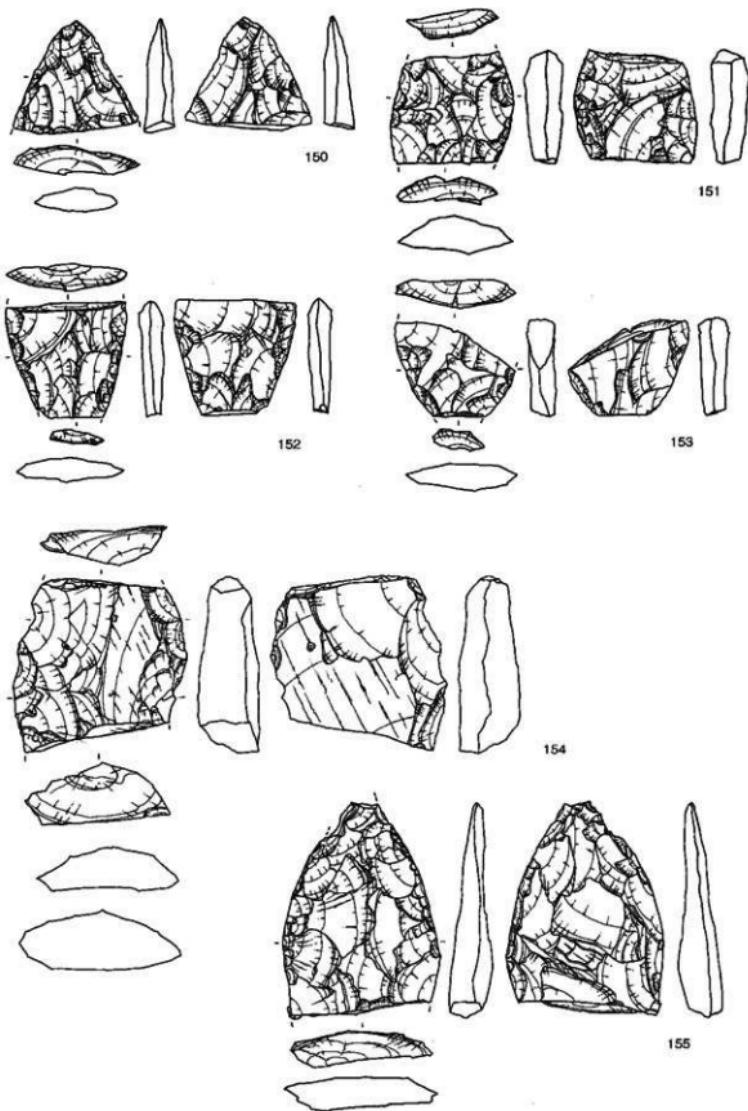
148



149

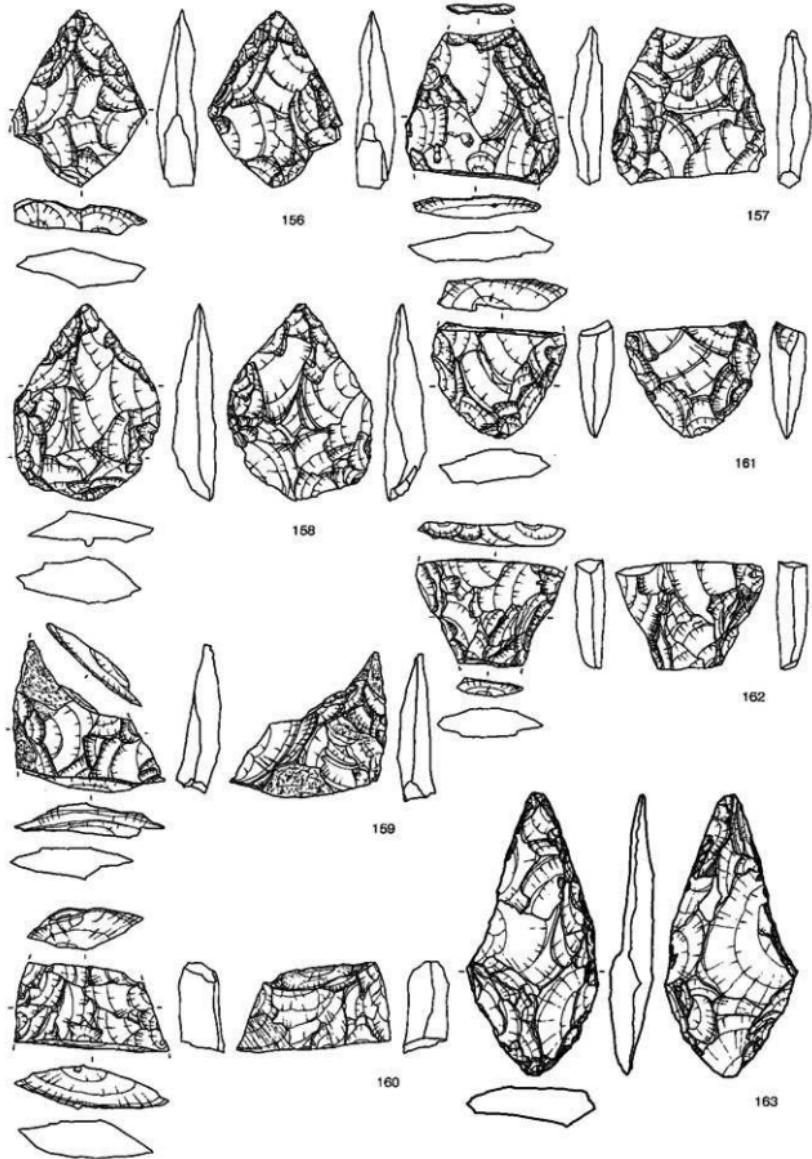


石器圖版17 尖頭器石器群（2）



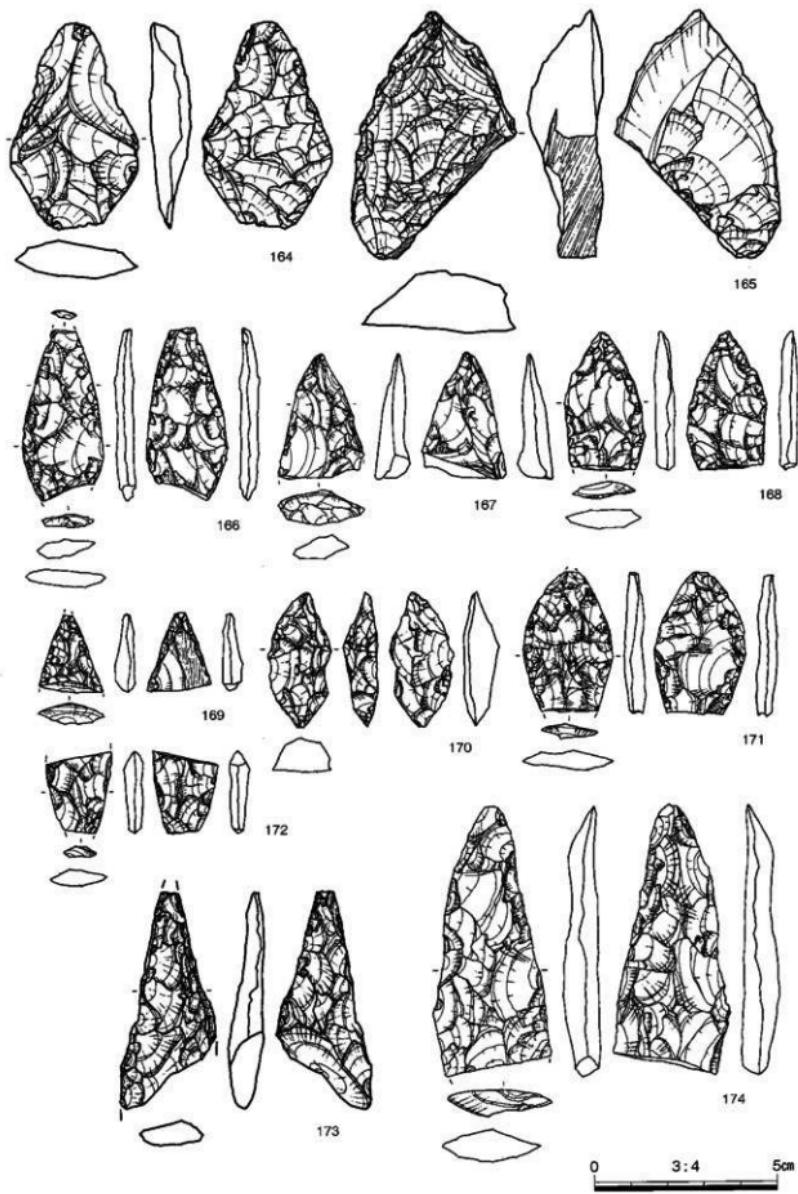
0 3:4 5cm

石器図版18 尖頭器石器群 (3)

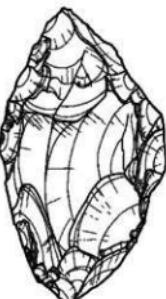


石器图版19 尖头器石器群 (4)

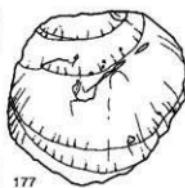
0 3:4 5cm



石器图版20 尖头器石器群 (5)



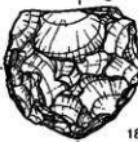
175



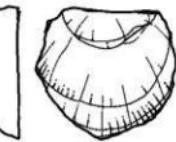
177



178



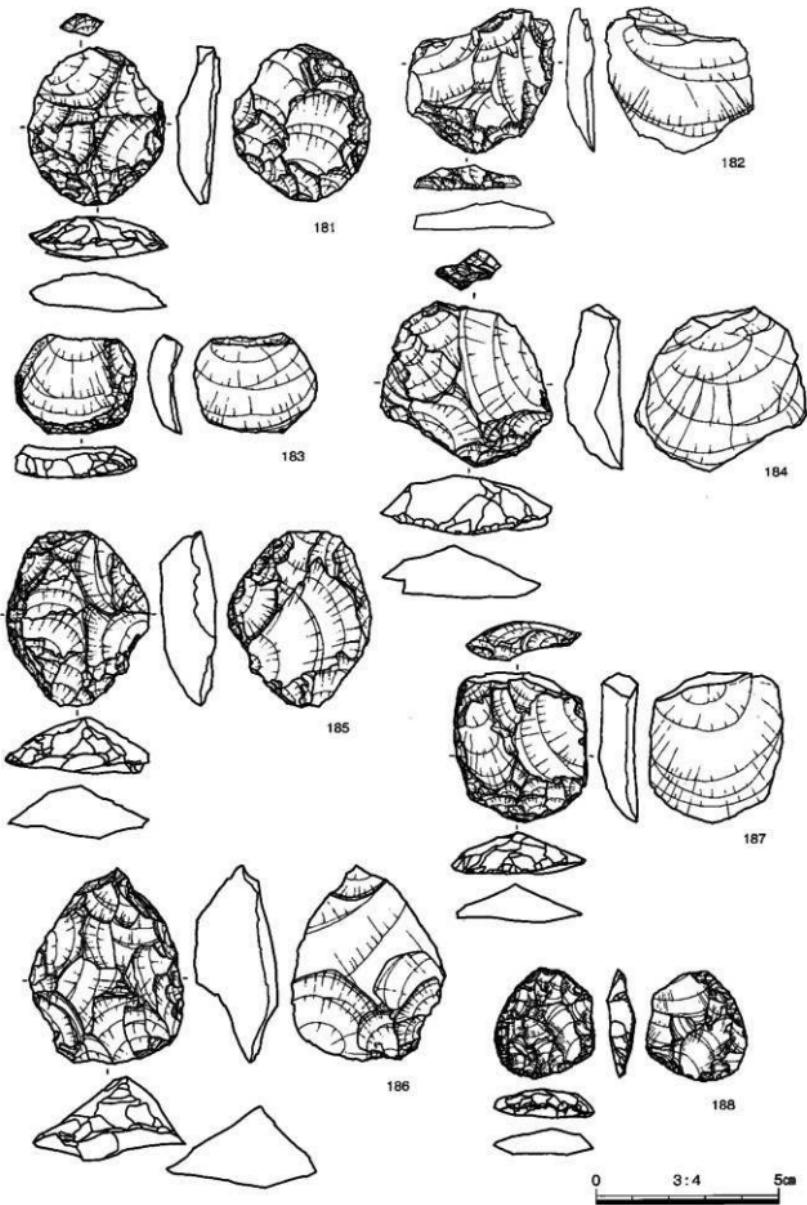
180



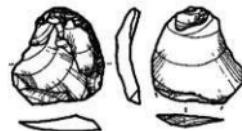
179



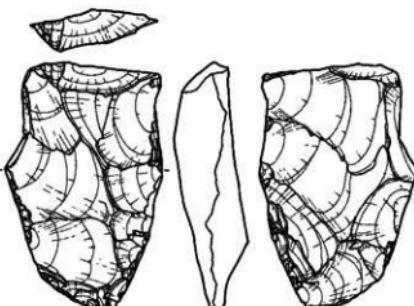
石器图版21 尖头器石器群 (6)



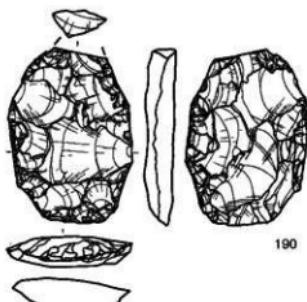
石器图版22 尖顶器石器群 (7)



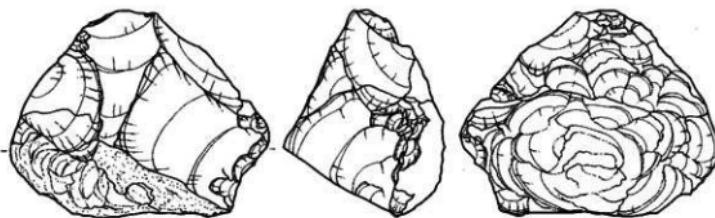
189



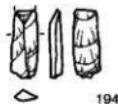
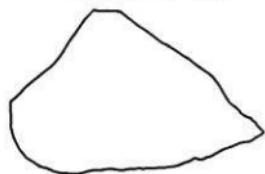
191



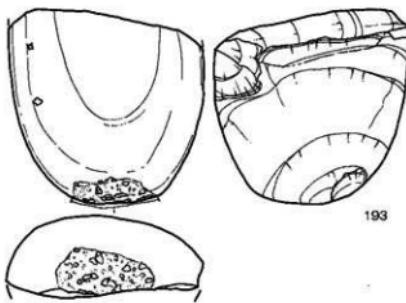
190



192



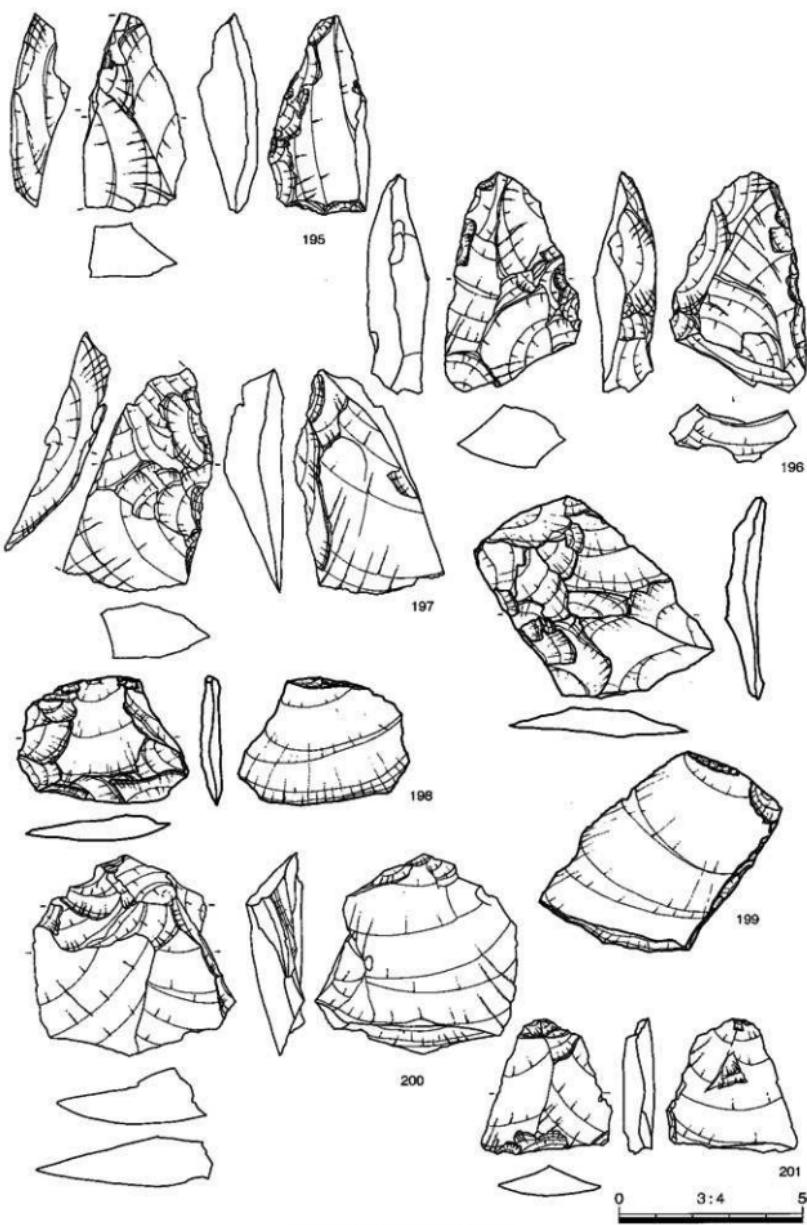
194



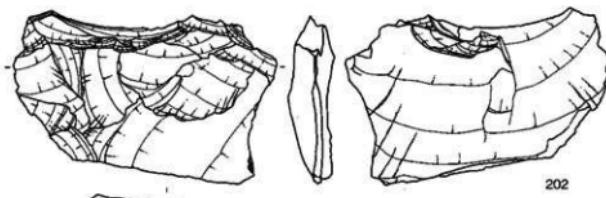
193

0 3:4 5m

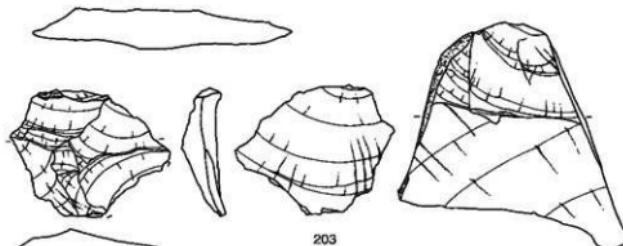
石器圖版23 尖頭器石器群 (8)



石器圖版24 尖頭器石器群（9）

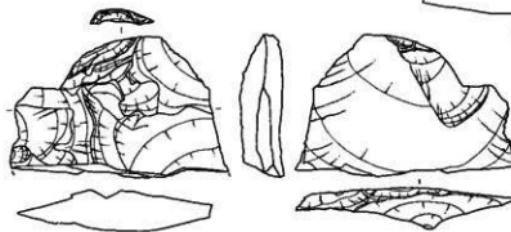


202

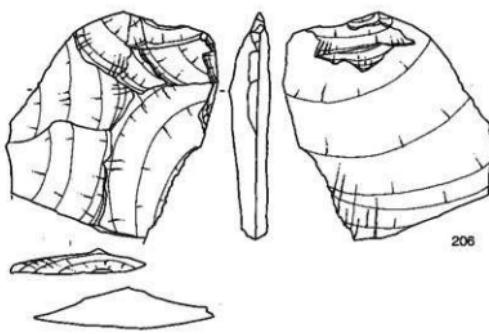


203

205



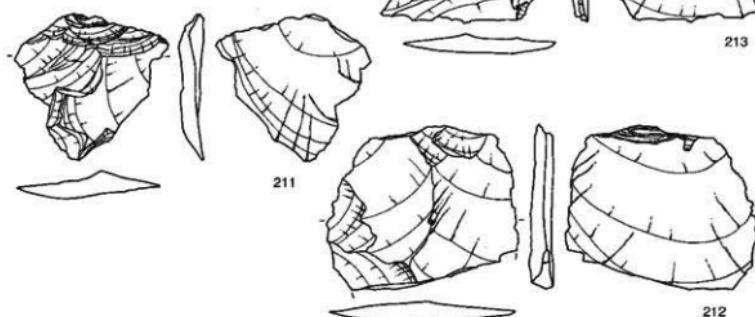
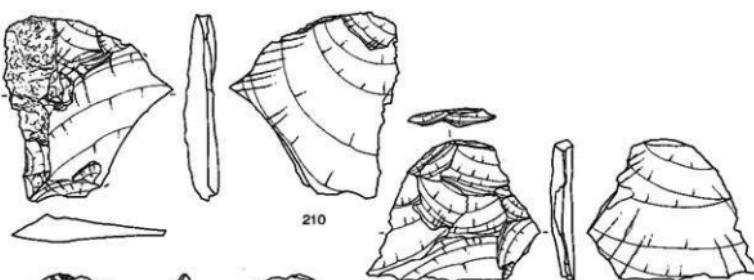
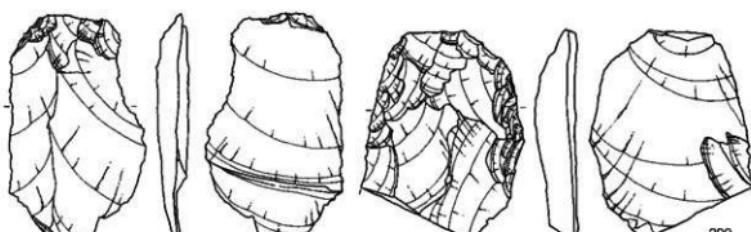
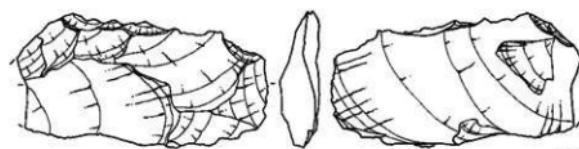
204



206

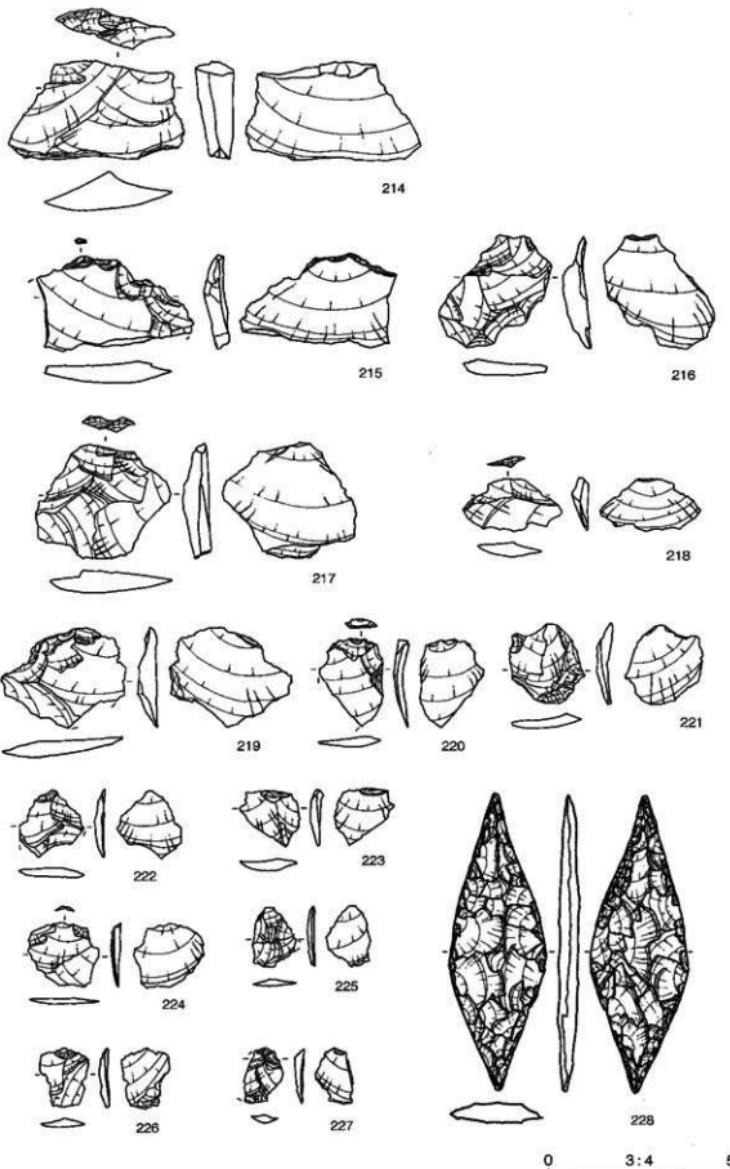
0 3:4 5cm

石器图版25 尖头器石器群 (10)



0 3:4 5cm

石器圖版26 尖頭器石器群 (11)



石器図版27 尖頭器石器群 (12)



上ノ原遺跡（第1次）出土の石囲い炉 北側より



石囲い炉 西側（1号）より

発掘写真 2



1号炉址



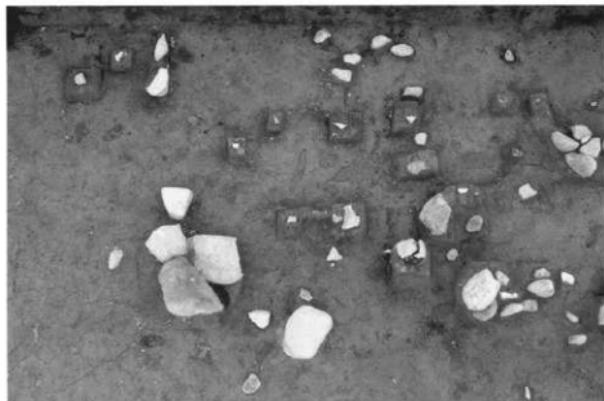
2号炉址



3号炉址



4号炉址



5号炉址



4・5号炉址
北側より

発掘写真 4



発掘地全景 17列 ハウス内に石閉い炉がある（東から）



発掘地とその周辺（南から）



B列



17列



17列の発掘



発掘風景 17列



発掘風景 17列西 (G17グリッド周辺)



発掘風景 17列東 (L16グリッド周辺)



発掘風景 17列西 (G17グリッド周辺)



石圓いが周辺の炭化物記録



石圓いがの記録



石圓いが周辺の古地磁気試料採取



C13グリッド周辺の遺物記録

発掘写真 6



遺跡現地説明会 5月27日



遺跡現地説明会 7月15日



遺跡現地説明会 7月15日



道路現地説明会 7月15日



森鶴稔先生 現地指導



文化庁岡村道雄文化財調査官 現地指導



旧石器研究者の現地検討会 6月17日



発掘参加者の皆さん



G17グリッド周辺 配石遺構



L16グリッド周辺 遺物出土状況



細石刃（34）



細石刃（6）



細石刃石核（66）



細石刃石核（46）



石核（126）



2号炉址と局部磨製石斧（83）の出土状況（右側）

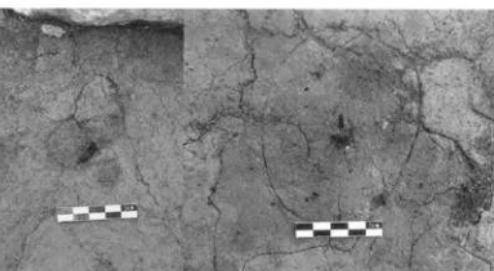


局部磨製石斧（83・刃部破片）の出土状況

発掘写真 8



局部磨製石斧（83・中央部破片）の出土状況

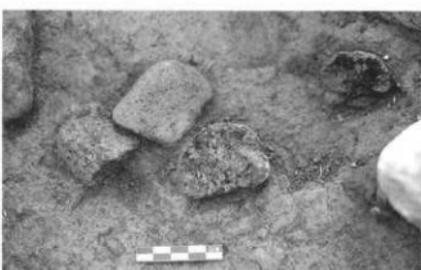


炭化物

炭化物



炉址の礫 焼けて赤化している



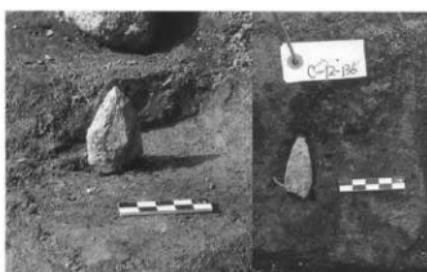
炉址の礫 黒色付着物がみられる



C13グリッド周辺の尖頭器石器群の出土状況



3号礫群 (D13グリッド)



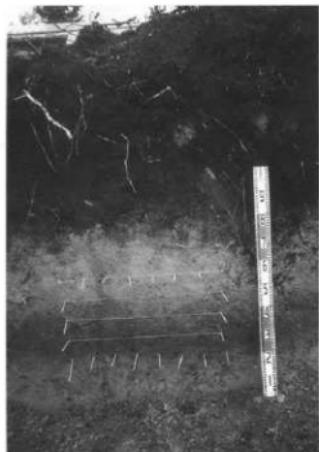
尖頭器 (148)

C13-148

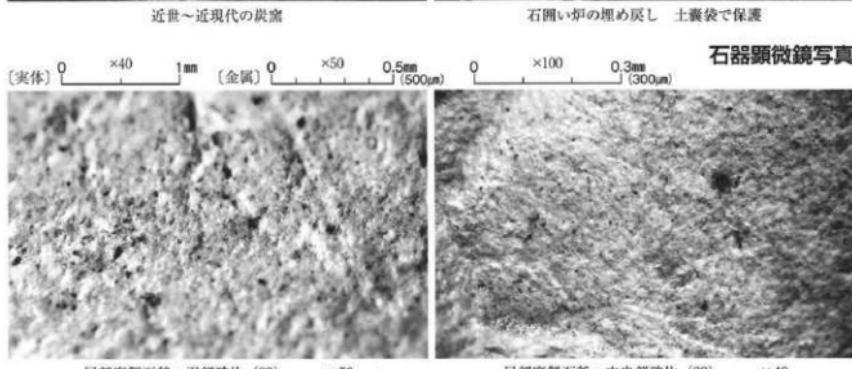
尖頭器 (166)



3号礫群 側面



H18グリッド南壁 木の根等のかく乱がみられる



石器顕微鏡写真

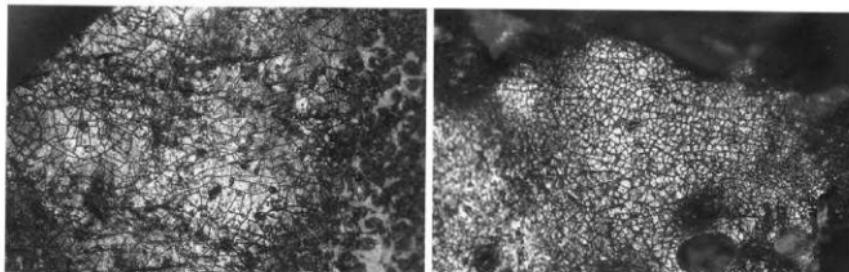
局部磨製石斧・刃部破片 (83)

$\times 50$

局部磨製石斧・中央部破片 (83)

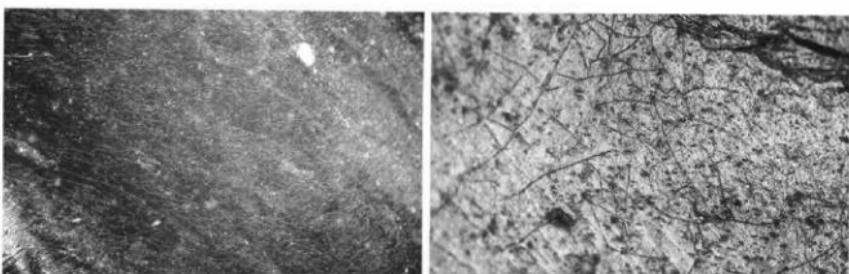
$\times 40$

顕微鏡写真 2



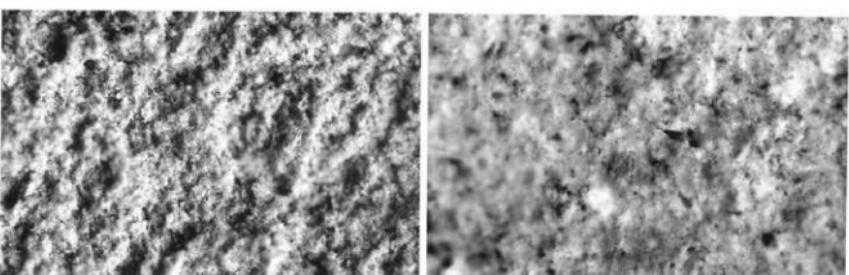
被熱石器 細石刃石核 (43) 黑曜石 ×50

被熱石器 細石刃石核 (65) 黑曜石 ×50



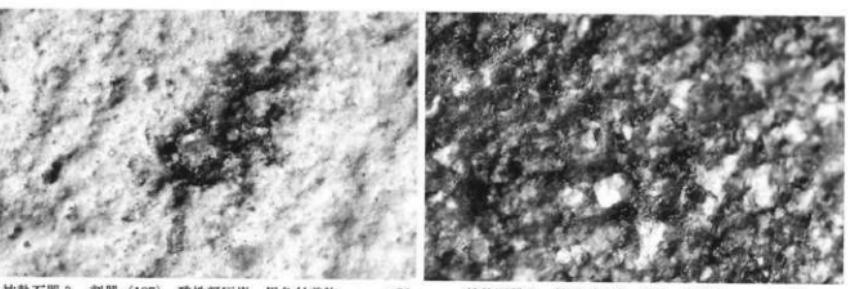
被熱石器 尖頭器 (168) 黑曜石 ×40

被熱石器 尖頭器 (168) 黑曜石 ×100



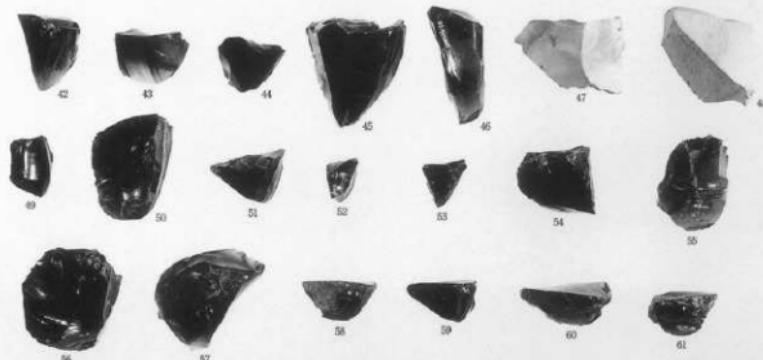
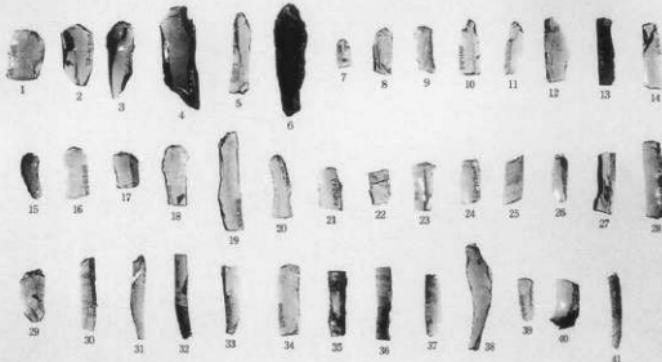
被熱石器？ 搢器 (91) 無斑晶質安山岩 ×100

被熱石器？ 搢器 (93) 酸性凝灰岩 ×100



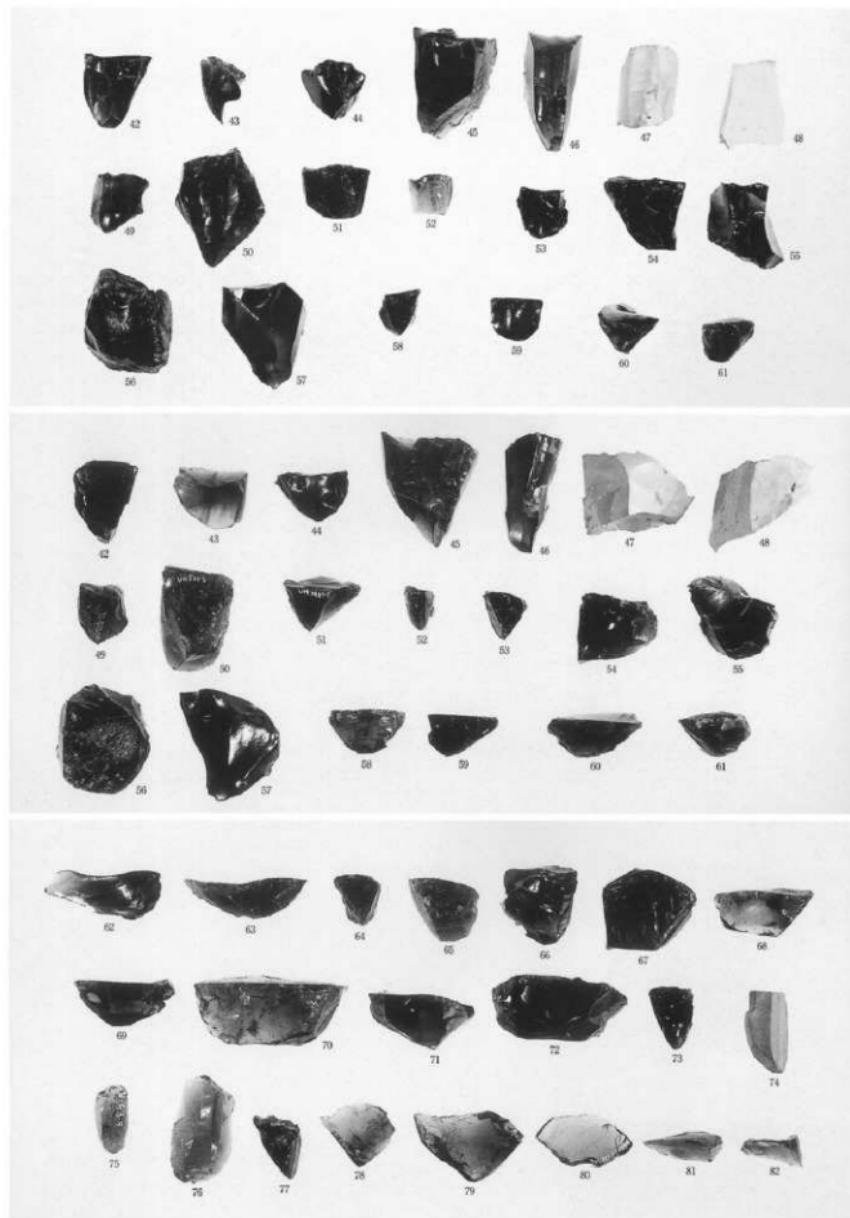
被熱石器？ 削器 (107) 酸性凝灰岩 黑色付着物 ×50

被熱石器？ 鋸石 (124) 砂岩 棕色化 ×50

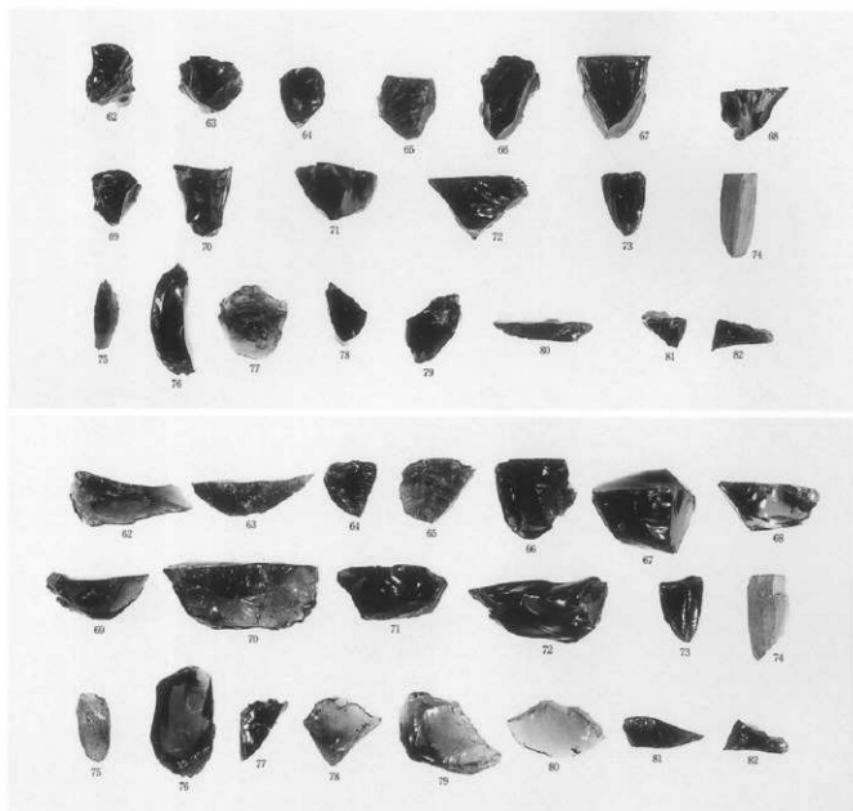


細石刃石器群 細石刃、細石刃石核 (4 : 5)

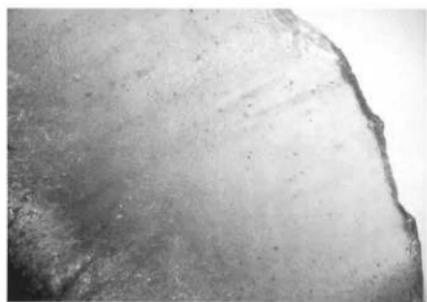
石器写真 2



縞石刃石器群 縞石刃石核 (4 : 5)



石器顕微鏡写真 黒曜石



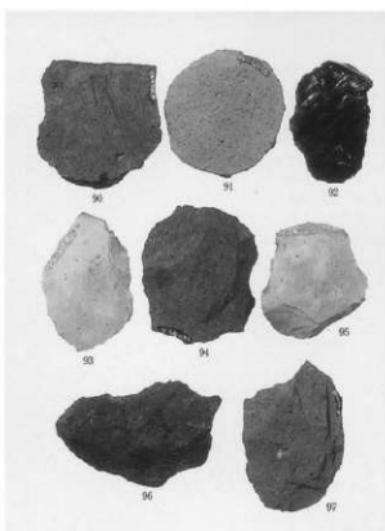
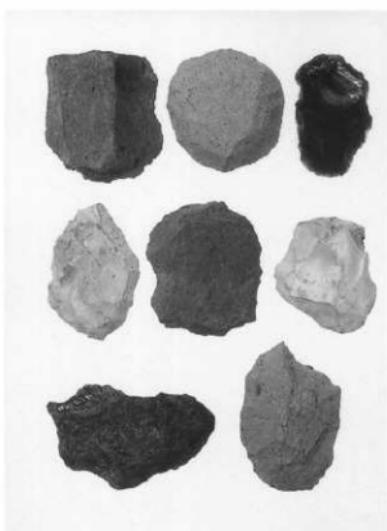
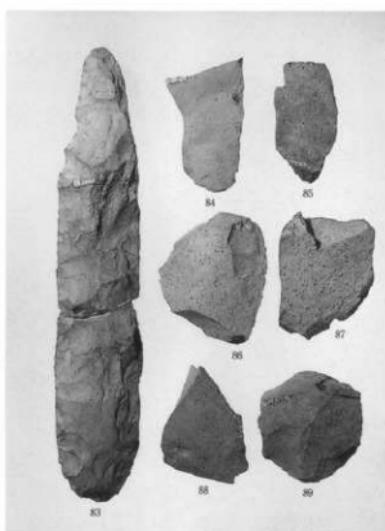
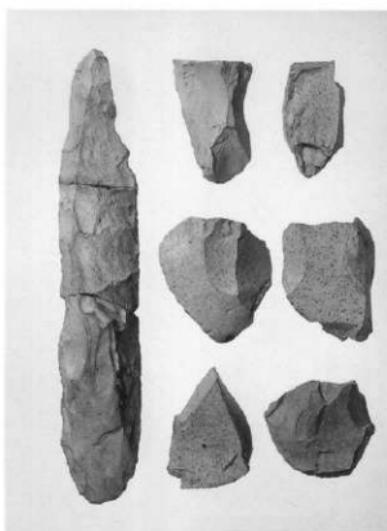
被熱石器 細石刃石核 (43)

×40

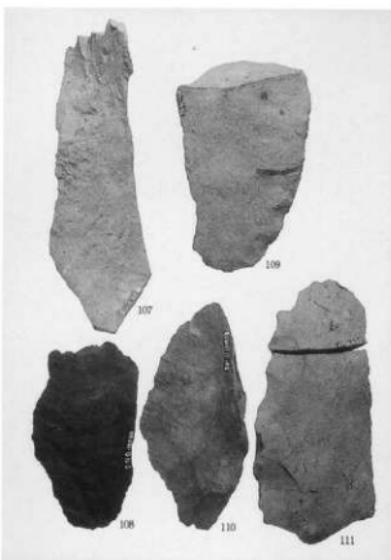
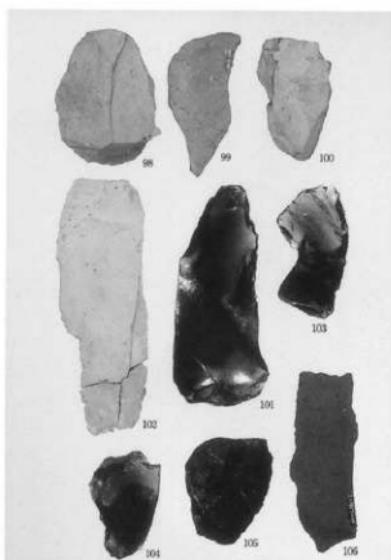
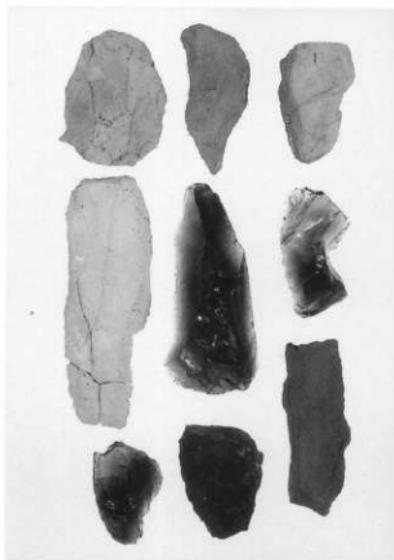


被熱石器 細石刃石核 (65)

×40

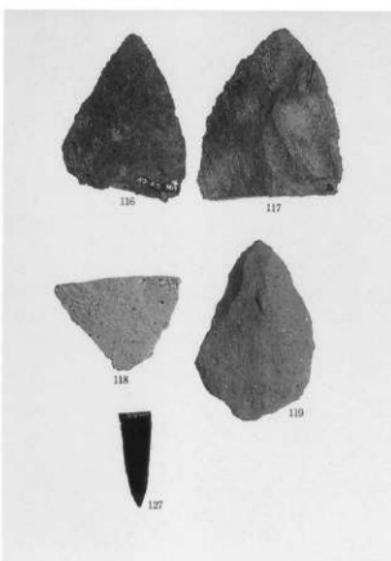
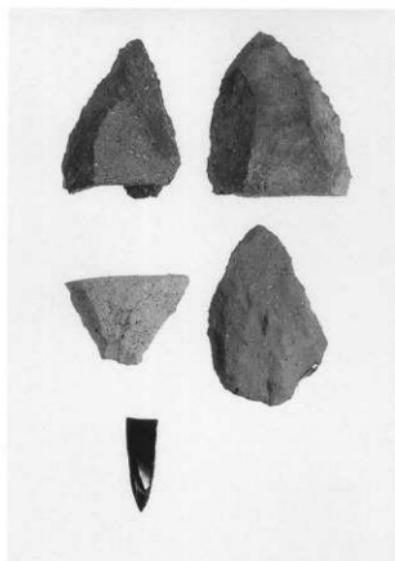
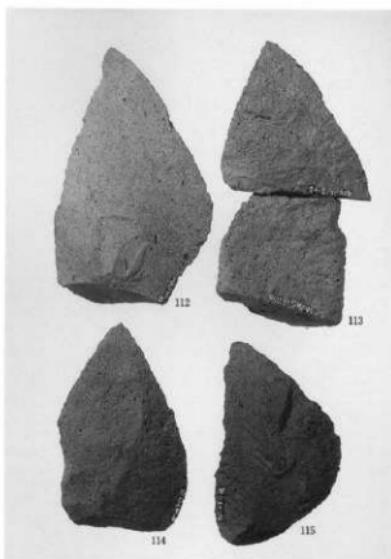
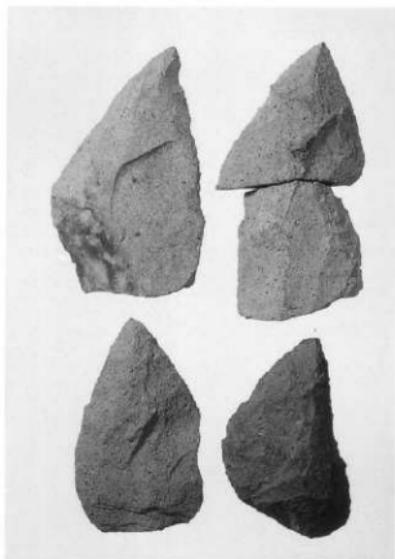


細石刃石器群 局部磨製石斧、形器、搔器 (1 : 2)

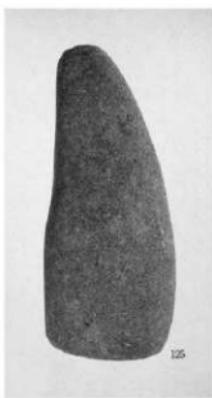
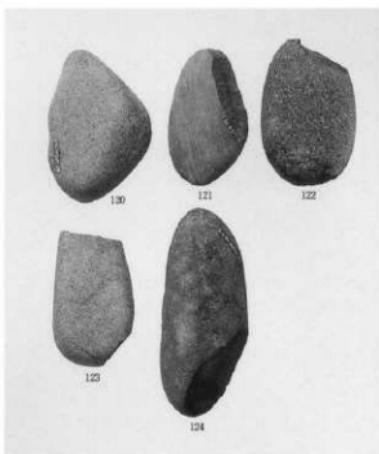


細石刃石器群 搢器、削器 (1 : 2)

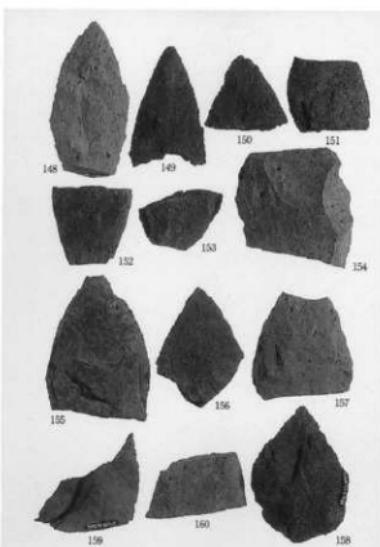
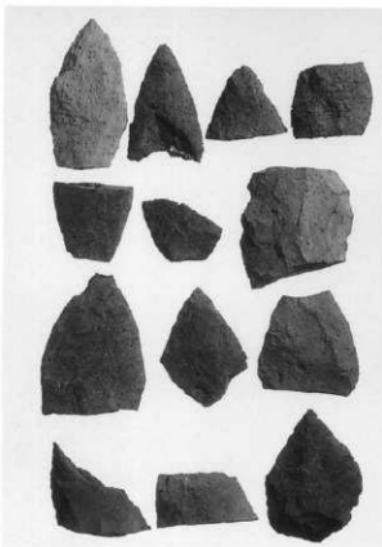
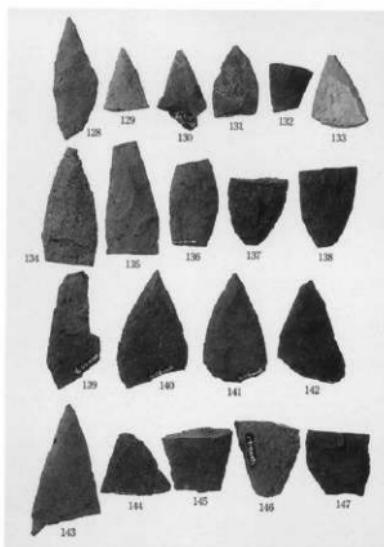
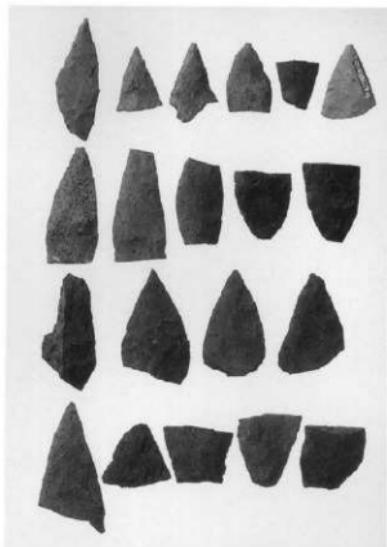
石器写真 6



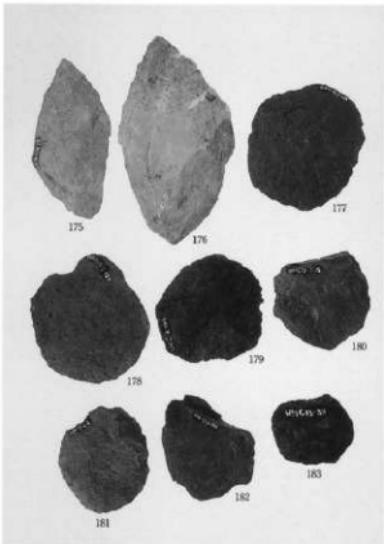
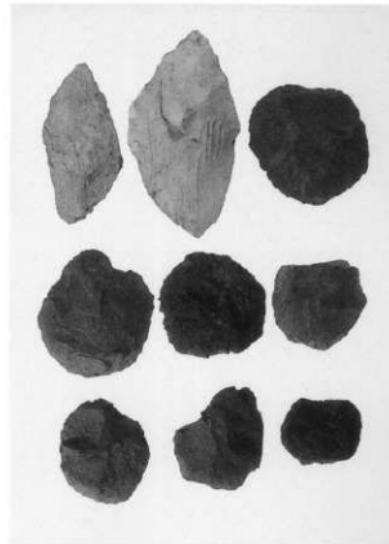
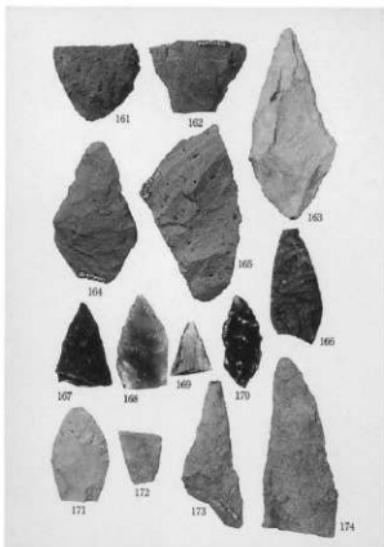
網石刃石器群 削器, 127ナイフ形石器群 ナイフ形石器 (1 : 2)



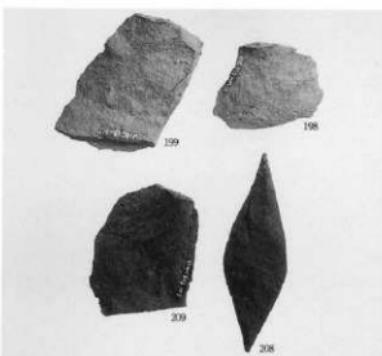
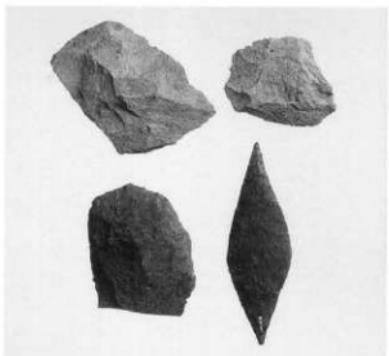
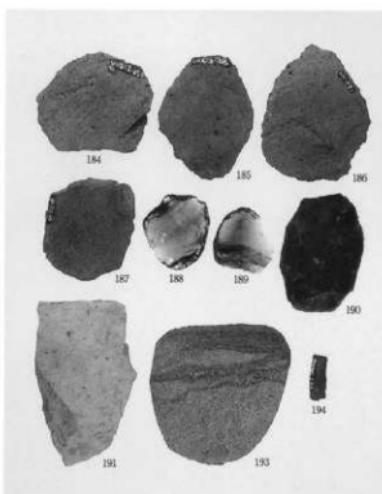
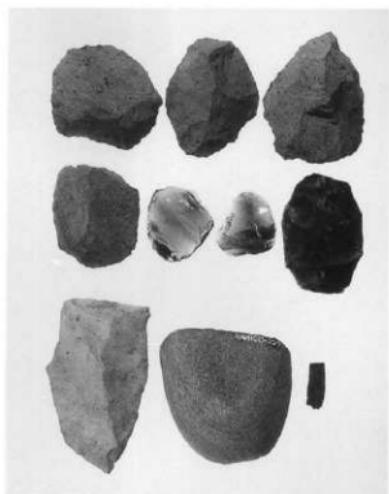
細石刃石器群 敲石 (1 : 2), 125 (1 : 3)



尖頭器石器群 尖頭器 (1 : 2)



尖頭器石器群 尖頭器、搔器 (1 : 2)



尖頭器石器群 搗器、削器、敲石、刮片、尖頭器 (1 : 2)

S U M M A R Y

Nojiri-ko site cluster, which is composed of 44 archaeological sites, is located on the western shore of the Lake Nojiri, and each site stands within the adjacent area. The Uenohara site (the first excavation site) is located at Uenohara and Okami, Kashiwabara, Shinano-machi, in the North of Nagano prefecture, Central Japan. It is situated on lat. 36° 48' 56.9" N, long. 138° 11' 50.77" E., and is between 706.5 and 710 meters above sea level. The excavation was carried out from May 1 1990 to July 31 1990, by the Shinano Town Board of Education. The total excavation area is approximately 750 m².

The remains that totaled 2,932 were excavated. Most of the artifacts from the Uenohara site belong to the last stage of the Late Palaeolithic Period (about 14,000 yr.B.P.). These artifacts were discovered from the uppermost horizon of the Upper Nojiri Loam Member II, "Moya".

The results of the excavation are as follows.

1) "The Micro-blade industry"

The 1,197 pieces of stone tools, fragments and gravels found, at this site consisted of 41 micro-blades, 41 micro-blade cores, 6 gravers, 30 scrapers, 1 core, 6 hammer stone, 1 edge-ground axe. The main lithic materials used for the artifacts are: obsidian, tuff, and andesite.

2) "The Point industry"

The 1,735 pieces of stone tools and fragments, and gravels found, here consisted of 48 points, 16 scrapers, 1 core, and 1 hammer stone. The main lithic materials used for the artifacts are: andesite.

3) Five stone-lined hearths in the Microlithic age were put from east to west. Because the discovery example is few, a palaeolithic feature is very valuable.

報告書抄録

書名	上ノ原遺跡（第1次・北部高校分校跡地地点）発掘調査報告書							
副書名	細石刃石器群・石圓い炉をもつ遺跡							
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財							
シリーズ番号								
編著者名	中村由克・菅沼亘・土橋由理子							
編集機関	信濃町教育委員会							
所在地	389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL 026-255-5923							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ原遺跡	長野県上水内郡信濃町大字柏原字上ノ原・岡美	205834	65	36°48'59.57"(36°48'48.52")	138°11'50.77"(138°12'02.02")	900501 ～ 900731	750m ²	畠地開墾事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
上ノ原遺跡	散布地	旧石器時代	石圓い炉、砾群、配石、ブロック	細石刃、細石刃石核、彫器、石刃、搔器、削器、敲石、局部磨製石斧、尖頭器	後期旧石器時代末の細石刃石器群と尖頭器石器群が多数出土した。 細石刃石器群に伴う石圓い炉5基が東西方向に直線状にならんで検出されたことは特筆される。			

但北緯・東経は世界測地系による。() 内に旧日本測地系を示す。

信濃町の埋蔵文化財

上ノ原遺跡 (第1次・北部高校分校跡地地点) 発掘調査報告書

— 細石刃石器群・石圓い炉をもつ遺跡 —

編集発行 信濃町教育委員会
長野県上水内郡信濃町柏原428-2

発行日 2008年3月31日

印刷 信毎書籍印刷株式会社

【この報告書についての連絡先】

野尻湖ナウマンゾウ博物館

〒389-1303 長野県上水内郡信濃町野尻287-5

TEL 026-258-2090

FAX 026-258-3551

Archaeological Reports of Shinano-machi

Uenohara Site (1st Excavation)

Excavation of the Late Palaeolithic Site

2008

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.